## 来住・久米地区の遺跡II

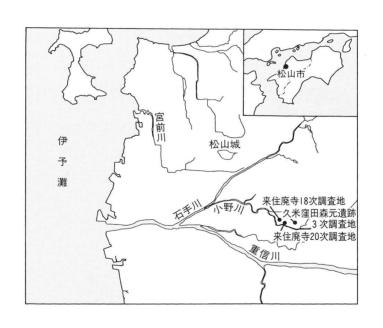
来住廃寺18·20次 久米窪田森元3次

1994

松山市教育委員会 財団法人松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター

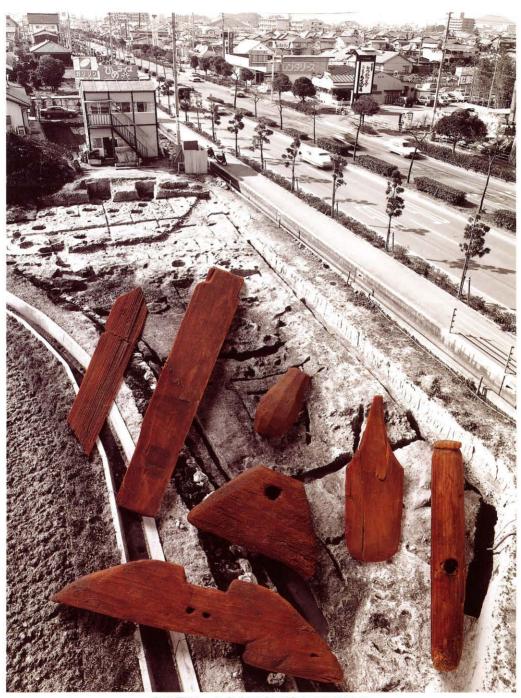
## 来住·久米地区の遺跡II

来住廃寺18·20次 久米窪田森元3次



1994

松山市教育委員会 財団法人松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター



巻頭図版 久米窪田森元遺跡 3 次調査地

本書は、平成4年度に財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが来住地区で緊急調査しました3遺跡の発掘調査報告書です。

松山平野の東部に位置する本遺跡群は、小野川と堀越川に挟まれた来住台地 上に立地する巨大集落群の中にあります。近年、この地域における発掘調査は、 急増する宅地開発に伴って増え続けているのが現状です。

今回報告します来住廃寺18次調査からは、弥生時代から中世に跨る甕や碗などの遺物を出土し、20次調査では集落の存在を示唆する弥生時代前期末の環壕の一部を確認しています。また、久米窪田森元遺跡3次調査からは、松山市ではあまり出土例がない7~8世紀中頃と推定される木簡、木器類が発見され、それらと共に植物遺体も多量に検出されています。

これらのことにより、来住台地における弥生時代前期の集落構造が充実していたこと、古代に係わる、殊に官衙に関係すると思われる資料が確認されたことなど、貴重な成果を得ることができました。

これらの調査結果は、当地域の遺跡群における未調査区域や未解明部分が山積する中にあって、それらの基礎的資料となるものと思われます。今後一層の調査研究が期待されるところであります。

こうした成果をあげることができましたのも、埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力をたまわった関係各位のお陰と感謝申し上げ、今後ともなお一層のご指導、ご助言をお願い申し上げる次第であります。

また、本書が埋蔵文化財調査研究の一助となり、ひいては文化財保護、教育文化の向上に寄与できることを願っております。

平成 6 年10月31日

財団法人 松山市生涯学習振興財団 理事長田中誠 一

#### 例 言

- 1. 本書は、松山市教育委員会及び(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成4年~5年の間に、松山市来住町及び久米窪田町内で実施した3遺跡についての発掘調査報告書である。
- 2. 遺構の略号は、住居址: SB、土壙: SK、溝: SD、自然流路: SR、棚列: SA、 柱穴: SPとし、遺跡ごとに通し番号を1から付記した。
- 3. 遺構の測量は、調査担当者及び担当者の指示のもと補助員が実施した。
- 4. 遺物の実測及び掲載図の製図は、梅木謙一の指示のもと、水口あをいを中心に岡根なおみ、岡崎政信、丸山美和、新出寿美子、山下満佐子、松山桂子、三木和代、大西陽子、 好光明日香、兵頭千恵、渡部芙美が行った。なお、石器の実測は加島次郎が行った。
- 5. 掲載の遺構図・遺物図は、スケール下に縮尺を表記した。
- 6. 写真図版は、遺構の撮影は担当者が、遺物の撮影は大西朋子が担当し、図版作成は担当者と協議のうえ大西朋子が行った。
- 7. 本書の執筆は西尾幸則、梅木謙一、宮内慎一、山本健一、水本完児、加島次郎、岡根な おみが行い、浄書は生鷹千代、平岡直美の協力を得た。
- 8. 編集は梅木謙一が担当し、編集・校正においては水口あをいの協力を得た。
- 9. 調査及び本報告の作成にあたり、愛媛大学下條信行、松原弘宣、田崎博之、九州大学宮本一夫の各先生から御指導と助言を賜った。記して感謝申し上げます。
- 10. 自然科学分析では、(株) 古環境研究所に分析及び助言をいただいた。
- 11. 本報告書に関する資料は、松山市立埋蔵文化財センターが保管、収蔵している。

## 本 文 目 次

第1章	はじめに ――						[梅 :	木〕…	2	)
1.	調査に至る経緯	2. 刊名	<b></b> 行組織	3.	環境					
第2章	来住廃寺18次課	]査地 —				——〔山本	・岡	根〕…	···· (	)
1.	調査の経過	2. 層	位	3.	遺構と遺物	4. 小	結			
第3章	来住廃寺20次調	査地				〔水本・梅木	:・加!	島〕…	4	3
1.	調査の経過	2. 層	位	3. 3	遺構と遺物	4. 小	結			
第4章	久米窪田森元遺	<b>协3次</b>	調査地			〔山本・宮内	・岡村	退〕…	69	9
1.	調査の経過	2. 層	位	3. j	遺構と遺物	4. 小	結			
第5章	自然科学分析 -					- 〔㈱古環均	竟研究	所〕		
	久米窪田森元遺跡; 久米窪田森元遺跡;									
第6章	調査の成果と課	題 ——				—— 〔梅	木〕	•••••	·· 149	)
付論1	来住廃寺14次調査	€地出土の	O弥生土	器 ——		—— 〔梅	木〕	•••••	·· 150	)
付論 2	来住廃寺遺跡15岁	<b></b> て調査地出	当土の中	近世土智	\$	—— 〔岡	根〕		·· 175	j

## 挿 図 目 次

第1章	ほ はじめに	
第1図	松山平野の主要遺跡分布図(縮尺 1 /50,000)	
第2図	調査遺跡分布図(縮尺 $1/10,000$ )	5
第 2 章	E 来住廃寺18次調査地	
第3図	調査地測量図 (縮尺 1 / 500)	10
第4図	中央ベルト土層図(縮尺 1 /50)	
第5図	第Ⅲ層上面木杭検出状況(縮尺 1 /100)	13
第6図	第Ⅲ層遺物出土状況(縮尺1/100)	
第7図	木杭平断面図 (縮尺 1 / 40)	
第8図	第Ⅲ-①・②層出土遺物実測図(縮尺1/3)	
第9図	第Ⅲ—②層出土遺物実測図(縮尺1/3)	
第10図	第Ⅲ一③層出土遺物実測図(1)(縮尺1/3)	
第11図	第Ⅲ-③層出土遺物実測図 (2) (縮尺1/4・1/5)	
第12図	第Ⅲ一③層出土遺物実測図(3)(縮尺1/3)	
第13図	第Ⅳ層出土遺物実測図(縮尺1/4・1/3)	
第14図	SD1測量図 (第V層上面) (縮尺1/80)	
第15図	第 Ⅴ 層出土遺物実測図(縮尺 1 / 4 ・ 1 / 3)	
第16図	第Ⅵ層遺物出土状況(縮尺 1 / 100)	25
第17図	地形測量図(第WI層上面)(縮尺1/100)	
第18図	第Ⅵ層出土遺物実測図(1)(縮尺1/4)	
第19図	第Ⅵ層出土遺物実測図(2)(縮尺1/4)	
第20図	第 VI 層出土遺物実測図 (3) (縮尺 1 / 4 · 1 / 3)	
第21図	来住廃寺15・18次土層図	31
第3章	定 来住廃寺20次調査地	
第22図	調査地測量図 (縮尺 1 / 600)	
第23図	調査地区割図 (縮尺 1 / 200)	
第24図	土層図 (縮尺 1 /60)	
第25図	遺構配置図(縮尺 1 / 100)	
第26図	SD1遺物出土状況・土層図(縮尺1/80) ····································	
第27図	SD1出土遺物実測図(1)(縮尺1/4) ·······	
第28図	SD1出土遺物実測図(2)(縮尺1/4) ·······	5

第29図	SD1出土遺物実測図 (3) (縮尺1/4) ······53
第30図	SD1出土遺物実測図(4)(縮尺1/4) ······54
第31図	SD1関連出土遺物実測図(縮尺1/4) ······55
第32図	SD1出土遺物実測図(5)(縮尺1/2) ······56
第33図	SK1測量図 (縮尺1/20)57
第34図	SK1出土遺物実測図(縮尺1/4)58
第35図	SK2測量図 (縮尺1/20)
第36図	S P 測量図(縮尺 1 / 20) ······60
第4章	章 久米窪田森元遺跡 3 次調査地
第37図	調査区位置図(縮尺 1 / 5,000)69
第38図	区割図(縮尺 1 / 500)
第39図	基本層位図(縮尺 1 / 40)72
第40図	遺構配置図(縮尺 1 / 200)73
第41図	SB1測量図(縮尺1/80)74
第42図	SA1・2測量図(縮尺1/80)76
第43図	SD1測量図(縮尺1/80)77
第44図	SD2測量図(縮尺1/80)78
第45図	SD2出土遺物実測図(縮尺1/3) ······79
第46図	S D 4 測量図(縮尺 1 /40) ······80
第47図	SD3測量図(縮尺1/80)81
第48図	SR1測量図 (縮尺1/100)
第49図	SR1下層出土遺物実測図(縮尺1/3)84
第50図	SR2測量図(縮尺1/100)
第51図	SR2出土遺物実測図(縮尺1/3)
第52図	SR3測量図(縮尺1/100)
第53図	SR3出土遺物実測図(縮尺1/3) ·····88
第54図	SK1・2・3測量図(縮尺1/40)90
第55図	第Ⅲ層出土遺物実測図(縮尺 1 / 3 )91
第56図	第Ⅳ層出土遺物実測図(縮尺 1 / 3 )93
第57図	地点不明出土遺物実測図(1)(縮尺 $1/3$ )
第58図	地点不明出土遺物実測図(2)(縮尺 $1/3$ )95
第59図	地点不明出土遺物実測図(3)(縮尺 $1/3$ )
第60図	SR1下層出土木簡(縮尺1/3)
第61図	SR1下層出土遺物実測図(1)(縮尺1/4)99

第62図	SR1下層出土遺物実測図(2)(縮尺1/4)101
第63図	SR2・SD1出土遺物実測図(縮尺1/4・1/5)102
第5章	<b>直</b> 自然科学分析
第64図	久米窪田森元遺跡 3 次調査地出土木材顕微鏡写真 I 124
第65図	久米窪田森元遺跡 $3$ 次調査地出土木材顕微鏡写真 $II$ $125$
第66図	久米窪田森元遺跡 3 次調査地出土木材顕微鏡写真Ⅲ126
第67図	久米窪田森元遺跡 $3$ 次調査地出土木材顕微鏡写真 $\mathbb N$ ···································
第68図	久米窪田森元遺跡 $3$ 次調査地出土木材顕微鏡写真 $\mathbb{V}$ ····································
第69図	久米窪田森元遺跡 3 次調査地出土木材顕微鏡写真 VI ···················129
第70図	来住廃寺18次調査地出土木材顕微鏡写真 I
第71図	来住廃寺18次調査地出土木材顕微鏡写真 II · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
第72図	来住廃寺18次調査地出土木材顕微鏡写真Ⅲ132
第73図	来住廃寺18次調査地出土木材顕微鏡写真Ⅳ
第74図	来住廃寺18次調査地出土木材顕微鏡写真 V
第75図	来住廃寺18次調査地出土木材顕微鏡写真 VI ·······135
第76図	久米窪田森元遺跡 3 次調査地 A 地点における植物珪酸体分析結果 140
第77図	久米窪田森元遺跡 3 次調査地 B 地点における植物珪酸体分析結果 141
第78図	久米窪田森元遺跡 3 次調査地プラント・オパール顕微鏡写真(1) 144
第79図	久米窪田森元遺跡 3 次調査地プラント・オパール顕微鏡写真 (2) 145
第80図	久米窪田森元遺跡 3 次調査地プラント・オパール顕微鏡写真 (3) 146
第81図	久米窪田森元遺跡 3 次調査地プラント・オパール顕微鏡写真 (4) 147
第82図	久米窪田森元遺跡 3 次調査地プラント・オパール顕微鏡写真(5)148
付論	来住廃寺14次調査地出土の弥生土器
第83図	包含層出土遺物実測図(1)(縮尺1/4)151
第84図	包含層出土遺物実測図(2)(縮尺1/4)153
第85図	包含層出土遺物実測図(3)(縮尺1/4)154
第86図	包含層出土遺物実測図 (4) (縮尺 1 / 4)155
第87図	
第88図	包含層出土遺物実測図 (6) (縮尺1/4)158
第89図	包含層出土遺物実測図 (7) (縮尺 1 / 4)159
第90図	包含層出土遺物実測図(8)(縮尺1/4)161
第91図	包含層出土遺物実測図(9)(縮尺1/4)162
第92図	包含層出土遺物実測図(10)(縮尺 1 / 4)163
付論:	2 来住廃寺15次調査地出土の中近世土器

第93図	1	区中・下段、3・4区中段土層図(縮尺1/50)
第94図	1	区中段第 5 —①層出土遺物実測図(縮尺 1 / 4 )
第95図	1	区下段第8層出土遺物実測図(縮尺1/4)
第96図	3	・ 4 区中段第 4 層出土遺物実測図 (1) (縮尺 1 / 4)178
第97図	3	・ 4 区中段第 4 層出土遺物実測図 (2) (縮尺 1 / 4)179
第98図	3	· 4区中段第4層出土遺物実測図 (3) (縮尺1/4) ······180
第99図	3	<ul><li>4 区中段第 5 層出土遺物実測図(縮尺 1 / 4)</li></ul>
		写 真 図 版 目 次
巻頭図	版	久米窪田森元遺跡 3 次調査地
第2章	i 3	来住廃寺18次調査地
図版 1.	1	調査地全景〔調査前〕(西より) 2 完掘状況 (南東より)
		木杭検出状況〔1区〕(南より) 2 木杭検出状況〔2区〕(南より)
図版 3.	1	第Ⅲ—③層遺物出土状況(南より) 2 第Ⅲ—③層土師器出土状況(南西より)
図版 4.	1	第Ⅲ一③層瓦器出土状況(南西より) 2 第Ⅲ一③層土師器〔托上椀〕出土
		状況(南より) 3 第Ⅲ一③層羽口片出土状況(南より)
図版 5.	1	第Ⅲ-③層軒丸瓦出土状況(南より) 2 第Ⅲ-③層軒丸瓦出土状況(東よ
		り) 3 第Ⅲ─③層平瓦出土状況(南より) 4 第Ⅲ─③層獣骨〔歯〕出
		土状況 (南より)
図版 6.	1	第Ⅳ層木製品出土状況① (南東より) 2 第Ⅳ層木製品出土状況② (南より)
図版 7.	1	第Ⅵ層遺物出土状況(南より) 2 第Ⅵ層弥生土器出土状況(南東より)
図版 8.	1	第Ⅲ—①層出土遺物 2 第Ⅲ—②層出土遺物①
図版 9.	1	第Ⅲ—②層出土遺物② 2 第Ⅲ—③層出土遺物①
図版10.	1	第Ⅲ—③層出土遺物②
図版11.	1	第Ⅲ一③層出土遺物③
図版12.	1	第Ⅳ層出土遺物① 2 第Ⅳ層出土遺物② 3 第Ⅴ層出土遺物
図版13.	1	第 VI 層出土遺物①
図版14.	1	第Ⅵ層出土遺物②
図版15.	1	第Ⅵ層出土遺物③・西側トレンチ出土遺物
第3章	习	民住廃寺20次調査地
図版16.	1	調査前全景(南より) 2 完掘状況(北より)

- 図版17.1 SD1完掘状況(北より) 2 西壁土層(東より)
- 図版18. 1 SD1遺物出土状況① (東より) 2 SD1遺物出土状況② (北より)
- 図版19. 1 SD1遺物出土状況③(北東より) 2 SD1遺物出土状況④(北より)
- 図版20.1 SK1完掘状況(西より) 2 作業風景(東より)
- 図版21. 1 SD1出土遺物・SD1関連出土遺物

#### 第4章 久米窪田森元遺跡3次調査地

- 図版22. 1 調査地全景〔調査前〕① (東より) 2 調査地全景〔調査前〕② (南西より)
- 図版23. 1 南壁土層(北より) 2 東壁土層(西より)
- 図版24. 1 遺構検出状況(西より) 2 遺構配置状況①(西より)
- 図版25. 1 遺構配置状況②(東より)
- 図版26. 1 SB1 (東より) 2 SB1柱穴掘り方(南西より)
- 図版27. 1 SD1 (南より) 2 SD1遺物出土状況 (東より)
- 図版28. 1 SD2 (北東より) 2 SD2遺物出土状況 (南より)
- 図版29. 1 SD3 (南より) 2 SD3遺物出土状況 (南より)
- 図版30.1 SR1残存状況(南東より) 2 SR1木製品出土状況①(南より)
- 図版31. 1 SR1木製品出土状況②(南より) 2 SR1木製品出土状況③(南より)
- 図版32. 1 SR2 (南より) 2 SR2遺物出土状況(北東より)
- 図版33. 1 SR2木製品出土状況① (南より) 2 SR2木製品出土状況② (北より)
- 図版34. 1 SR3 (東より) 2 SK3 (西より)
- 図版35. 1 作業風景① (南西より) 2 作業風景② (西より)
- 図版36. 1 SD2出土遺物 SR1下層出土遺物 SR2出土遺物 SR3出土遺物
- 図版37. 1 第Ⅲ層出土遺物 2 第Ⅳ層出土遺物
- 図版38. 1 地点不明出土遺物
- 図版39. 1 SR1下層出土木製品①
- 図版40. 1 SR1下層出土木製品②
- 図版41. 1 SR2①・②層出土木製品 SD1出土木製品
- 付論1 来住廃寺14次調査地出土の弥生土器
- 図版42. 1 包含層出土遺物①
- 図版43. 1 包含層出土遺物②
- 図版44. 1 包含層出土遺物③
  - 付論 2 来住廃寺遺跡15次調査地出土の中近世土器
- 図版45. 1 包含層出土遺物①
- 図版46. 1 包含層出土遺物②

### 表 目 次

表 1	調査地一覧
第2章	来住廃寺18次調査地
表 2	出土モモ核一覧
表 3	第Ⅲ-①層出土遺物観察表(土製品・石製品)
表 4	第Ⅲ—②層出土遺物観察表(土製品・石製品)
表 5	第Ⅲ-③層出土遺物観察表(土製品・石製品・木製品・瓦)
表 6	第Ⅳ層出土遺物観察表(土製品・石製品・木製品)3
表 7	第 ∀ 層出土遺物観察表(土製品・石製品)
表 8	第Ⅵ層出土遺物観察表(土製品・石製品)
表 9	第Ⅲ層上面検出の木杭 ····································
第3章	来住廃寺20次調査地
表10	溝一覧
表11	土擴一覧
表12	柱穴一覧
表13	S D 1 出土遺物観察表(土製品)
表14	SD1関連出土遺物観察表(土製品)
表15	S D 1 出土遺物観察表(石製品)
表16	SK1出土遺物観察表(土製品)
第 4 章	久米窪田森元遺跡 3 次調査地
表17	出土木製品一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
表18	出土種実一覧
表19	SD2出土遺物観察表(土製品)
表20	SR1下層出土遺物観察表(土製品)
表21	SR2出土遺物観察表(土製品) 106
表22	SR 3 出土遺物観察表(土製品) 107
表23	第Ⅲ層出土遺物観察表(土製品)
表24	第Ⅳ層出土遺物観察表(土製品)
表25	地点不明出土遺物観察表 (土製品)
表26	S R 1 下層出土遺物観察表(木製品) 110
表27	S R 2 出土遺物観察表(木製品)
表28	SD1下層出土遺物観察表(木製品)
第5章	自然科学分析
表29	久米窪田森元遺跡 3 次調査地樹種一覧
表30	来住廃寺18次調査地樹種一覧
表31	久米窪田森元遺跡 3 次調査地の植物珪酸体分析結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
表32	久米窪田森元遺跡 3 次調査地の主な分類群の植物体量の推定値
付論!	来住廃寺 4次調査地出土の弥生土器
表33	包含層出土遺物観察表(土製品) 168
付論 2	来住廃寺遺跡15次調査地出土の中近世土器
表34	1 区中段第 5 一①層出土遺物観察表(土製品)
表35	1区下段第8層出土遺物観察表(土製品)
表36	3 ・ 4 区中段第 4 層出土遺物観察表(土製品)
表37	3 ・ 4 区中段第 5 層出土遺物観察表(土製品)

#### 第1章 はじめに

#### 1. 調査に至る経緯

平成2年~3年の間に、松山市来住町797-1・3、来住町603-2・6、久米窪田町856-1の3ヶ所について、埋蔵文化財の確認願いが開発関係者より、松山市教育委員会文化教育課に提出された。

確認願いが申請された来住町797-1・3、同603-2・6は、松山市の指定する埋蔵文化 財包蔵地『127 来住廃寺跡』内に、久米窪田町56-1は『129 鷹ノ子遺物包含地』内にあり、 周知の遺跡地として知られている。

また、申請地周辺は来住台地と呼称され、縄文時代から中世の集落遺跡であることが明らかとなっている。また、白鳳期の寺院で国指定史跡である来住廃寺が存在し、古代の松山平野における中心地であったことが分かっている。

文化教育課では、確認申請が提出された三地点について、埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲や性格を確認するため、順次試掘調査と書類審査を実施した。その結果、申請地内には遺構や遺物が検出されたことや既応の調査により充分に遺跡の存在が想定される状況にあった。

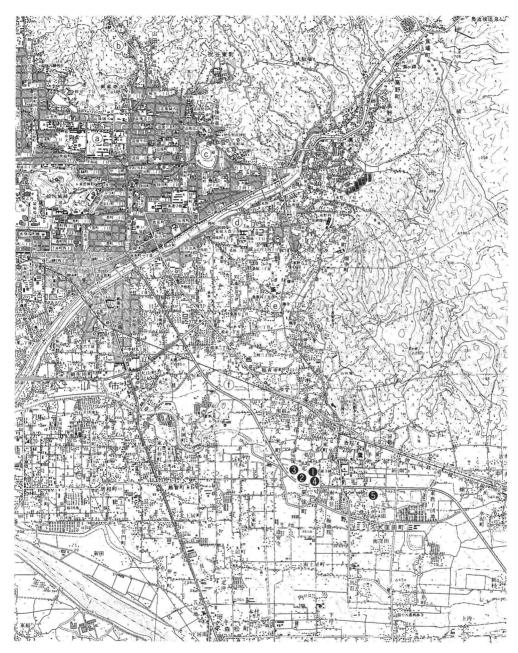
試掘調査及び書類審査の結果より、文化教育課と申請者及び関係者は、発掘調査について協議を行い、遺跡が消失する地域に対し、当該地域の集落域やその構造を明らかにすることを目的とした調査を実施することとした。

発掘調査は、文化教育課及び(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、申請者及び関係者の協力のもと、平成4年~5年の間に実施した。

表 1 調査地一覧

遺跡名	所 在	面積	期間
来住廃寺18次	来住町797—1、同3	315 m²	平成4年1月6日~同年3月31日
来住廃寺20次	来住町603-2、同6	540 m²	平成4年8月4日~同年10月13日
久米窪田森元 3 次	久米窪田町856-1	902 m²	平成 4 年11月 1 日 ~ 平成 5 年 2 月26日

なお、各遺跡とも野外調査後は、松山市立埋蔵文化財センターにおいて、整理・報告書作 成事業を実施した。



① 来住廃寺|4次調査地 ② 来住廃寺遺跡|5次調査地 ③ 来住廃寺|8次調査地 ④来住廃寺20次調査地

⑤ 久米窪田森元遺跡 3 次調査地 ② 文京遺跡(愛媛大学) ⑥ 祝谷六丁場遺跡 ⓒ 道後湯月遺跡

d 樽味立添遺跡 e 三島神社古墳 f 福音小学校構内遺跡

第 I 図 松山平野の主要遺跡分布図 (S=1:50,000)

#### 2. 刊行組織

松山市教育委員会 教 育 長 池田 尚郷

生涯教育部 部 長 渡辺 和彦

次 長 三好 俊彦

文化教育課 課 長 松平 泰定

(財) 松山市生涯学習振興財団 理事長 田中誠一

事務局長 一色 正士

埋蔵文化財センター 所 長 河口 雄三

次 長 田所 延行

調査係長 田城 武志

調査主任 栗田 正芳 (文化教育課職員)

担 当 梅木 謙一

山本 健一

水本 完児

#### 3. 環 境

松山平野の西部には小河川の小野川、堀越川がある。この二つの川に挟まれた洪積台地は 来住台地と呼ばれ、伊予灘が眺望される土地である。台地上には、古くより遺跡の存在が知 られ、国指定の来住廃寺(白鳳寺院跡)の他、縄文時代から中世に至る遺跡が多数発見され ている。

#### 縄文時代

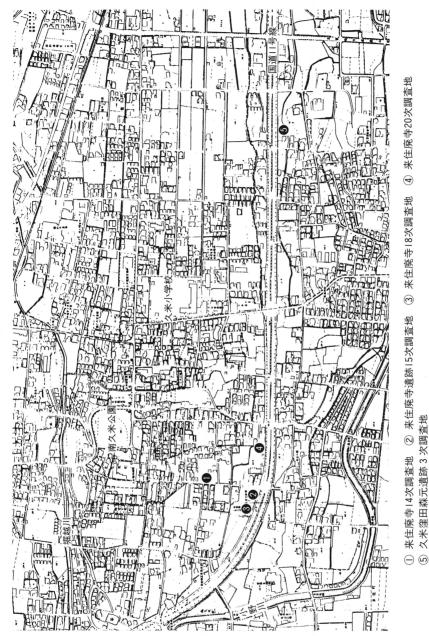
先土器時代に属すると思われる石器は、数点が表採されているが、包含層及び遺構の検出 には至らない。

縄文時代資料は、後期の土壙が久米窪田森元遺跡(栗田 茂敏 1989)で検出され、台地で最も古い生活関連遺構となっている。土壙からは、土器片約40点余りが出土しており、同時期の資料としては松山平野においても数は少なく貴重な資料といえる。

晩期は、台地南西部にある南久米片廻り遺跡 2 次調査(松村 淳 1991)にて、土器を伴う土壙が検出されている。初期農耕遺跡である大渕遺跡(栗田 茂敏 1989)出土品との比較分析が注目されるところである。

#### 弥生時代

前期 前半の遺構が久米高畑遺跡 5 ・ 9 次調査で検出され、土器の一括資料が出土している (宮崎 泰好 1989、池田 学 1991)。後半になると検出遺構が急増し、前期末~中期初頭に



来住廃寺14次調査地 ② 来住 久米窪田森元遺跡 3 次調査地

(8 = 1 : 10,000)調查遺跡分布図 第2図 おいては環濠をもつ集落が存在した可能性がある(吉本 拡 1981)。

中期 前葉までの資料が、久米窪田遺跡で検出され、台地の西部にまで集落が拡大していく様子がうかがえる (阪本・小林 1981)。後半以降は、集落経営がより活発となる。近年、来住廃寺遺跡15次調査地において、20点余りの完形な土器が出土するなど、遺跡の集落構造が明らかになると共に、土器研究の資料においても充実をみせている。

後期 前半の資料が著しく減少している。後半から末の資料は、台地内に散見されるが、 遺構の検出に至っていない。

古墳時代 松山平野の6世紀以降の前方後円墳は、来住台地周辺に集中し存在する。加えて、小規模な古墳群も台地の北方にある山麓に存在している。ただし、調査事例は少なく、また分布調査も進行しておらず古墳分布の台帳作成は急務であろう。

集落跡は、台地の西側で検出事例が多く、カマドつきの竪穴式住居址や掘立柱建物址が発見されている。ただし、集落構造を明らかにするには至っていない。

古代 国指定の来住廃寺(小笠原好彦 1979、西尾 幸則 1993) や、近年その存在が注目される久米高畑遺跡など全国有数の遺跡が発見されている。来住廃寺、久米高畑遺跡とも調査 次数は既に20次を越え、寺院・官衙の構造が明らかになりつつある。遺跡の検討のため、報告と分析が期待されているところである。

中世 近年、中近世土器研究の活発化に伴い、調査においては中世遺構や遺物に対する関心が強くなり、資料の抽出に努力がなされるようになった。鷹子遺跡では、集落の一部が検出され、調査担当である宮本一夫氏により13~15世紀の土器分析がなされ、来住台地の中世資料は大いに注目されるものとなった(宮本 一夫 1989)。

来住台地の遺跡は、縄文時代後期以降中世に至るまで、連綿と集落が経営されていたことが想定される。そして、古墳時代後半から古代においては、松山平野の政治の中心地として機能していた地域であるといえる。

#### 【参考文献】

栗田 茂敏 1989 「久米窪田森元遺跡」 『松山市埋蔵文化財調査年報II』 松山市教育委員会

松村 淳・山本 健一 1991 「南久米片廻り遺跡 2 次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

栗田 茂敏 1989 「大渕遺跡」 『松山市埋蔵文化財調査年報 II』 松山市教育委員会

宮崎 泰好 1989 「久米高畑遺跡 (5次)」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

池田 学 1991 「久米高畑遺跡 9 次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会・松山市立 埋蔵文化財センター

吉本 拡 1981 「来住 V 遺跡」『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書 II 』愛媛県教育委員会・愛媛県埋蔵文化財センター

阪本 安光・小林 一郎 1981 「久米窪田IV・V遺跡」『一般国道11号線松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査 報告書』愛媛県教育委員会・(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

小笠原 好彦 1979 『来住廃寺』松山市教育委員会

西尾 幸則 1993 『来住廃寺遺跡』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 宮本 一夫 1989 『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室 第2章

# 来 住 廃 寺

一18次調查地一

#### 第2章 来住廃寺18次調查地

#### 1. 調査の経過

#### (1)調査に至る経緯

1991 (平成3) 年9月、岸洋文氏より松山市来住町797-1・3の開発に当たって、当該地における埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下文化教育課)に提出された。当該地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の来住廃寺遺跡内にあり、1991 (平成3)年に調査を行った来住廃寺遺跡15次調査地と隣接しており、弥生~中世の遺物の出土が想定される為、文化教育課の指導のもと(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター、岸洋文氏の二者は発掘調査について協議を行い、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、岸洋文氏の協力のもと1992年1月6日より発掘調査を開始した。

本調査地は、来住廃寺塔跡より南西150mの地点で、標高34.7 mに立地する。また来住台地の南西部の落ち際、小野川からは北へ300mの地点となる。

#### (2) 調查組織

調 査 地 松山市来住町797-1・3

遺跡 名 来住廃寺18次調査地

調査期間 野外調査 1992 (平成4)年1月6日~同年2月27日

室内調査 1992 (平成4) 年2月28日~同年3月31日

調查面積 対象面積 315.317 m²

調査委託 岸 洋文

調査協力 (株) 拓 昌

調査担当 西尾 幸則 (現、) 
慰松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター学芸係長)

山本 健一

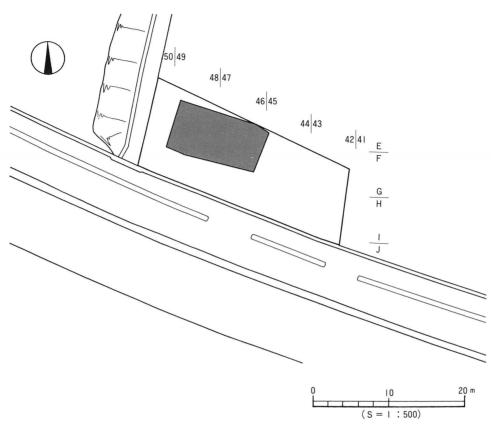
調查作業員 相原 忠重、岡崎 政信、亀山 泰昌、是沢 嘉昭、西原 聖二、

三江 元則、森 隆、八木 幸則、山口 裕二、雲峰 智子、

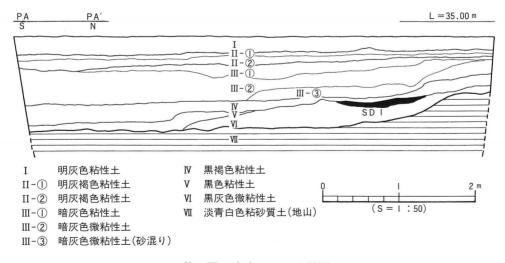
束村千恵子、野口 美紀、野口美佐美、野本 益子、三好真知子、

岡根なおみ、新出寿美子

**〔註〕** 報告においては、1.調査の経過、2.層位、3.遺構、4.まとめは山本が、3.遺物は岡根が担当した。



第3図 調査地測量図



第4図 中央ベルト土層図

#### 2. 層 位 (第4図)

基本層位は造成土を除いた状態で、旧耕作土を第1層とする。

第1層: 明灰色粘性土、20~25cmの堆積で造成前の耕作土である。

第II **層**: 第II 一①層、第II 一②層とも明灰褐色粘性土で10~20cmの堆積を測る。第II 一① 層と第II 一②層間に赤褐色と黄色の筋が混入するため細分した。

第Ⅲ層: 第Ⅲ層は暗灰色土で、粘性により細分した。第Ⅲ—①層は暗灰色粘性土である。 6~20㎝の堆積で弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、陶磁器、布目瓦、種子を包含する。第Ⅲ—②層は暗灰色微粘性土である。10~15㎝の堆積で第Ⅲ—①層と同時代の遺物の他、炭化米、羽口片などが含まれている。第Ⅲ—③層は暗灰色微粘性土(砂混り)である。8~16㎝の堆積で第Ⅲ—①②層と同時代の遺物の他、木片、獣骨(歯)が含まれている。

第IV層: 黒褐色粘性土である。10~25cmの堆積で弥生土器、須恵器、石製品、木器、植物 遺体(種子)を包含する。

第 V 層: 黒色粘性土である。10~20cmの堆積で弥生土器を包含する。

第 Ⅵ層:黒灰色微粘性土である。5~35cmの堆積で弥生土器を包含する。

第12層:淡青白色粘砂質土で、地山である。

土層観察から第 V・VI層は弥生時代後期、第 IV層は古墳時代、第 III層は中世に堆積されたものと判断される。

遺構は、第Ⅲ層上面より木杭、第V層上面より溝1条を検出している。

なお、調査にあたり調査区内は1mの小グリットを設定し、さらに中グリットとして調査 区中央部に設置した土層観察用のベルトより東を1区、西を2区とした。

#### 3. 遺構と遺物

本調査において確認した遺構は、第Ⅲ層上面で木杭29本、第 V 層上面で溝 1 条を検出した。 当調査地は前回調査(来住廃寺15次調査・3 区下段地区)の西延長部にあたり、前回と同様 な土壌の堆積状態と遺物出土状況となり、前回調査で検出した旧河川の一部分となる。以下、 各層ごとに遺構と遺物の説明を行う。

#### (1) 第Ⅲ層検出の遺構と遺物

#### 1) 第Ⅲ層遺構(第5~7図、図版2・3)

第Ⅲ層では、上面より遺構を検出している。検出遺構は木杭29本である。木杭は、調査区東の1区では南北4m、東西4m、2区では南北1.5m、東西2.5mの範囲で検出された。ほとんどの杭が地中にまっすぐに突き立てられているが、内6本は斜めに突き立てられている。突き立てられている深さは、検出面より浅いもので10cm前後、深いもので50cm前後を測る。木杭は、直径3~8cm大の小木が使われており、先端部が地中に突き立てやすいように尖らせてある。

第Ⅲ層中からの出土遺物は、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、陶磁器、布目瓦、種子である。これらの遺物の中に、第Ⅲ一②層中では炭化米や羽口片が含まれ、第Ⅲ一③層中では木片や獣骨(歯)が含まれる。第Ⅲ一①層中の遺物は小片で、第Ⅲ一②・③層の遺物は調査区北部で第Ⅲ層が落ち込む地点に集中して出土し、20~25cm大の礫石と混在した状態であった。

#### 2) 第Ⅲ—①層出土遺物(第8図、図版8)

瓦器 (1・2) 椀2点。和泉型Ⅲ—1期のもので高台は低く、断面は方形を呈している。 貿易陶磁器 (3・4) 白磁椀2点。3は玉縁をなす口縁部片である。4は底部片で、高 台は低く削り出されている。

石製品 (5) 石庖丁 1 点。長方形を呈し、約 1 / 2 片である。現存長6.8cm、幅3.4cm、厚さ0.6cmを測る。

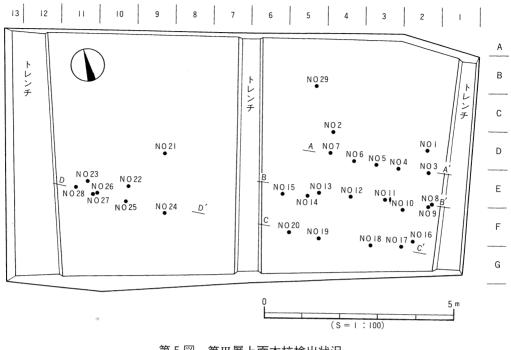
この他にサヌカイトのフレーク 2 点、重さにして34.5 g が出土した。 その他、第Ⅲ層出土の遺物ではフイゴと思われる細片が 1 点出土している。

#### 3) 第Ⅲ-②層出土遺物(第8・9図、図版8・9)

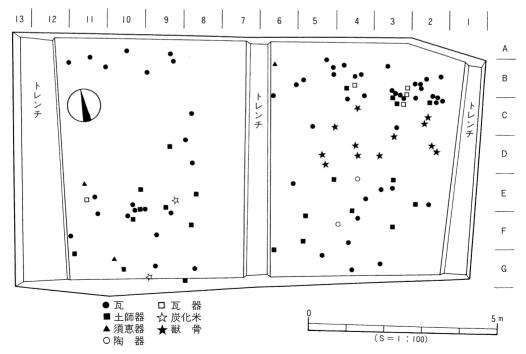
瓦器  $(6 \sim 10)$  椀 4 点・皿 1 点。和泉型 III-1 期のものである。椀の高台は断面が三角形のものや、方形のものがある。内面の磨きは省略気味である。 9 は復元口径 15 cm 5 に加る。 10 の皿は復元口径で11 cm 5 測る。

貿易陶磁器 (11~14) 白磁椀 3 点・合子 1 点。11は椀で、高台は高く削り出されており、口縁端部は細く引き出している。見込みは蛇ノ目状に釉を剝いでいる。12は口縁部が玉縁状を呈する。13は型づくりの合子である。14は高台を低く削り出しており、見込みに沈線が 1条巡る。

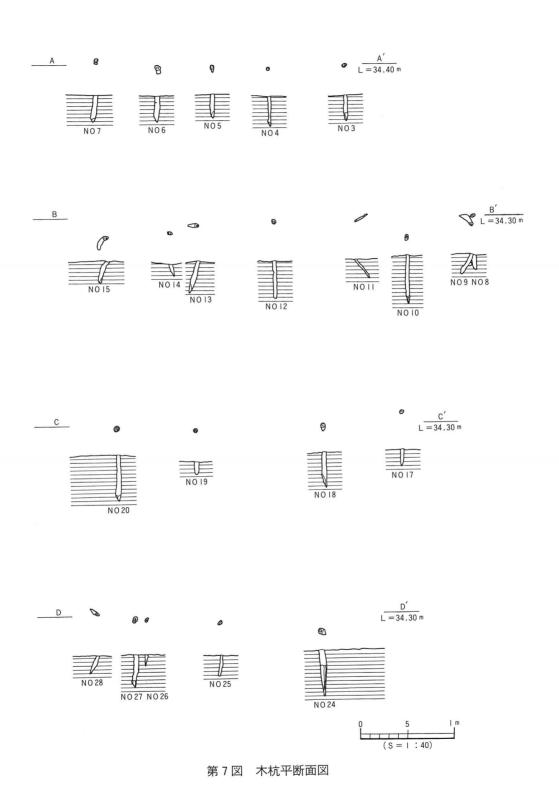
土師器(15~21) 椀2点・杯4点・皿1点。杯15は口径15.2cm、器高3.8cmを測る。底部 回転糸切り離し(以下「糸切り」と言う)技法によるものである。椀17は底部糸切りで、高 台は高く細い。内面は丁寧なヘラ磨きである。白色を呈す精製品である。



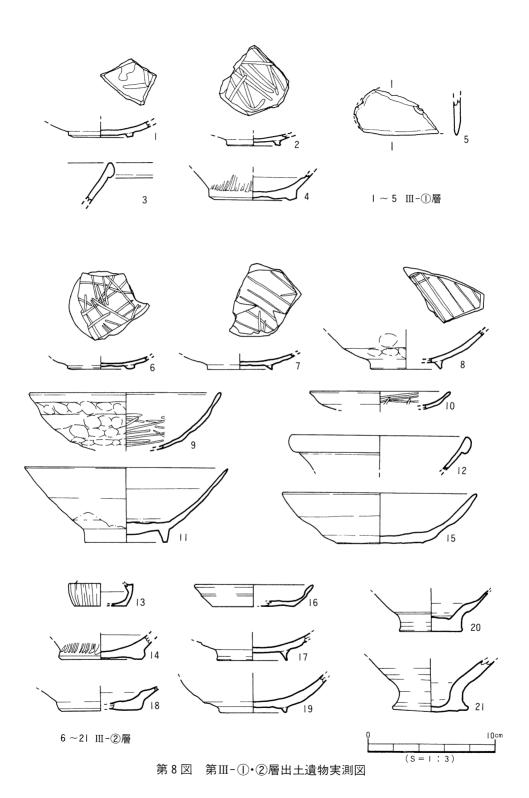
第5図 第Ⅲ層上面木杭検出状況



第6図 第Ⅲ層遺物出土状況



-14-



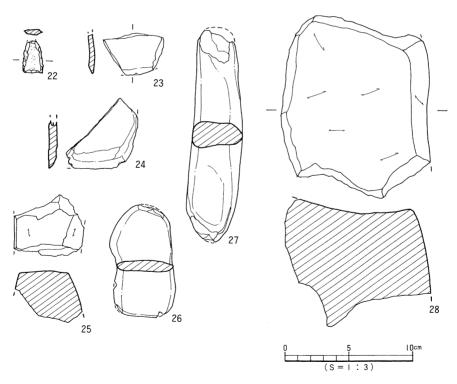
— 15 **—** 

18の底部は円盤状を呈し、回転へラ切り調整を行っている。火だすきも見られる。須恵質の焼きで土師器とするには疑問が残る。19の高台は低く、底部との境に指頭痕がみられる。20・21は糸切りの底部から立ち上がり、一旦腰がくびれてから体部が外方に開くものである。

石製品(22~28) 石鏃1点・石庖丁1点・石斧1点・砥石2点・用途不明1点。22は石鏃の未製品で長さ2.6cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm、重さ0.5gをはかる。サヌカイト製。23は緑色片岩製の石庖丁の細片で刃部がわずかに残っている。24は緑色片岩製の片刃石斧と思われる。25は砥石片で、3面のみ砥面が残っている。幅は5.5cmを測る。26は緑色片岩で、現存長8.7cm、幅4.7cm、厚さ1cmを測る。中ほどがくびれる。27は長さ16.4cm、幅4cm、厚さ1.2cmを測る。用途不明である。28は砂岩を利用しており、現存長で14.2cm、幅14.4cm、厚さ9.5cmを測る。研磨された面は2面残っており、据え置いて使用する砥石のようなものを考えている。

以上7点の他には貢岩のフレークが1点、重さにして3.8gが出土している。

その他、ここでは図化しえなかったが、フイゴの羽口と思われる細片を1点、鉄澤と思われる小塊を3点、緑色を呈する焼土が出土している。



第9回 第Ⅲ-②層出土遺物実測図

#### 4) 第Ⅲ-③層出土遺物(第10~12図、図版3~5・9~11)

瓦器 (29~31) 椀 3 点。和泉型Ⅲ—I 期のものである。29は復元口径15.6cm、器高5.7cm を測る。30は復元口径16cm、器高5.2cmを測り、口縁部との境に明瞭な段がつくものである。31は復元口径15.6cm、器高4 cmを測る。若干器高が低いものである。

貿易陶磁器 (32・33) 白磁椀 2点。32は椀で口縁部は玉縁をなす。33は白磁椀の底部片で見込みに沈線が入る。

土師器 (39~47) 椀 5 点・杯 7 点・皿 2 点。椀34は復元口径14.7cm、器高5.6cmを測る。高台は断面三角形を呈する。全体に摩滅しており調整は不明である。35・37・38の底部調整は摩滅しているものもあるが、糸切りによるもので、中でも35は内面に磨きを施した精製品である。36は托状椀で内面は丁寧な磨きを施している。杯39・40は底部糸切りによるもので復元口径は13.5cm前後、器高4.5cm前後を測る。皿41は摩滅しており調整は不明だが、42の底部は回転へラ切り調整によるものである。43~46は底部糸切りの円盤状高台のものである。47は須恵質の焼きである。

これらの他に壺と思われるもの1点と、こね鉢が1点出土している。こね鉢は、隣接する来住廃寺15次調査3区下段地区のW層から出土したものと同一個体であった。

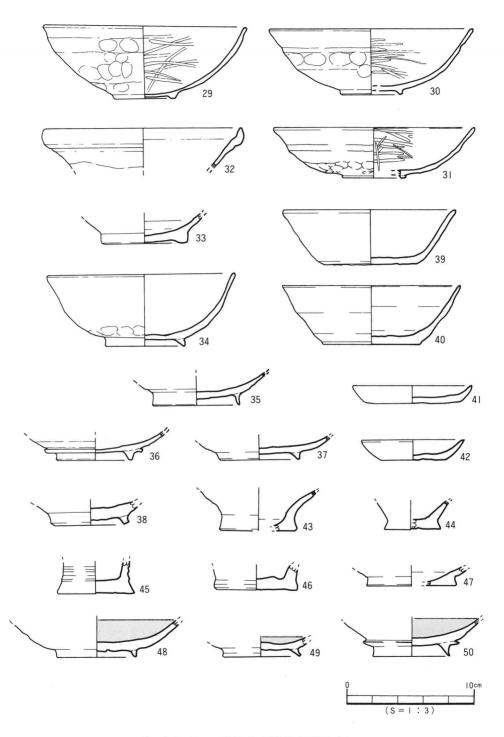
黒色土器 (48~50) 械 3 点。48・49は内黒 (A類)の椀で、49の内面には刷毛目調整の痕がみられる。器表面を観察した様子では、黒色の膜がみられる。50は内黒の托状椀である。古照遺跡第 6 次調査終沈区〔註1〕より出土したものよりひとまわり小さい。

須恵器(51~53) 甕2点・こね鉢1点。51は甕の口縁部片で、口径12.4cmを測る。口縁と体部の接合角度などの様子から横瓮の可能性を考えている。52は平底の甕である。53は東播系のこね鉢で復元口径は25cmを測る。内外面ともヨコナデ調整を行っており、胎土は5mm程の砂粒が目立つ。

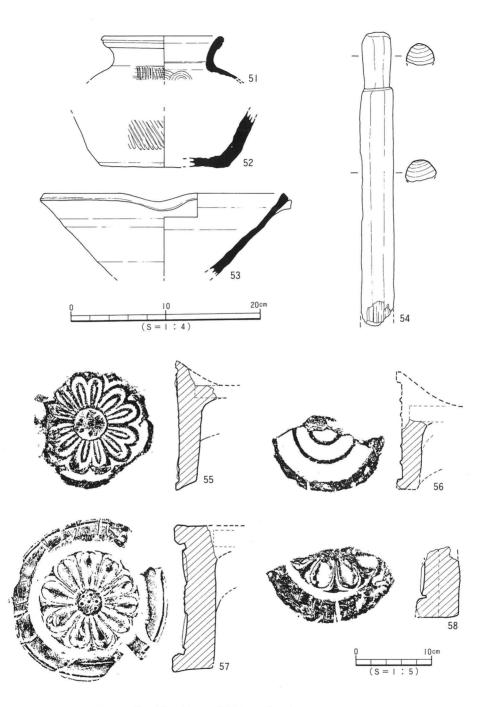
木製品 (54) 用途不明品 1 点。54は板目材を使用しており、端部から 6 cmあたりに低い段をつけ、握手状に削り出している。廃棄後に火を受けたようで片面が焼け焦げている。用途としては経巻具の可能性を考えている。

瓦類(55~58) 軒丸瓦4点。軒丸瓦は来住廃寺出土瓦分類型式(来住廃寺15次調査報告参照)でいくと、55がⅣ型式、56がⅥ型式、57・58がⅠ型式のものである。57・58は蓮弁の稜が撫でられており平坦になっている。

平瓦は太縄叩きの隅切り瓦が出土している。丸瓦は I 型式(行基式)と V 型式(玉縁式)が出土した。ここでは軒平瓦の出土はなかった。



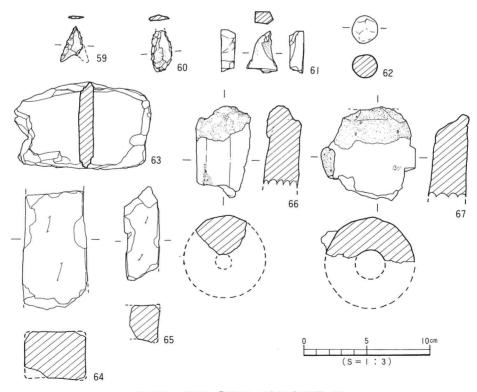
第I0図 第III-③層出土遺物実測図(I)



第Ⅱ図 第Ⅲ-③層出土遺物実測図(2)

石製品( $59\sim61\cdot63\sim65$ ) 石鏃 2 点・石庖丁 1 点・砥石 2 点。59 は凹基式石鏃の未製品で、下端部を欠いている。長さ2.8 cm、幅2.1 cm、厚さ0.3 cm、重さ1.9 g をはかる。サヌカイト製である。60 は凸基式石鏃の未製品で、上端部を欠損している現存長3.2 cm、重さ3.4 g をはかる。サヌカイト製である。63 は緑色片岩で、片縁部を打ち欠いた段階の石庖丁の未製品と思われる。長さ10.8 cm、幅6.7 cm、厚さ1.2 cmをはかる。61 はサヌカイトのフレークである。現存長3.3 cm、重さ8.9 g をはかる。この他にもフレークは5 点出土しており、重量にして17.3 g を量る。ここでは貢岩の製品はみられないが、フレークは3 点、21.3 g が出土した。64 は砥石で、断面長方形を呈する。65 も同様の砥石片である。

その他の製品( $62 \cdot 66 \cdot 67$ ) 土製品 1 点、フイゴ羽口 2 点。62は土製の丸球で、直径 2 cm、重さ8.2 g をはかる。 $66 \cdot 67$ はフイゴの羽口で溶解した物質が溶着している。粘土にはスサを混入したようである。直径は復元で  $6 \sim 7$  cmを測る。66の中空部分の径が67より小さくなるが細片なのでさだかでない。図化しえなかったものに鉄澤 3 点がある。



第12図 第III-③層出土遺物実測図 (3)

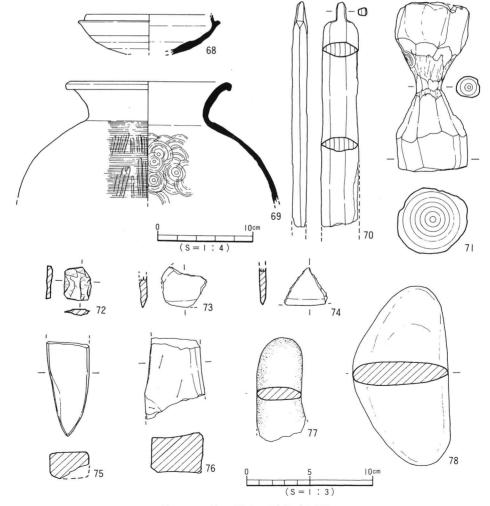
#### (2) 第Ⅳ層検出の遺構と遺物

第Ⅳ層からの遺構は未検出である。出土遺物は弥生土器、須恵器、石製品、木器、種子である。1・2区とともに北部寄りの第Ⅳ層落ち込み部からの出土で、出土量は少量である。木器と種子は、堆積の厚い1区側で出土した。

#### 1) 第Ⅳ層出土遺物 (第13図、図版12)

須恵器 (68・69) 杯 1 点・甕 1 点。68は復元口径13.2cmを測る坏身で、底部ヘラ削り調整を行っている。69は復元口径17.4cmを測る甕で、口縁は外反し、端部を玉縁状につくり出している。

木製品(70・71) 木錘 1 点・用途不明品 1 点。70は柾目材を使用している。現存長23.7 cm、幅3.8 cm、厚さ1.5 cmを測る。断面形は紡錘形を呈している。端部は棒状に 2 cmほど削り出している。経巻具の可能性を考えている。71は鼓形を呈する木錘で、長さ17.8 cm、直径約 7 cmを測る。芯持ち材を使用している。



第13図 第Ⅳ層出土遺物実測図

石製品( $72\sim78$ ) 石庖丁 2 点・石斧 1 点・砥石 1 点・用途不明 3 点。72 はサヌカイト製で、長さ2.6cm、幅2.6cm、厚さ0.5cm、重さ3.9 g をはかる。73・74 は緑色片岩製の石庖丁である。73 は現存長3.5cm、幅3.2cm、厚さ0.5cmをはかる。75 は緑色片岩製の片刃石斧で、現存長5.4cm、幅3.4cm、厚さ1.8cm、重さ18.6 g をはかる。77・78 には顕著な使用痕は確認できなかった。磨石の可能性が考えられないこともない。これらの他にサヌカイトのフレークが3 点出土しており、重さにして13.3 g をはかる。

#### (3) 第 V 層検出の遺構と遺物 (第14図)

第 Ⅴ 層では、上面より遺構を検出している。検出遺構は溝(SD1)1条である。

SD1 調査区2区北西隅から1区東壁中央北寄りにかけての検出である。長さ12.1m、幅1.1~1.8m、深さ10~15cmを測り、断面形は皿状を呈する。埋土は黒色粘性土である。遺物は弥生土器、須恵器、石製品、種子が少量出土した。

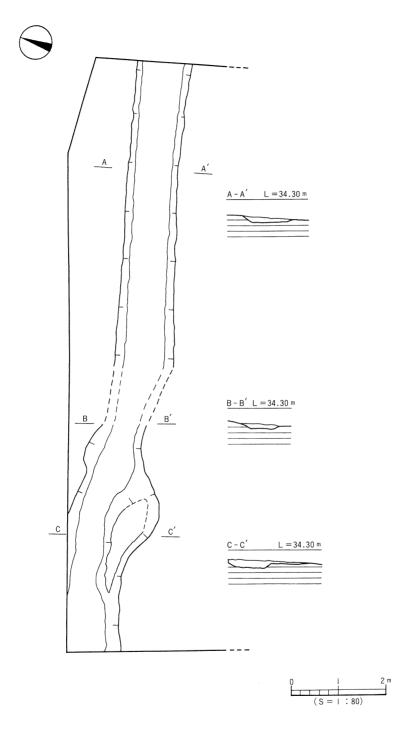
第 V 層からの出土遺物は弥生土器と石製品である。1・2 区とも全体に散在した状況で出土した。遺物量は少量である。弥生土器は、破断面が丸く摩滅しており、ほとんどのものが小片である。石製品は石庖丁と管玉が出土した。なお本土層中からは軽石を1点採集している。

#### Ⅰ) 第 V 層出土遺物(第15図、図版12)

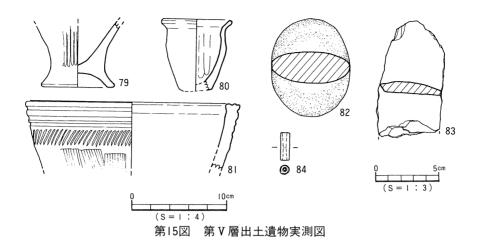
弥生式土器 (79~81) 甕1点・高坏1点・ミニチュア土器1点。79は甕の底部1/2片で、くびれた上底のものである。外面はヘラ磨き調整を行っている。80は甕形土器のミニチュア品で、口縁は「く」の字に屈曲する。胴部は中位で張っている。81は高坏の口縁部と考えている。口縁端面に凹線文を2条施し、外面には凹線文を4条施した後、斜線文を施している。

石製品 (82~84) 磨石 1 点・石庖丁 1 点・管玉 1 点。82は磨石で、長さ7.7 cm、幅6.2 cm、厚さ2.5 cm、重さ140 g をはかる。砂岩製である。83は辺縁を打ち欠いた状態の石庖丁の未製品で、長さ 9 cm、幅5.2 cm、厚さ0.9 cm、重さ80 g をはかる。緑色片岩製である。84は緑色凝灰岩製の管玉で、長さ2.1 cm、直径0.6 cm、重さ1.6 g をはかる。両端より穿孔している。

これらの他に、サヌカイトのフレークが1点、重量にして1.7gが出土している。



第14図 SDI測量図 (第V層上面)



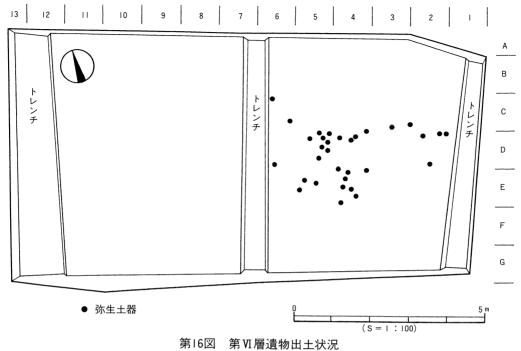
#### (4) 第Ⅵ層検出の遺構と遺物 (第16・18~20図)

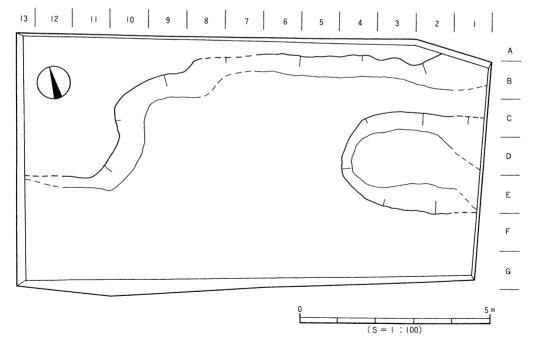
第Ⅵ層からの遺構は未検出である。出土遺物は弥生土器と石製品である。調査区北部第Ⅵ 層の落ち込み部にて遺物の密集が見られ、特に1区側での出土が目立った。密集部分より取 り上げた遺物は、接合の結果完形品になるものはなかった。

#### Ⅰ) 第 Ⅵ 層出土遺物 (第18~20図、図版13~15)

甕形土器 (85~95) 11点

85は口縁端部に粘土を貼り付け屈曲させたもので、刻み目を施している。87は口縁下端に 刻み目を施している。いずれも口縁下には多条の沈線文と、刺突文を施している。86は甕の 細片である。 2 本単位の工具により沈線文を16条巡らせた後、同じ工具で弧文を描いている。 その下には刺突文を2列巡らせている。88は「く」の字状口縁で、口縁端面は強いヨコナデ によって凹んでいる。胴部の張りは弱く頸部に凸帯を付している。凸帯には指先大の押圧文 を施しており、押圧部には布目が観察できる。胴部外面はヘラ磨き調整を行っている。92も 胴部の張りは弱い。口縁端はヨコナデによって凹む。胴部外面は刷毛目状工具で調整した後 ナデられている。94は胴部が張る。頸部は強いヨコナデによって、胴部との境に段がつく。 口縁は内湾気味である。外面は刷毛目状工具による調整後ナデられている。93は「く」の字 状口縁で、端部はやや細る。内面は胴部が張った位置より下位、外面は胴部より上位に煤が 付着する。95は口縁が大きく開いており、口縁下端に刻み目を施している。頸部には断面三 角形の低い凸帯を貼り付けている。その部分には工具の木口による押圧痕が観察できる。凸 帯下には斜線文を巡らせており、その後浮文を貼付する。浮文は楕円形でタテ方向後ヨコ方 向に押しつけられている。精良な粘土の中に角のとれた砂粒が混じった胎土をしており、固 く焼きしまっている。89は平底で、外面はヘラ磨き調整を行っている。90は若干上げ底になっ ている。91は円盤状の粘土の中央を押し凹めた上げ底で、胎土が粗く、含まれる砂粒も他の 土器とは異なる。





第17図 地形測量図(第Ⅷ層上面)

壺形土器 (96~109) 14点

96・97・98は口縁が外方に開き、内面に断面三角形の凸帯を貼り付けたものである。96は 直立する頸部に沈線文を9条巡らせる。97は口縁端面に沈線を1条巡らせ、口縁下端には5 本一単位の刻み目を、一定の間隔を開けて施している。98は口縁内面に貼り付けた凸帯に刻 み目を施す。口縁端面にはヘラ状工具による斜格子状の刻み目を施している。頸部には凸帯 を貼り付け、連鎖状の刻み目を施している。99は口縁端を上下に拡張させ、凹線文を2条施 す。100は頸部より口縁は真っすぐに伸び、端部で外反する。頸部には刷毛状工具で器面を調 整した痕が観察でき、その後にヘラ描き沈線文7条と、刺突文を施している。101・102・103 は大きく外反する口縁の端部を下垂させたもので、口縁端部に施文を行っている。101は4条 一単位の波状文を巡らせており、102は山形文を刻んでいる。103は刷毛目状工具の木口で斜 格子文を施している。頸部には凸帯を貼り付けて、ひだ状につまみ出しており、その部分に は布目痕が観察できる。頸部より上の外面は刷毛目状工具で調整されており、内面はヘラ磨 きを行っている。104は103と同一個体と思われる。平底で、外面刷毛目調整を行った後にへ ラ磨きを施している。105は平底の壺である。その胎土は角閃片岩や硅岩のような黒色でガラ ス質の粒子を含んでおり、他の土器とは異なっている。106・107の底部は若干上げ底のもの で、全体的に器表面が剝離しており調整はわからない。108は胎土に白色の雲母を含んでいる。 内面には籾圧痕が観察できた。109は平底で、厚味がある。胴部は中位で張る。外面は刷毛状 工具で調整を行った後ナデられている。粘土の接合部には刷毛目が観察できた。

高坏形土器 (110~114) 5点

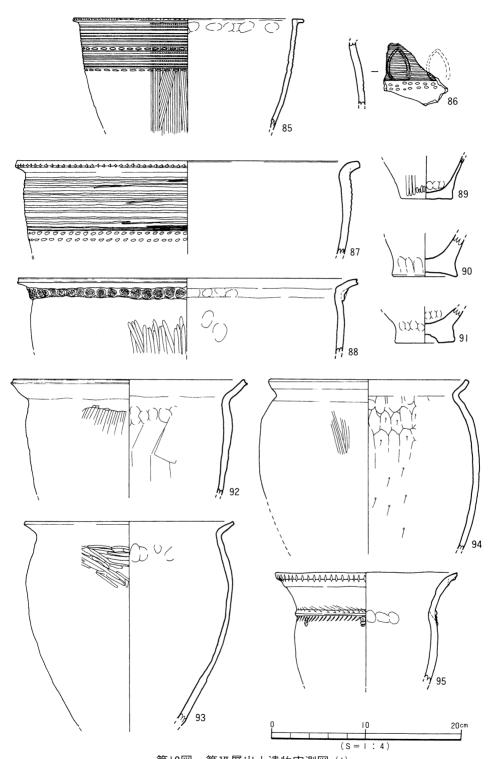
111の口縁は内傾し、外面には不明瞭な凹線文を5条巡らせている。内面にはヘラ磨き調整を行っている。110の口縁は直立する。外面には凹線文6条巡らせる。外面はヘラ磨き調整を行っている。113は裾部が緩やかに開いており、裾に凹線文を4条、端部に1条巡らせている。脚柱部には沈線文と山形文を施している。坏部は充塡技法によるものである。114は脚柱を刷毛目状工具で調整した後、2条の凹線文を3段、その間に山形文を施している。坏部は充塡技法によるものである。

ミニチュア土器 (115・116) 2点

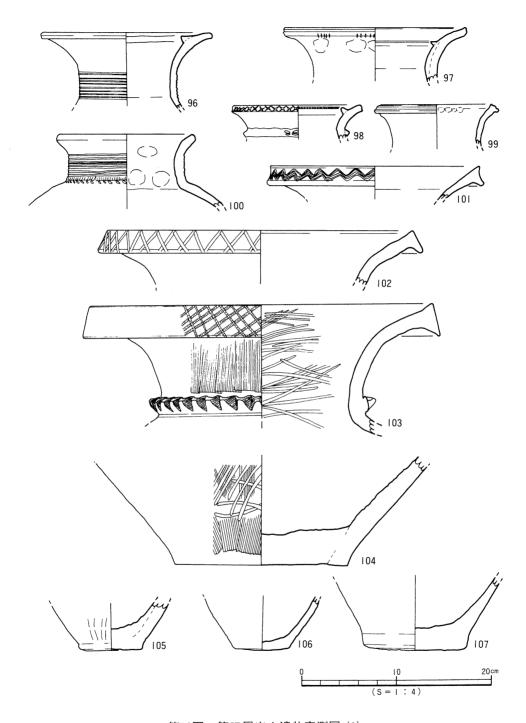
115・116は甕を模したものである。平底で胴部の張りが弱く、口縁は短く屈曲する。 石製品 (117~121) 石斧 1 点・用途不明品 2 点。

117は磨かれた面が1面のみ残っている。砥石のようなものを考えているが用途はわからない。現存長は長辺で11.7cm、短辺8.8cm、厚さ5.3cmをはかる。118は礫面をもち辺縁を打ち欠いている。現存長2.9cm、幅4.2cm、厚さ1cm、重さ10.5gをはかる。石材は不明である。119は磨製石斧で、扁平片刃のものを考えている。現存長5.7cm、幅5.9cm、厚さ1.1cmをはかる。緑色片岩製である。

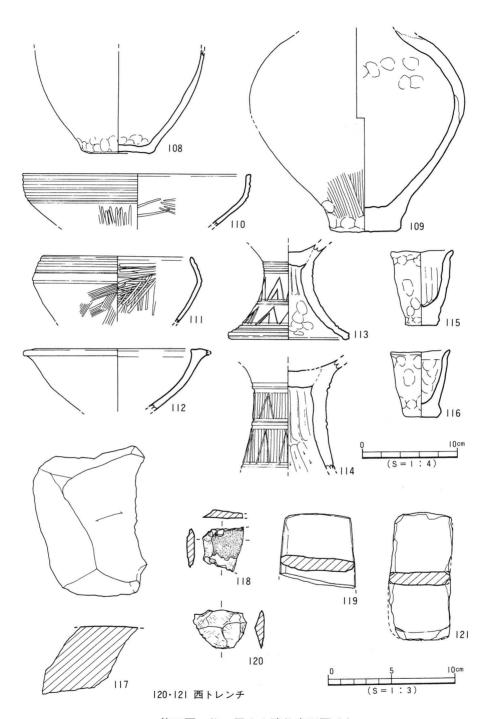
この他にサヌカイトのフレーク1点、重さにして20.5gが出土している。



第18図 第VI層出土遺物実測図(I)



第19図 第Ⅵ層出土遺物実測図(2)



第20図 第VI層出土遺物実測図 (3)

#### 2) 西トレンチ出土品 (第20図、図版15)

120はサヌカイト製のスクレイパーと考えている。長さ2.9cm、幅4.8cm、厚さ0.7cm、重さ8gをはかる。121は緑色片岩製の石斧で、扁平片刃のものと思われる。長さ10.1cm、幅4.8cm、厚さ1cm、重さ105gをはかる。

この他にサヌカイトのフレーク 1 点、重さにして $2.4\,\mathrm{g}$  と、貢岩のフレーク 1 点、 $15.6\,\mathrm{g}$  が出土している。

## (5) 種実

当調査地では約1000個を数えるモモ核と、1個のウメ核片が採集された。ウメ核については細片につき詳細はわからない。以下、モモ核について述べていくこととする。

モモ核の出土は第Ⅲ層において顕著であり、第Ⅳ層では1点のみが出土している。各層からの出土個数は表2に記している。

モモ核はその長さから便宜上分類すると、30mm前後、25mm前後、20mm前後のもの3種に分けられる。長さ25mm前後のものが主体を占め、その形態は丸みを帯びている。

表	2	出:	+	Ŧ	Ŧ	枕	_	監
æ	4	ш.	ᅩ	ᆫ	ਢ	不次		226

	分類 群			出土	地 点	
和名	学名	部位	III - ①	III – ②	III -(3)	IV
モモ Pr	unus persica B	atsch. 核	5	238 (106)	393 (80)	1

( ) は半欠の個数を示す。

# 4. まとめ

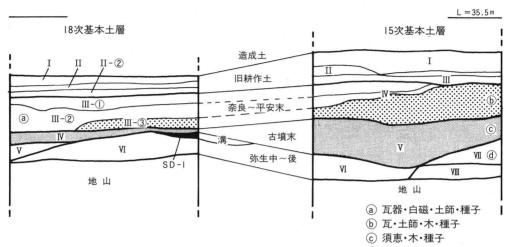
第Ⅲ層上面より検出された木杭は、杭材が貧弱なこと、上部構造が不明な事、一定な配列をなさない事などから、建築施設などではなく、土木や農耕に使われたものと考えている。また木杭は第Ⅲ層上面での検出であり、本来は第Ⅲ層以上より打ち込まれたもので中世以後のものと思われる。

第 V 層上面より検出の溝(S D 1)は、遺物の出土量は少ない為、明確な時期判断はしがたいが、上層及び下層との前後関係から古墳時代に比定されるものである。本溝の性格については判断できなかった。

本調査は東接する来住廃寺遺跡15次調査3区下段同様、旧河川の北岸から河川中央にかけての土地を調査対象地としている。本調査地第III層、第IV層、第 V層、第 VI層は出土遺物と土層観察より来住廃寺遺跡15次調査3区下段の第 IV層、第 VI層、第 VII層、第 VII層に比定されるものである。また遺物の出土状況から各層出土の遺物は、第 III — ①・②層は流入したもの、第 III — ③層と第 IV 層は投棄されたもの、第 VI層は流入したもの、第 VI 層は投棄されたものと推定される。

また、今回の調査では来住廃寺遺跡15次調査3区下段と同じく三時期の流路の堆積層が確認され、来住台地上に展開した古代集落の南限を示す資料を得たものといえる。

(主) (1)栗田正芳1993『古照遺跡―第6次査―』松山市教育委員会・㈱松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター



第21図 来住廃寺15・18次土層図 ⓓ 弥生(中期)

## 遺物一覧 - 凡例 - (岡根なおみ)

- (1) 以下の表は、本調査出土の遺物観察一覧である。
- (2) 遺物観察表の各記載について。

**種類** 例)弥生→弥生土器、黒色A→黒色土器(内黒)、須恵→須恵器、土師→土師器。

法量 単位; cm、( ): 復元推定值。

**手法** 例) □→□縁部、底→底部、高→高台、胴→胴部、頸→頸部、脚→脚部、体 →体部、他→特記した部位以外の部分、等。

色調 例)外→外面、内→内面

**胎土** 例)細砂粒 $\rightarrow 1 \sim 2$  mm大の主に石英・長石などを示す。砂粒 $\rightarrow 2 \sim 3$  mmと細砂粒より粒度が大きいもの。

**焼成** 例)  $\bigcirc$ →良好、 $\bigcirc$ →良、 $\triangle$ →やや甘い、 $\times$ →不良。

出土グリッド No.を付けた数字は遺物取り上げ時の番号である。

## 表 3 第 三一①層出土遺物観察表 土製品

w =	THE ST	00 IF	BB 47	<b>注量( )</b>	TZ ##P	手	法	色調 出 焼 成	出土グリ	図版
番号	種類	器種	器部	法量(cm)	形態	外 面	内 面	焼成	ッド	IZINX
1	瓦器	椀	底部 1/6	残高 1.35 底径(4.2)	和泉型Ⅲ—1期。 高台低く、断面方形。	高 ヨコナデ	ヘラ磨き	暗青灰 精 良 <b>⑥</b>		8
2	瓦器	椀	底部	残高 1.0 底径(4.2)	和泉型Ⅲ—1期。 高台低く、断面方形。	高 ヨコナデ	ヘラ磨き	暗青灰 精 良 ⊚		8
3	白磁	碗	口縁	残高 3.3	口縁玉縁。	施釉	施釉	灰 白 精 良 ◎		8
4	白磁	िक्ष	底部 1/2	残高 2.2 底径(7.0)	高台低く削り出す。	高無釉	施釉	オリーブ灰 細砂粒含 ◎		8

#### 第Ⅲ一①層出土遺物観察表 石製品

		工芸 坐五		部位		計測	值 (cm)		石 材	備	考	出土グリ	図版
l	番号	種類	品目	即业	全 長	幅	厚	重量(g)	11 10	V用	~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~	ッド	IZI/IX
	5	石製品	石庖丁	1/2	( 6.8)	3.4	0.5	19.8	不明				8

# 表 4 第 || 1 || 一 ② 層出土遺物観察表 土製品

**(1**)

	1 <del>= 4</del> 7	89 1 <del>46</del>	84 47	<b>::=/ )</b>	形 態	手	法	色調 胎 土 焼 成	出土グリ	図版
番号	種類	器種	器部	法量(cm)	775 RES	外 面	内 面	焼成	ッド	DI IVIX
6	瓦器	椀	底部	残高 1.0 底径(4.2)	高台衡面方形。	高 ヨコナデ 底 ナデ	ナデ→ ヘラ磨き	銀 灰 精 良 ◎		8
7	瓦器	椀	椀底部 1/2	残高 1.3 底径(5.0)	高台断面三角形。	高 ヨコナデ 底 ナデ	ナデ→ ヘラ磨き	暗青灰 精 良	10	8
8	瓦器	椀	底部 1/6	残高 3.1 底径(5.3)	高台断面三角形。	高 ヨコナデ 体 ナデ 指押え	ナデ <b>→</b> ヘラ磨き	暗灰色 精 良 〇		8
9	瓦器	椀	口縁	口径(15.0) 残高 4.5	体部丸味を帯び、口縁部は若 干外反する。	ロ ヨコナデ 体 ナデ 指押え	ナデ→ ヘラ磨き	暗青灰 精 良 ◎	41 No.39	8
10	瓦器	ш	口縁 1/10	口径(11.0) 残高 1.4	口縁部若干外反する。	ロ ヨコナデ	ナデ→ ヘラ磨き	暗青灰 精 良 ◎		8
11	白磁	碗	口縁 2/3 欠	口径 15.8 器高 5.9 底径 6.4	口縁は外方に開く。内面口縁 下に沈線が巡る。見込み蛇目 釉剝ぎ。	体 施釉 高 削り出し	体 施釉 見込 釉剝ぎ	オリーブ灰 精 良 ◎	No. 5	8
12	白磁	碗	口縁 1/10	口径(14.0) 残高 2.7	口縁玉縁。	施釉	施釉	灰白 細砂粒含 ◎		8
13	白磁	合子	1/4	口径(5.0) 残高 1.8 底径(4.0)		体 施釉 底 ナデ	施釉	青白 精 良 ◎		8
14	白磁	क्षिं	底部 1/2	残高 1.4 底径 6.4	高台平底の中央を浅く削り 出す。	高 削り出し	施釉	<ul><li>無 灰オリーブ</li><li>船 灰白</li><li>精 良</li><li>⑤</li></ul>	No.13	8

第Ⅲ—②層出土遺物観察表 土製品

	第Ⅱ	I-2/	<b>層出土</b>	遺物観察	表 土製品					<b>(2</b> )
番号	種類	器種	器部	法量(cm)	形 態	手	法	色調胎土焼成	出土グリ	図版
шэ	111	和的主	40400	/A里(Ⅲ)	717 RE	外 面	内 面	焼成	ッド	IZINX
15	土師	杯	口縁 2/3 欠	口径(15.2) 残高 3.8	平底。 口縁外方に開き、底部との境 に段がつく。	体 摩滅し不明 底 回転糸切り	摩滅し不明	橙 細砂粒含	38	
16	土師	.111.	1/2	口径(9.1) 残高 1.7 底径(6.5)	平底。 口縁部との境に段がつく。	体 ヨコナデ 底 回転糸切り	ヨコナデ	灰白 細砂粒含 〇	No. 6	8
17	土師	椀	底部 1/2	残高 2.2 底径(5.4)	高台高く断面三角形。	底 回転糸切り 高 ヨコナデ	ヘラ磨き	灰白 精 良 ◎	5 No.37	8
18	土師	杯	底部 1/2	残高 1.6 底径(6.6)	底部円盤状。 須恵質の焼き。	底へラ切り	ヨコナデ	灰白 細砂粒含		
19	土師	椀	底部 1/4	残高 2.6 底径(6.8)	高台低く断面三角形	底 糸切りか?	磨き	灰白 細砂粒含 金雲母		
20	土師	円盤 高台杯	底部 1/3	残高 2.4 底径(4.8)	底部円盤状。 体部外方に開く。	底 回転糸切り	摩滅し不明	橙褐 細砂粒含 ○		
21	土師	円盤 高台杯	底部	残高 4.1 底径 6.1	底部裾広がり。 体部外方に開く。	体 ヨコナデ 底 回転糸切り	ヨコナデ	灰白 細砂粒含 〇	No.48	8

## 第Ⅲ—②層出土遺物観察表 石製品

					計 測	値 (cm)				出土	
番号	種類	品目	部位	全 長	幅	厚	重量(g)	石材	備考	出土 グリ ッド	図版
22	石製品	石鏃		(2.6)	1.6	0.5	0.5	サヌカイト	未製品		9
23	石製品	石庖丁	細片	(3.3)	( 4.7)	(5.0)	1.21	緑色片岩			9
24	石製品	石庖丁	細片	5.5	5.6	6.5	31.2	緑色片岩			9
25	石製品	砥石	細片	( 4.2)	5.5	( 4.0)	96.0				9
26	石製品	不明		8.7	4.7	1.0	80.0	緑色片岩			9
27	石製品	不明		(16.4)	4.0	1.2	260.0	緑色片岩			9
28	石製品	砥石 (?)		(19.2)	(11.4)	( 9.5)	2150.0	砂岩			9

表 5 第 三 3 層出土遺物観察表 土製品

(1)

表 5	<b>ऋ</b> Ⅲ	3/1	<u>г</u> іці — .	遺物観察	表 土製品				III.I	(1)
番号	種類	器種	器部	法量(cm)	形態	手	法 	色調胎土	出土グリ	図版
	12.7					外 面	内面	焼 成	ッド	
29	瓦器	椀	1/3 欠	口径(15.6) 器高 5.7 底径 4.7	体部丸味を帯び 口縁は若干外反する。 高台は断面三角の山をなで つける。	ロ ヨコナデ 体 ナデ 指押え 高 ヨコナデ	ナデ→ ヘラ磨き	明青灰 細砂粒含 〇	7 No.16	10
30	瓦器	椀	1/6	口径(16.0) 器高 5.2 底径(4.6)	体部丸味を帯び口縁部との 境に段がつく。 高台は断面方形。	ロ ヨコナデ 体 ナデ 指押え 高 ヨコナデ	ナデ→ ヘラ磨き	暗青灰 精良 ◎	No.16	10
31	瓦器	椀	口緣	口径(15.6) 残高 4.0	器高が低く、口縁部との境に 段がつく。高台は断面方形。	ロ ヨコナデ 体 ナデ、指押え 高 ヨコナデ	ナデ→ へラ磨き	暗青灰 精良 ©	39	10
32	白磁	स्ट्रिं <u>च</u>	口縁 1/5	口径(15.8) 残高 3.1	口縁玉縁。	施釉	施釉	淡オリーブ 精良 ©	43	10
33	白磁	砂包	底部 1/2	残高 1.9 底径(7.0)	高台は平底の中央を浅く削 り出す。	高 削り出し	施釉	白 精良 ◎	11	10
34	土師	椀	1/2	口径(14.7) 器高 5.6 底径 6.1	体部丸味を帯び、口縁は肥厚 し外反する。 高台は高く断面三角形。	摩滅し不明	摩滅し不明	灰白 細砂粒含 〇	13 No.13 No.18	10
35	土師	椀	底部	残高 2.5 底径 6.8	高台高く断面細い三角形。	底 糸切りか?	磨き	灰黄 精良 ◎	41 • 42	10
36	土師	椀	底部	残高 2.4 底径 5.8	托状椀。断面三角の高台山を ナデつける。	高 ヨコナデ	磨き	灰白 細砂粒含 〇	17 •	9
37	土師	椀	底部	残高 1.8 底径 6.0	高台低く断面三角形。	底 糸切りか?	摩滅し不明	灰白 細砂粒含 〇	43	10
38	土師	椀	底部	残高 1.8 底径 5.4	高台低く断面方形。	底 回転糸切り	ナデ(?)	にぶい黄橙 細砂粒含 金雲母	42	10
39	土師	杯	1/2	口径(13.4) 残高 4.3 底径(7.4)	平底。 口縁は外方に開く。	体 ヨコナデ 底 回転糸切り	ヨコナデ	淡黄 細砂粒含	38 • 42	10
40	土師	杯	1/3	口径(13.8) 器高 4.7 底径(7.8)	平底。 口縁は中位で肥厚し、段がつ く。	体 ヨコナデ 底 回転糸切り	ヨコナデ	係 淡橙 底 黒 細砂粒含	39 • 46	
41	土師	ш	1/3	口径(9.2) 器高 1.5 底径(7.4)	平底。口縁部立ち上がり短い。	摩滅し不明	摩滅し不明	淡橙 細砂粒含 〇		10
42	土師		1/3	口径(8.0) 器高 1.6 底径(5.0)	平底。 口縁部立ち上がり短い。	体 ヨコナデ 底 回転ヘラ切り	ヨコナデ	灰白 細砂粒含 〇	47	10
43	土師	円盤 高台杯	底部 1/4	残高 3.0 底径(6.2)	底部若干裾広がり。 体部外方に開く。	底 回転糸切り	ヨコナデ	淡赤橙 精良 〇	42	
44	土師	円盤高台杯	底部	残高 2.1 底径 4.4	底部裾広がり。 体部外方に立ち上がる。	摩滅し不明	ヨコナデ	灰白 細砂粒含 〇	13	9
45	上師	円盤高台杯	底部	残高 2.5 底径 5.9	底部裾広がり。 体部垂直に立ち上がる。	体 ヨコナデ 底 回転糸切り	ヨコナデ	浅黄橙 細砂粒含 〇	38	9

## 第三一③層出土遺物観察表 土製品

<b>77</b> 0	THE MET	00 725	BB 47	' ( \	T/ 465			手	法		色調 胎土	典±	
番号	種類	器種	器部	法量(cm) 	形態		外	面	内	面	胎 土 焼 成	グリッド	図版
46	土師	円盤 高台杯	1/2	残高 2.0 底径(6.2)	底部のくびれ弱い。	底	回転	糸切り	ヨコナデ		灰白 細砂粒多含 〇	42	10
47	土師 (?)	椀	底部 1/4	残高 1.5 底径(7.1)	底部円盤状。 須恵質の焼き。	底	回転	糸切り	ヨコナデ		灰白 細砂粒含 〇	44	9
48	黒色 A	椀	底部 1/4	残高 2.6 底径(6.4)	高台低く断面三角形。		ヘラョコ	切り(?) ナデ	磨き(?)		灰白 細砂粒含 〇	42	10
49	黒色 A	椀	底部	残高 1.5 底径 6.0	高台断面三角形で細く尖る。	高	3 7	ナデ	刷毛目		黒褐色 精良	13	10
50	黒色 A	椀	底部	残高 3.0 底径(6.0)	托状 <b>椀</b> 。 高台高く断面三角で尖る。	摩派	或し不	明	ミガキ		例黒 例白 精良 ○	11	9
51	須恵	横瓶 (?)	口縁	口径 12.4 残高 4.3	口縁は外反する。端部は丸味 を帯び凹線を1条施す。			ナデ タタキ	口 ヨコー体 同心円	ナデ  文タタキ	灰白 砂粒含 〇		11
52	須恵	甕	底部 1/8	器高(5.4) 底径(15.4)	平底。	体	平行	タタキ	削り→ナ	Fr.	灰白 細砂粒含 ◎	9	11
53	須恵	こね鉢	口縁 1/8	口径(25.0) 残高 8.7	口縁は外方に開く。端部は面をもたせる。	33	コナデ		ヨコナデ		オリーブ灰 砂粒多含 〇		11

## 第Ⅲ—③層出土遺物観察表 木製品

Ī	番号	種類	品目	部位		計	測値(	cm)	木取り	樹種	備	考	出土グリ	図版
l	田万	作主大只		마마	全	長	幅	厚	不収り	加竹里	'VAI	75	ッド	IZI/IX
	54	木製品	用途不明		31	.1	3.4	2.3~ 3.2	板目材	ヒノキ	片面焼焦げ		3	11

## 第Ⅲ—③層出土遺物観察表 瓦

番号	種類	型式	瓦頭 残度	色調	胎土	焼成	備考	出土 グリッド	図版
55	瓦	軒丸VI	外縁欠	暗灰~ 淡黄灰	やや密	×(軟質)			
56	瓦	軒丸IV	瓦頭 1/2	淡灰~ 淡灰白	密	△(やや軟)			
57	瓦	軒丸I	ほぼ 完形	淡灰白	密	△(やや軟)	米住廃寺15次調査報告書 第70図・図版61参照		
58	瓦	軒丸I	1/2	淡灰白	密	×(軟質)			

(2)

第Ⅲ-③層出土遺物観察表 石製品・その他

番号	2# #X			AB. 193 EX. 51		値 (cm)		T +1	備考	出土 グリ ッド	ESS RE
曲写	種類	品目	部位	全 長	幅	厚	重量(g)	石材	備考	ツド	図版
59	石製品	石鏃		2.8	(2.1)	0.3	1.9	サヌカイト		15	11
60	石製品	石鏃		3.2	1.7	0.5	3.4	サヌカイト			11
61	石製品	石核		3.3	2.4	1.0	8.9	サヌカイト		40	11
62	土製品	土球		φ 2.0			8.2			46	11
63	石製品	石庖丁		10.8	6.7	1.2	167	緑色片岩		7	11
64	石製品	砥石		(9.3)	5.0	4.8	320			17	11
65	石製品	砥石		(7.7)	2.8	0.3	70			11	11
66	土製品	フイゴ羽口		( 6.3)	φ 6.4					16	11
67	土製品	フイゴ 羽口		(7.7)	φ 7.2						11

#### 表 6 第Ⅳ層出土遺物観察表 土製品

番号	種類	器種	器部	法量(cm)	形態			手		法		色調	出土グリ	図版
世方	作里大規	石匠工里	선수 다니	太重(cm)	N2 755		外	面	F	内	面	胎 土 焼 成	ッド	IZI/IX
68	須恵	杯身	口縁 1/3	口径(13.2) 残高 4.2 受部径 (14.9)	底部丸味を帯びなだらか。 かえりは短く内傾。	底口		ヘラケズリ ナデ	32	ナデ		暗青灰 細砂粒含 〇	8 40 52	
69	須恵	甕	1/6	口径(17.4) 残高 13.0	口縁は外反し、端部を屈曲さ せる。 体部は球形を呈す。	体		ナデ→ カキ目 タタキ→ カキ目	口体	ヨコナ	-デ 文タタキ	灰白 細砂粒含 〇	54	12

#### 第Ⅳ層出土遺物観察表 木製品

	310 -											
番号	種類	品目	部位		計	測値(	cm)	木取り	樹種	備考	出土グリ	図版
借与	性規	PD 13	却加	全	長	幅	厚	不収り	竹町竹里	)M 75	ッド	IAINX
70	木製品	用途 不明		23	3.7	3.8	1.5	柾目材	ヒノキ		28	12
71	木製品	木錘		17	7.8	7.3~ 7.7	径 7.0	芯持ち材	ヒノキ科		10	12

## 第Ⅳ層出土遺物観察表 石製品

(1) 出土 グッド 計 測 値(cm) 図版 番号 種類 品目 部位 石 材 備 考 全 長 幅 重量(g) 楔形 72 石製品 2.6 0.5 サヌカイト 20 12 2.1 3.9 石器 73 石製品 石庖丁 細片 (3.5)(3.2) 0.55 9.5 緑色片岩 56 12

## 第Ⅳ層出土遺物観察表 石製品

	第 IV	層出	L遺物	観察表	石製品	1					<b>(2</b> )
番号	種類	品目	部位		計測	值 (cm)		石 材	備考	出土 グリッド	図版
H 7	1至末	HH []	ᇚ	全 長	幅	厚	重量(g)	11 17	I/ME 75	ッド	DAINX
74	石製品	石庖丁		(3.4)	(3.0)	( 0.6)	8.4	緑色片岩		9	12
75	石製品	石斧		(5.4)	3.4	1.8	186	緑色片岩		2	12
76	石製品	砥石		6.4	4.7	3.1	139			16	12
77	石製品	不明		(8.1)	3.5	1.0	62			52	12
78	石製品	不明		14.0	7.6	1.8	240			2	12

## 表 7 第 7 層出土遺物観察表 土製品

番号	種類	器種	器部	  法量(cm)	形態	手	法	色調光焼成	出土グリ	図版
						外 面	内 面	焼 成	ッド	
79	弥生	柔	底部 1/2	残高 6.4 底径(7.8)	くびれた上底。	ヘラ磨き	ナデ	淡赤橙 砂粒含 〇	25	
80	弥生	変形土器ミニチュア		口径 7.0 器高 7.5 底径 3.4	胴は中位よりやや上で張る 口縁外方に屈曲する。	۰		灰白 細砂粒多含	54	12
81	弥生	高坏	口縁 1/10	口径(22.8) 残高 7.2	口縁外面に凹線文1条と、へ ラ状工具による刺突文を施 す。口縁端面に凹線文2条。	刺突文	ロ ヨコナデ	淡橙色 精良 ○	20	12

## 第 Ⅴ 層出土遺物観察表 石製品

		/H HH-			H 3X H							
番号	種類	品目	部位		計測	值 (cm)		石材	備	考	出土グリ	図版
H 7	1至大尺	BB CI	다 177	全 長	幅	厚	重量(g)	11 171	"VA	5	ッド	DIM
82	石製品	磨石 (?)		7.7	6.2	2.5	140	砂岩(?)			25	12
83	石製品	石庖丁		( 9.0)	5.2	0.9	80	緑色片岩	未製品		54	12
84	石製品	管玉		2.1	φ 0.6		1.6	緑色凝灰岩			28	12

## 表 8 第 Ⅵ 層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	種類	器種	器部	法量(cm)	形態			手	法		色調胎土	出土	図版
田つ	1至大尺	九件1王	40 40	/A里(CIII)	/12 see		外	面	内	面	焼成	ッド	IZI/IX
85	弥生	甕	口縁 1/6	口径(24.0) 残高 11.7	口縁貼付け(?) 口縁下に櫛目文(7~8本) と刺突文を施す。	旧胴		ナデ (7本/ cm) 文	ナデ		にぶい黄褐色 砂粒多含 〇	15 • 16	13
86	弥生	甕	頸部片	不明	2本一単位の沈線を16条巡 らした上に方錘形の文様を 施し、刺突文を2段巡らす。	ナラ	デ→ 施文		ミガキ		黄橙 細粒含 ○		13
87	弥生	甕	口縁 1/10	口径(36.0) 残高 9.8	口縁短く屈曲する。 下端に刻み目を施す。口縁下 に櫛目文と刺突文を施す。	口胴	刻み	ナデ→ 目 →施文	ロ ヨコ 胴 ナテ	ナデ	浅黄橙 細砂粒多含	8	13
88	弥生	聻	口縁 1/10	口径(35.6) 残高 7.6	口縁「く」の字に屈曲する。 頸部凸帯文貼付け布などで 押す。	口胴	ヨコヘラ	ナデ磨き	í	ナデ (?)→ ナデ	灰褐 細砂粒多含	19	13

## 第Ⅵ層出土遺物観察表 土製品

					上	手	 法	色調	出土	(2,
番号	種類	器種	器部	法量(cm)	形態	外 面	内 面	胎土焼成	グリッド	図版
89	弥生	甕	底部一部欠損	残高 4.2 底径 6.8	平底。 器壁は薄い。	⑥ ナデ ヘラ磨き→ナデ	ナデ	例 橙 例 淡黄 細砂粒多含 ○	20	13
90	弥生	壺	底部	残高 3.5 底径(7.5)	底部若干上げ底。 端部つまみ出す。	ナデ	ナデ	橙 細砂粒多含 <sub>△</sub>	7	13
91	弥生	甕	底部	残高 3.4 底径(6.2)	円盤状の底部中央凹め上底とする。	ナデ	ナデ	<ul><li>外 橙</li><li>内 淡黄</li><li>細粒多含</li></ul>	46	13
92	弥生	甕	口縁 1/8	口径(24.0) 残高 21.2 頸部径 (20.8)	胴部の張り弱い。口縁は屈曲 し、端部はヨコナデにより凹 む。	ロ ヨコナデ 胴 ハケ(8本/cm) →ナデ	ロ ヨコナデ 胴 ハケ状工具に よるナデ	外 赤灰 内 にぶい褐 細砂粒多含 〇	7	13
93	弥生	甕	口縁 1/5	口径(22.0) 残高 21.8 頸部径 (19.3)	口縁「く」字に屈曲する。 胴部は上位で張る。	<ul><li>□ ヨコナデ</li><li>胴 □ ヘラ磨き</li><li>□ 摩滅し不明</li></ul>	ロ ヨコナデ 胴 ナデ	赤橙 細砂粒多含	13	13
94	弥生	甕	口縁	口径(20.5) 残高 18.0	口縁「く」字に屈曲し、端部が 内湾する。	ロ ヨコナデ 胴 ハケ(7本/cm) →ナデ	ロ ヨコナデ 胴 ヘラ削り	にぶい橙 砂粒多含 〇	14 15 21	13
95	弥生	虁	口縁 1/10	口径(35.6) 残高 7.6	口縁外方に大きく開く。 口縁端刻み目、頸部凸帯貼付 け、凸帯下に刻み目、浮文を 施す。	ナデ→施文	ナデ	灰褐 細砂粒含	14 15	13
96	弥生	壺	口縁	口径(17.8) 残高 8.4	口縁外方に大きく開く。 内面に凸帯張付け。 頸部櫛目文を施す。	ナデ→施文	ナデ→凸帯貼付け	淡黄色 細砂粒多含		14
97	弥生	壺	口縁 1/6	口径(18.8) 残高 5.2	口縁外反し、端は凹線1条、 下端に刻み目を施す。 内面凸帯貼付け。	ナデ→施文	ナデ	淡黄 細砂粒含 〇	21	14
98	弥生	壺	口縁 1/5	口径(13.0) 残高 2.4	口縁内面凸帯貼付け、端刻み 目。口縁端刻み目。 頸部凸帯貼付け。連鎖状刻み 目文。	ナデ	ナデ	褐 砂粒多含 〇	9	14
99	弥生	壺	口縁 1/4	口径(11.6) 残高 4.5	口縁端若干拡張し、凹線 2 条 施す。	ロ ナデ→施文 他 ナデ	ナデ	淡赤橙 細砂粒含	19	14
100	弥生	壺	口縁	口径(13.9) 残高 7.6	頸部より口縁直立し、口縁端 で外反する。 櫛描文と刺突文を巡らす。	ロ ヨコナデ 頸 ハケ→施文 肩 ナデ	ナデ	灰白 細粒多含 〇	45	14
101	弥生	壺	口縁 1/5	口径(21.4) 残高 3.6	口縁外反し端拡張し下垂する。 波状文(4本/単位)を巡らす。	ヨコナデ→施文	ヨコナデ	橙色 細砂粒多含	7	14
102	弥生	壺	口縁 1/6	口径(34.0) 残高 5.7	口縁大きく開く。端部拡張し 下垂する。 山形文を施す。	ヨコナデ→施文	ナデ	にぶい橙色 細砂粒多含 〇	14	14
103	弥生	壺	口縁 1/8	口径(37.6)	口縁端拡張し下垂する。 端部格子目文を施す。 頸部凸帯文を貼付け山形に 仕上げる。	ロ ナデ→施文 頸 ハケ(10本/cm) →凸帯	ナデ→ハケ	橙 細砂粒多含	13 7 14	14
104	弥生	壺	底部	残高 16.5 底径(18.0)	平底。	ハケ(8本/cm) →ヘラ磨き	摩滅し不明	淡黄 砂粒多含 〇	15	14
105	弥生	壺	底部	残高 5.0 底径 5.8	平底。	摩滅し不明	摩滅し不明	褐灰色 砂粒雲母 多含 <sub>△</sub>		
106	弥生	壺	底部	残高 5.8 底径(5.3)	底部若干突出する。	磨き(?) 底 ナデ	ナデ	淡黄 細砂粒含 〇	19	

(2)

(3)

## 第Ⅵ層出土遺物観察表 土製品

						手	———————— 法	色調胎土	出土	
番号	種類	器種	器部	法量(cm)	形態	外 面	内 面	胎土焼成	グリッド	図版
107	弥生	櫥	底部	残高 7.8 底径 11.0	底部若干突出する。	ナデ	ナデ	淡黄 砂粒多含 〇	7	
108	弥生	甕	底部	残高 10.6 底径 7.6	若干上げ底ぎみ。 胴部内湾ぎみに伸びる。	胴 摩滅し不明 底 指押え	底 指押え	灰黄 雲母多含 〇	19	
109	弥生	壺	底部	残高 14.3 底径 7.7	平底で厚味有り。 胴部中位で張る。	上位 ナデ 下位 ハケ (4本/cm)	ナデ	淡黄 細砂粒多含 〇	7 • 9	15
110	弥生	高坏	口縁 約1/8	口径(24.0) 残高 5.5	口縁直立する。外面にぶい凹 線文 6 条。	ロ ナデ→施文 ナデ→ヘラ磨き	ナデ→ヘラ磨き	淡黄色 細砂粒含 〇	23	15
111	弥生	高坏	口縁 1/3	口径(15.4) 残高 7.0	口縁内傾する。外面に擬凹線 文を施す。	ロ ヨコナデ→施 文 胴 ハケ	へう磨き	にぶい黄橙 細粒多含 〇	17	15
112	弥生	高坏	口縁	口径(19.8) 残高 6.6	口縁水平方向に 若干伸びる。	ロ ヨコナデ	摩滅し不明	にぶい黄橙 砂粒多含 〇	21	15
113	弥生	高坏	脚 1/2	残高 10.1 底径(12.0)	裾部ゆるやかに開く。 脚部に凹線文と山形文を施 す。 充填技法。	ナデ→施文	ナデ	橙 細砂粒含 〇	8	15
114	弥生	高坏	脚	残高 11.5	脚柱ハケ調整のち凹線文2 条と山形文を施す。 充塡技法。	ハケ(4本/cm) →施文	<ul><li>上 ナデ</li><li>ト ヘラ削り</li></ul>	にぶい橙 細砂粒含 〇	. 15	15
115	弥生	変形土器 ミニチュア		口径 6.5 残高 8.0 底径 3.4	平底。口縁は外方に短く屈曲。	ナデ	ナデ	灰白 細砂粒多含 〇	21	
116	弥生	変形土器ミニチュア		口径(6.1) 器高 7.2 底径 3.2	平底。口縁は外方に短く屈曲。	ナデ	ナデ	灰白 細砂粒多含 〇	21	

## 第 Ⅵ 層出土遺物観察表 石製品

番号	種類	品目	部位			計 測	値 (cm)		石材	備考	出ガリッド	図版
留写	俚親	ᇚㅂ	即业	全	長	幅	厚	重量(g)	41 19	1佣 号	ッド	IZI/IX
117	石製品	砥石	-	11	.7	8.8	5.3	654	不明		8	15
118	石製品	スクレ イパー		2	.9	4.2	1.0	10.5	不明		13	15
119	石製品	石斧		( 5	.7)	5.9	1.1	80	緑色片岩		15	15
120	石製品	スクレ イパー		2	.9	4.2	0.7	8.0	サヌカイト		西トレ	15
121	石製品	石斧		10	.1	4.8	1.0	105	緑色片岩		西トレ	15

表 9 第 111 層 上 面 検 出 の 木 杭

表 9	第Ⅲ層上面	険出の木杭		
番号	Ħ	測値(	em)	樹種
	長さ	幅	径	120 1±
1	23.0	3.0	_	アサダ
2	7.0	_	2.5	ヤナギ属
3	27.0	長軸 4.0	短軸 3.0	ヤブツバキ
4	34.0	_	3.0	ヤブツバキ
5	27.0	_	3.5	マツ属複維管束亜属
6	27.0	_	3.5	サクラ属
7	31.0	_	11.0	マツ属複維管束亜属
8	14.0	3.0	厚 1.5	サクラ属
9	27.0	_	4.0	ブナ属
10	52.0	長軸 3.0	短軸 2.5	シロダモ
11	18.0	長軸 2.0	短軸 1.5	スダジイ
12	39.0	_	3.5	スダジイ
13	36.5	_	4.0	スダジイ
14	12.0	_	3.0	コナラ属アカガシ亜属
15	22.0	_	3.5	ヒサカキ属
16	20.0	長軸 4.5	厚 3.0	マツ属複維管束亜属
17	11.0	3.0	厚 1.5	マツ属複維管束亜属
18	38.5	_	4.5	マツ属複維管束亜属
19	14.0	3.5	厚 2.0	マツ属複維管束亜属
20	47.0	_	5.0	マツ属複維管束亜属
24	49.0	_	5.0	マツ属複維管束亜属
23	21.5	_	3.0	シロダモ
26	13.0	_	3.0	マツ属複維管束亜属
27	36.0	_	4.0	マツ属複維管束亜属
28	23.0	2.5	厚 2.0	シログモ
		•	·	·····

<sup>(</sup>注) ① 表中の木杭番号は、第5図第Ⅲ層上面木杭検出状況の番号に対応する。 ② 樹種は、㈱古環境研究所の分析(第5章)による。

第3章

# 来 住 廃 寺

-20 次調查地-

# 第3章 来住廃寺20次調査地

## 1. 調査の経過

## (1)調査に至る経緯

1990 (平成2) 年7月、株式会社 恵比寿より、松山市来住町603-2・603-6における共同住宅建設にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。

当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『127 来住廃寺跡』内にあたり、これまでも多くの調査が実施されており、周知の遺跡として知られている。同包蔵地内では、白鳳期の創建として知られる来住廃寺〔小笠原 好彦・森 光晴 1979〕や、官衙関連遺構の久米高畑遺跡〔西尾 幸則・池田 学 1989, 1991〕などがある。

同包蔵地内にある来住台地は、近年、都市計画での市街化地域でもあり緊急調査がさかんに実施されている土地である。調査により縄文時代後期から中世に至る集落関連遺構が多数検出され、特に、古代においては同地域が松山平野の中心的位置を占めていたことが明らかになりつつあり注目される地域となっている。

これ等のことより、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、1990 (平成2) 年8月に文化教育課は試掘調査を実施した。

試掘調査は、調査区の数カ所にトレンチを掘り、土層及び遺構・遺物の検出を行った。その結果、柱穴2基、土師器、須恵器を含む遺物包含層を確認した。

この結果を受け、文化教育課と株式会社恵比寿の二者は、遺跡の取扱いについて協議を行い、宅地開発によって失われる遺構について、記録保存のため発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、弥生時代集落の範囲確認と、調査地の西にある来住廃寺の寺域及び官衙遺構の東域の状況を明らかにすることを目的とし、文化教育課が主体となり、株式会社恵比寿の協力のもと1992(平成4)年8月4日に開始した。

## (2) 調查組織

調 查 地 松山市来住町603-2.603-6

遺跡名 来住廃寺20次調査地

**調査期間** 野外調査 1992 (平成 4 ) 年 8 月 4 日 ~ 同年10月13日

調査面積 539.93 m²

調查協力 株式会社 恵比寿

調査担当 西尾 幸則(現、松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター学芸係長)

水本 完児 小笠原 善治

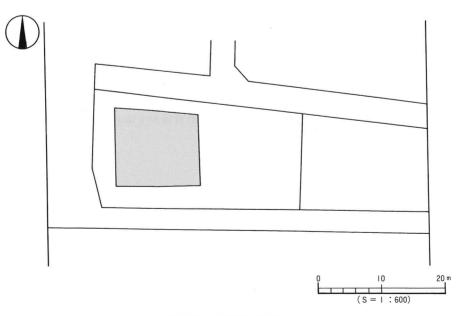
作業員 政本 和人、重松 吉雄、利屋 勉、細田 尚秀、神野 元、能田 久士、西谷陽一郎、宮川 延之、森 隆、相原 勇、是沢 嘉昭、相原 忠重、宮本 健吉、宮脇 武男、熊本美津江、雲峰 智子、野本 益子、束村智恵子、野口美佐美、河野 直美、宮崎 由紀、岡本 邦栄、中村 紫

## (3) 経 過

調査地は、造成地であり、調査対象面積は539.93㎡である。廃土置場の都合上、最終的な発掘調査面積は約150㎡となった。以下、調査工程を略記する。

1992 (平成4) 年8月4日より重機による表土剝ぎ取り作業を開始した。表土剝ぎは、調査日程の都合上、試掘調査の結果をもとに、地表下約1.5mまで掘り下げを行い、廃土は調査地外へ搬出した。調査地は、試掘の後、一度埋め戻されていたため、それら攪乱土の除去を含め、表土剝ぎ取り作業に2日間を費やした。8月7日より作業員を増員し本格的な調査を実施する。引き続き包含層の掘り下げを行う。遺構検出を8月31日に終了し、その後、溝、土壙、性格不明遺構、柱穴の掘り下げを開始する。10月12日、遺構の測量を完了する。10月13日、出土遺物や調査用具等を撤去する(野外調査終了)。

(註) 本報告では、1.調査の経過、2.層位、3.遺構は水本が、3.遺物(土器)、4.まとめは梅木が、3.遺物(石器) は加島が担当した。



第22図 調査地測量図

# 2. 層 位 (第24図)

本遺跡は、松山平野東部に広がる来住台地上の南部、標高40.70mに立地する。

基本層位は、第 I 層表土 (造成土・耕作土)、第 II 層水田床土、第 III 層暗灰褐色土、第 IV 層暗茶褐色土、第 V 層褐色粘質土、第 VI 層黄褐色土である。

第 I 層は40~60cmの厚さを測る。

第II層は5~20cmの厚さを測る。

第Ⅲ層は暗灰褐色土で、2~27cmの堆積で、弥生土器・須恵器・瓦・陶磁器を包含する。

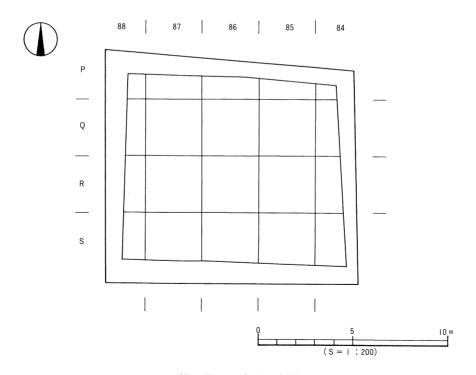
第Ⅳ層は暗茶褐色土で 2~20cmの堆積であり、遺物包含層である。弥生土器が出土する。

第 V 層は褐色粘質土で厚さ 2 ~42cmの堆積であり、無遺物層である。

第VI層は黄褐色土で20cm以上の堆積である。

遺構は第V層上面と第Ⅵ層上面での検出である。

第 V 層上面では溝 1 条・土壙 2 基・柱穴10基・性格不明遺構 1 基を検出した。また、第 V 層上面で柱穴 1 基を検出した。第 V 層上面の標高を測量すると、調査区東側から西側へ、北側から南側へ漸次緩傾斜をなしている。



第23図 調査地区割図

# 3. 遺構と遺物

本調査では、溝1条 (SD1)、土壙2基 (SK1・2)、性格不明遺構 (SX1)、柱穴11基 (SP1~11)を検出した。

#### 

Ⅰ) S D Ⅰ (第25·26図、図版17~19)

調査区西側に位置し、南及び北は調査区外に続く。第 V 層上面で検出し、規模は検出長11.2 m、幅3.6m、深さ70cmを測る。覆土は黒色粘質土で、遺物は弥生時代前期末の甕形土器や壺形土器が覆土中の上~中位で出土した。ただし、上・中位での接合遺物もあり、レベル差は時期的差にはならないと判断される。なお、出土状況図には、取り上げのドッドを図化した。

出土遺物 (第27~30·32図、図版21)

甕形土器 (1~22)

折り曲げ口縁( $1 \sim 8$ )  $1 \sim 8$  は、口縁部を折り曲げて成形するものである。胴部上半に若干の膨らみをもち、口径と胴部最大径は等しくなるものが多い。ただし、胴部最大径は口径を凌ぐことはない。口縁端面には、刻目をもつもの( $1 \cdot 2 \cdot 8$ )と刻目をもたないもの( $3 \sim 7$ )とがある。胴部には、ヘラ描き沈線文が $4 \sim 14$ 条施され、沈線文帯下位に刺突文を施している( $1 \sim 6 \cdot 8$ )。7 は、胴部加飾はなく、口縁の屈曲部に締まりがあり、他とは異なる様相を呈している。

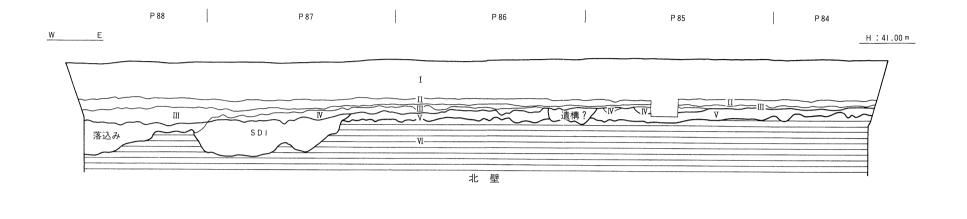
貼り付け口縁(9~12) 9~12は口縁部外面に、粘土紐を貼り付けて口縁部を成形するものである。9・10は口縁端部が欠損するものである。9~11は胴部にへラ描き沈線文が4~13条施され、さらには9・10では刺突文が、11では沈線文後に2条1組の工具により山形文が施される。12は小破片で、磨滅が著しいものである。

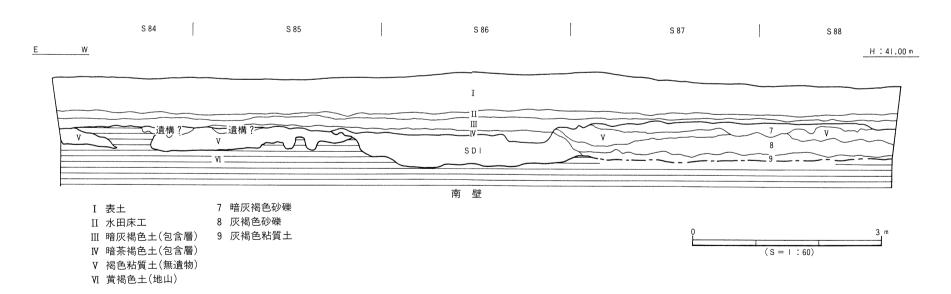
底部 (13~22) 底部は、胴部から底部への変化が少ないものは平底で、底部にやや立ち上がりをもつものは弱干の上げ底(凹み)をもつ傾向にある。

壺形土器 (23~34)

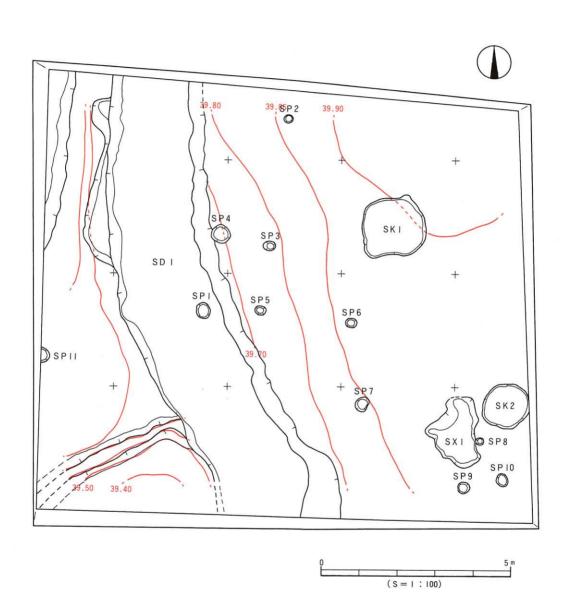
口頸部片 (23~27) 23~25は頸部が太く、短く外反する口縁部をもつものである。23は球形の胴部に、内傾する頸部、短く外反する口縁部をもつ。頸部下位にヘラ描き沈線文 2 条と刺突文をもつ。口縁端面には刺突文を施す。24・25は同形態を呈するものであろう。26・27は長い口頸部をもつもので、内面に凸帯を施す。

胴部片 (28~32) 28は内面に稜をもつものである。29は小型品で、ミニチュア品の可能性もある。30~32は球形を呈する胴部で、30はヘラ描き沈線文帯 (5条)の上下に刺突文を施し、31では貼り付け凸帯の上下に沈線文を施すものである。32は刻目凸帯の上位側に限りヘラ描き沈線文が施される。

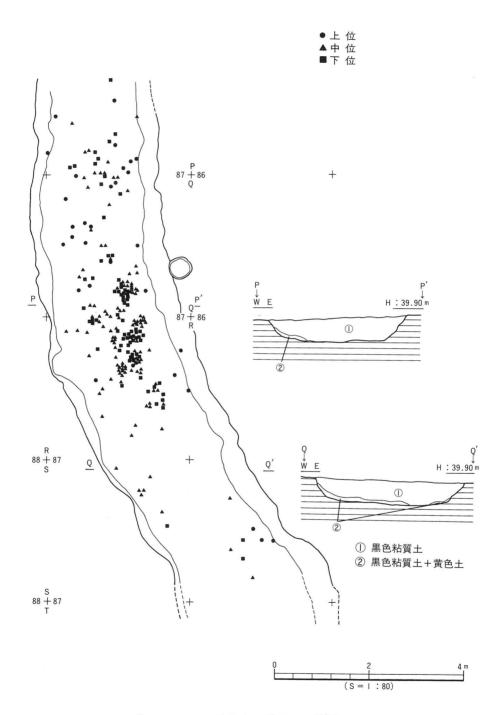




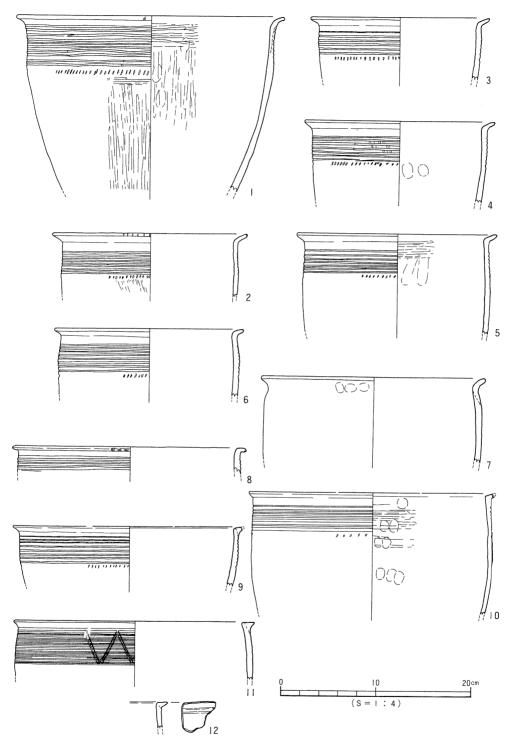
第24図 土層図



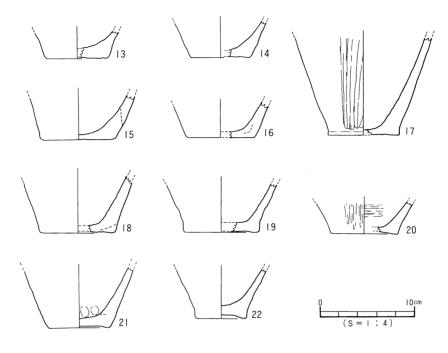
第25図 遺構配置図



第26図 SDI遺物出土状況・土層図



第27図 SDI出土遺物実測図(I)



第28図 SDI出土遺物実測図(2)

底部 (33·34) 33は底径が大きいもので平底となるものである。34は甕形土器底部に形状が 似るもので、区別が難しいものである。

#### 鉢形土器 (35)

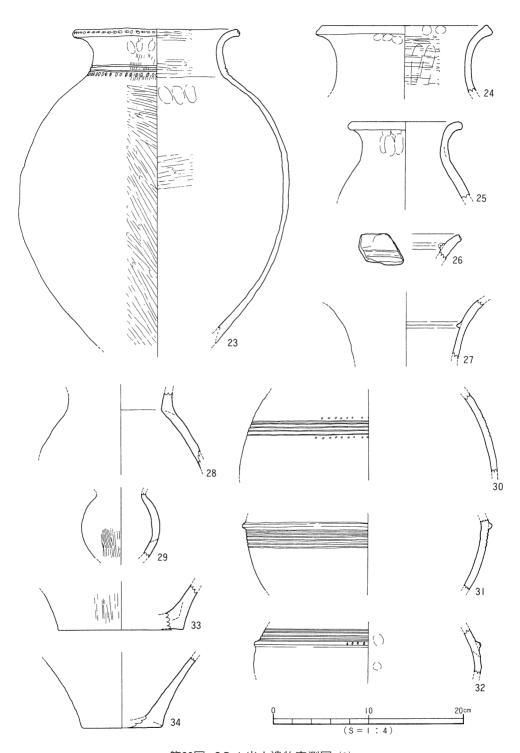
35は大型品となるもので、ゆるやかに外反する口縁部をもつ。口縁部外面下に、指頭痕が 看取される。

蓋形土器 (36·37)

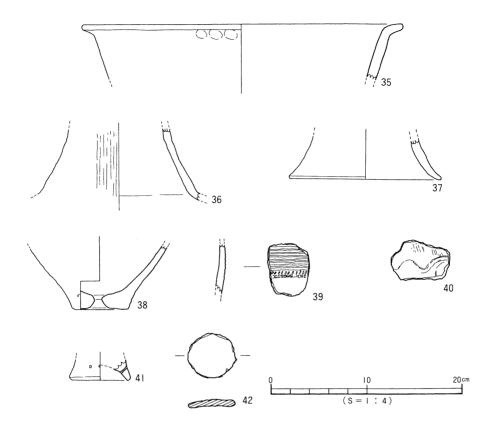
36・37は甕用の蓋形土器である。天井部は高いものとなる。

その他 (38~42)

38は壺形土器底部片を焼成後に穿孔し、所謂「コシキ」に転用したものである。39は甕形土器の胴部片である。7条以上のヘラ描き沈線文帯下位に、刺突文と竹管文を施すものである。40は壺形土器の胴部小破片である。2条1組の工具による沈線で、施文であるかは判断しがたいものである。41は、器種を特定できないが、無頸壺の底部か、もしくは(図は逆さだが)蓋形土器のつまみ部が考えられるものである。焼成前の小円孔が2ヶ1組施されている。42は胴部破片を再利用しようとした円形の土製品である。



第29図 SDI出土遺物実測図 (3)



第30図 SDI出土遺物実測図(4)

## 2) SDI関連資料(第31図、図版21)

グリッド87 P ~87 R として取り上げた遺物であるが、元来は S D 1 の遺物であるものである。(43~51)

#### 甕形土器 (43~48)

43~48は、折り曲げにより口縁部を形成するものである。口縁端部には刻目を施すもの44・48と、施さないもの43・45~47がある。胴部にはヘラ描き沈線文をもち、43は沈線文帯下位に刺突文、47では沈線文帯間に刺突文を施している。

#### 壺形土器 (49~51)

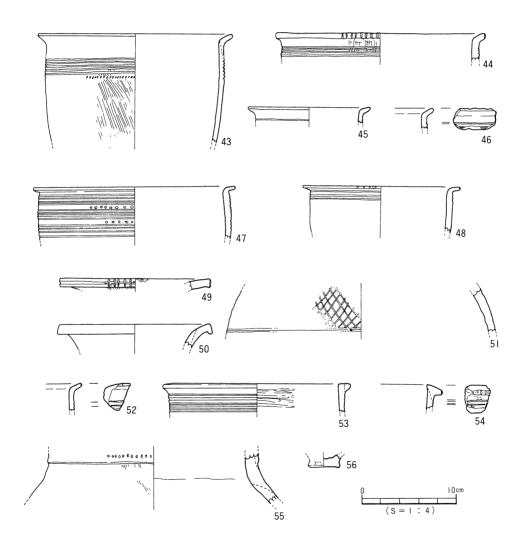
49・50は口縁部片である。49は口縁端面にヨコ方向の沈線文の後、刻目を施すものである。 50は口縁端部がわずかに垂下するものである。

51は胴部片で、斜格子目文とヨコ方向のヘラ描き沈線文が施される。

## 3) トレンチ出土品 (第31図52~56、図版21)

調査上、調査区内にトレンチを設置した。SD1の部分より出土したものである。

52~54は甕形土器である。52は折り曲げ、53・54は貼り付けによる口縁部をもつものである。口縁端面には刻目をもつ54と、もたない52・53がある。胴部にはヘラ描き沈線文が施される。55は壺形土器の頸~肩部片である。削り出しかと思われる段をもつ。段上には刺突文が施される。56はミニチュア品の底部片である。平底の底部は、やや立ち上がりをもつ。

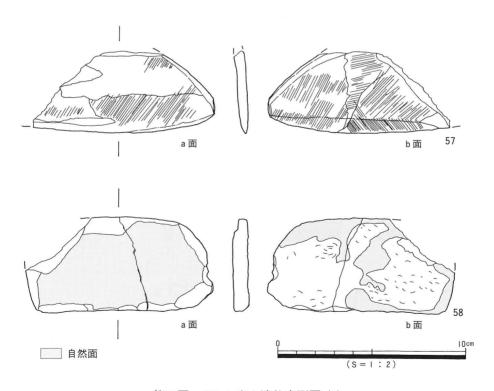


第31図 SDI関連出土遺物実測図

#### 4) 石器 (第32図)

本遺跡から出土した石製品は、石庖丁未製品と石器素材である。いずれもSD1からの出土である。57は石庖丁未製品である。緑色片岩製。左半部が欠損する。平面形態は、直線刃半月形を呈す。刃部端は面とりされている。器面の研磨は最終段階まで到達しておらず、a面の鎬は甘いために不明瞭である。法量は、長さ9.6cm、幅4.4cm、厚さ0.9cm、重量39.7gである。58は緑色片岩製の石器素材である。b面には打裂あるいは敲打が認められ、両面には自然面が大きく残置する。法量は、長さ9.9cm、幅4.9cm、厚さ0.8cm、重量93.5gである。

わずか 2 点ではあるが S D 1 出土のこれらの石製品は、松山平野における弥生時代前期後半の稀少な資料であり、その意味では当平野における弥生石器研究の貴重な一資料として位置付けることができよう。製品自体の出土はみられなかったものの、未製品と石器素材の出土をみたことから、本調査地を含む周辺で大陸系磨製石器の製作をおこなっていたことが理解できる。



第32図 SDI出土遺物実測図(5)

## (2) 土壙 (第33図、図版20)

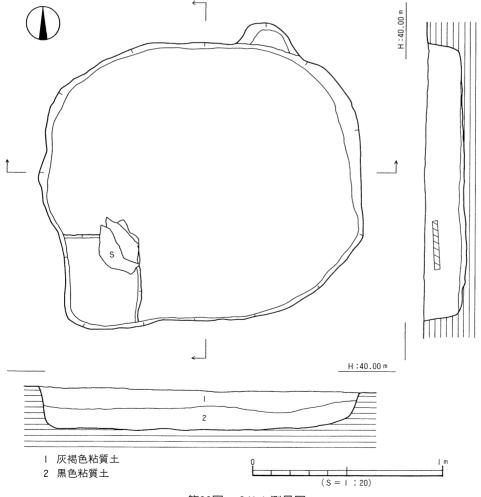
#### SKI

調査区の中央やや北東寄りに位置し、第V層上面で検出する。平面形は隅丸方形を呈する。 規模は長軸1.92m、短軸1.45m、深さ25cmを測り、断面形は逆台形である。西南隅は、攪乱 を受け、その中より幼児の頭大の石が1個出土した。覆土は上層が灰褐色粘質土、下層が黒 色粘質土で、上位からは弥生土器片4点、須恵器片が1点出土した。下層からは遺物が出土 しなかった。出土遺物はいずれも小片である。

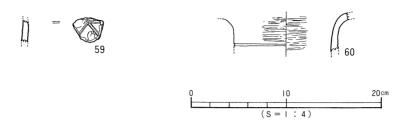
#### 出土遺物 (第34図)

59・60は壺形土器の小破片である。59はヨコ方向と山形文と思われるヘラ描き沈線文が施される。60は頸部片でヘラ描き沈線文が1条以上施される。

時期:時期決定に有力な資料は少なく、時期の特定は判断しがたい。



第33図 SKI測量図

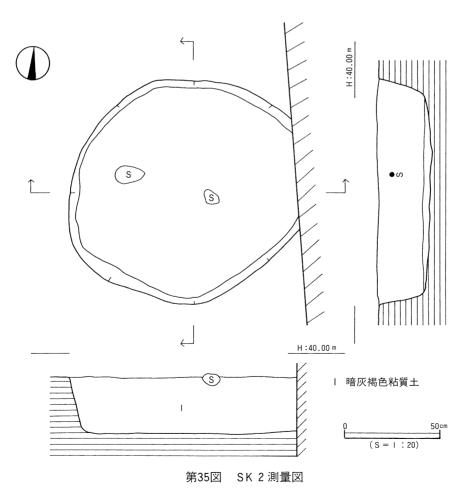


第34図 SKI出土遺物実測図

## SK2 (第35図)

調査区東南に位置し、西端は調査区外に続く。第 V 層上面で検出した。平面形は円形を呈する。規模は南北1.21m、東西1.19m、深さ34cmを測り、断面形は逆台形である。覆土は暗灰褐色粘質土で、遺物は幼児の頭大の石が 2 個上面より出土した。

時期:時期決定に有効な資料はなく、時期は判断しがたい。



#### (3) 不明遺構(第25図)

SXI

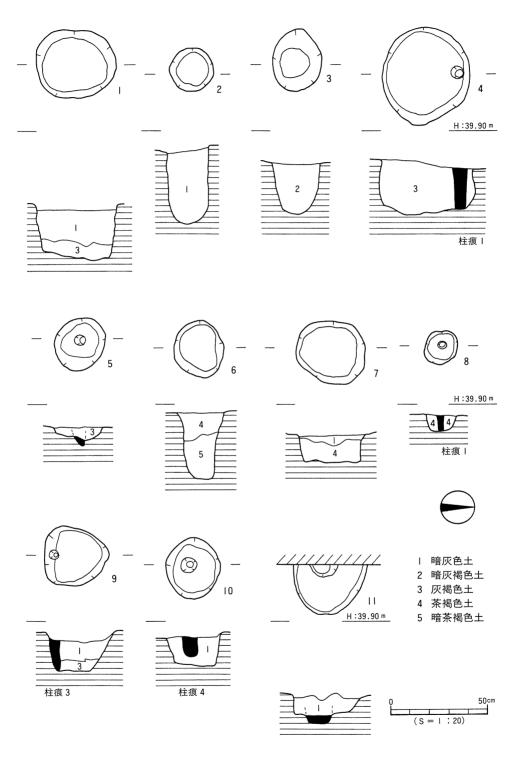
調査区東南に位置し、東にはSK2がある。第V層上面で検出した。平面形は不整形である。規模は長軸1.91m、短軸1.05m、深さ28cmを測り、断面形は船底状である。覆土は上位が灰褐色粘質土、下位が褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

時期:時期決定に有効な資料はなく、時期は判断しがたい。

## (4) 柱穴 (第36図)

調査区からは柱穴11基 (SP1~11) を検出した。

- SPⅠ:調査区の中央やや西寄りに位置し、SD1を切っている。第V層上面で検出した。 柱穴の平面形は楕円形で、規模は長軸42cm、短軸36cm、深さ30cmを測る。覆土は暗灰色土で、 遺物は出土しなかった。
- SP2:調査区中央北側に位置し、第V層上面で検出した。柱穴の平面形は円形で、規模は径22cm、深さ42cmを測る。覆土は暗灰色土で、遺物は出土しなかった。
- SP3:調査区中央にある。第Ⅴ層上面で検出した。柱穴の平面形は楕円形で、規模は長軸33cm、短軸26cm、深さ29cmを測る。覆土は暗灰褐色土で、遺物は出土しなかった。
- SP4:調査区の中央やや西寄りに位置し、SD1を切っている。第V層上面で検出した。 柱穴の平面形は円形で、規模は長軸51cm、短軸45cm、深さ30cmを測る。覆土は灰褐色土で、 遺物は出土しなかった。
- SP5:調査区中央にあり、第V層上面で検出した。柱穴の平面形は円形で、長軸28cm、短軸25cm、深さ13cmを測る。覆土は灰褐色土である。遺物は出土しなかった。
- SP6:調査区中央に位置し、第V層上面で検出した。柱穴の平面形は楕円形で、規模は長軸30cm、短軸26cm、深さ36cmを測る。覆土は茶褐色土である。遺物は出土しなかった。
- SP7:調査区中央南側に位置し、第V層上面で検出した。柱穴の平面形は円形で、長軸37cm、短軸33cm、深さ16cmを測る。覆土は主に茶褐色土である。遺物は出土しなかった。
- SP8:調査区東側に位置し、第V層上面で検出した。柱穴の平面形は円形で、長軸18cm、短軸16cm、深さ9cmを測る。覆土は茶褐色土である。遺物は出土しなかった。
- SP9:調査区南側に位置し、第V層上面で検出した。柱穴の平面形は円形で、長軸35cm、短軸31cm、深さ22cmを測る。覆土は暗灰色土である。遺物は出土しなかった。
- S P10:調査区南東に位置し、第 V 層上面で検出した。柱穴の平面形は楕円形で、長軸33 cm、短軸26 cm、深さ18 cmを測る。覆土は暗灰色土である。遺物は出土しなかった。
- SPII:調査区西南に位置し、一部調査区以外にかかり、第VI層上面で検出した。柱穴の平面形は楕円形で、長軸39cm、短軸26cm、深さ35cmを測る。覆土は暗灰色土である。遺物は出土しなかった。



第36図 SP測量図

今回検出した柱穴は、周辺地の調査を参考にすると形態・規模・埋土より、暗灰色土を埋土にもつSP1~2・9~11は弥生時代~古墳時代、茶褐色土を埋土にもつSP6~8は中世の可能性がある柱穴である。暗灰褐色土を埋土にもつSP3と暗褐色土を埋土にもつSP4・5は時代を判断できないものである。

# 4. 小 結

今回の調査では、弥生時代の遺構と遺物を確認することができた。

弥生時代の遺構では、前期末のSD1が注目される。

本調査地に隣接する来住 V 遺跡では、既に弥生時代前期末の環濠が 2 条検出されている。 本調査 S D 1 出土品は、来住 V 遺跡第 1 ・ 2 号環濠出土品と同形態を示しており、第 1 ない し 2 号環濠の西側部分にあたるものと思われる。

また、本調査検出の土壙SK1・2は、出土遺物に恵まれなく時期特定は難しいが、その配置や形態より、環濠をもつ集落の内部にある施設(例えば貯蔵穴)になる可能性を考えている。

#### (註)

小笠原好彦・森 光晴 1979『来住廃寺』松山市教育委員会

西尾 幸則・池田 学 1989「来住廃寺跡寺域調査」 『松出市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』

松山市教委員会

" 1991「久米官衙跡群」『松山市埋蔵文化財調杳年報Ⅲ』

松山市教育委員会、松山市立埋蔵文化財センター

#### 遺構・遺物一覧--凡例--

- (1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。 遺構一覧は水本が、遺物観察表は梅木、水口が作成した。
- (2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( ):復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) □→□縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部~底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

- 例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( ) 中の数値は 混和剤粒子の大きさを示す。
- 例)砂・長( $1 \sim 4$ )  $3 \rightarrow \lceil 1 \sim 4 \text{ mm}$ 大の砂粒・長石を多く含む」 である。焼成欄の略記について。 $\Theta \rightarrow$ 良好、 $O \rightarrow$ 良、 $\Delta \rightarrow$ 不良。

## 表10 溝一覧

(SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	時 期	備考
1	P ~ T —87	逆台形	$11.2 \times 3.6 \times 0.70$	黒色粘質土	弥生	弥生前期末	

## 表11 土壙一覧

土壙 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	時 期	備考
1	Q —85	隅丸方形	逆台形	l 1 92 × 1 45 × 0 25	上 灰褐色粘質土 下 黒色粘質土	弥生	不明	
2	R ~ S −84	円形	逆台形	1.21×1.19×0.34	暗灰褐色粘質土		不明	

## 表12 柱穴一覧

柱穴 (S P)	地区	平面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	備考
1	R —87	楕円形	0.42×0.36×0.30	暗灰色土		S D 1 を切る。
2	P —86	円形	0.22×0.22×0.42	暗灰色土		
3	Q —86	楕円形	0.33×0.26×0.29	暗灰褐色土		
4	Q —86 Q —87	円形	0.51×0.45×0.30	灰褐色土		SD1を切る。
5	R —86	円形	$0.28 \times 0.25 \times 0.13$	灰褐色土		
6	R —85	楕円形	$0.30 \times 0.26 \times 0.36$	茶褐色土		
7	S —85	円形	$0.37 \times 0.33 \times 0.16$	茶褐色土		
8	S84	円形	0.18×0.16×0.09	茶褐色土		
9	S —84	円形	0.35×0.31×0.22	暗灰色土		
10	S84	楕円形	0.33×0.26×0.18	暗灰色土		
11	R —88	楕円形	0.39×0.26×0.35	暗灰色土		

表13 SDI出土遺物観察表 土製品

(1)

表13									(1				
番号	器種	法量(cm)	形態・施文			調	整		(外面) 色調		±	備考	図版
					外	面	内	面	(内面)	焼	成		
1	甕	口径(28.1) 残高 12.3	ヘラ沈線文10条+刺突 1 列。口縁端に刻目。	要文	ハケ→ミガキ	(タテ)	<ul><li>□ ミカ</li><li>胴 ミカ</li></ul>	"キ(ヨコ) "キ(タテ)	淡茶色 黄茶色	石·長(1 ◎	~3)	黒斑	21
2	甕	口径(20.6) 残高 6.6	へラ沈線文7条+刺突 口縁端に刻目。	₹文。	ハケ(マメツ)		マメツ		暗茶色 黄茶色	石・長(1	~3)		
3	甕	口径(18.7) 残高 6.5	ヘラ沈線文 6 条+刺突	≹文。	マメツ		マメツ		黄褐色 黄褐色	石·長(1	~4)		
4	甕	口径(19.8) 残高 8.4	ヘラ沈線文 7 条+刺突	文。	マメツ		マメツ		灰褐色	石·長(1	~2)	煤付茗	
5	甕	口径(21.0) 残高 10.5	ヘラ沈線文7条+刺突	文。	マメツ		(I) \(\frac{1}{2}\)	`キ(ヨコ)	暗灰茶色 黄褐色	石•長(1	~3)	煤付茗	
6	甕	口径(19.8) 残高 7.0	ヘラ沈線文9条+刺突	文。	マメツ		ミガキ(ヨ	コ・マメツ)	黄褐色 黄橙褐色	石•長⑴	~2)		
7	甕	口径(23.3) 残高 8.4	頸部が締る。		ロ ナデ 胴 ナデ(マ	メツ)	マメツ		暗灰褐色 黄褐色	石·長(1-	~5)		21
8	甕	口径(23.5) 残高 2.8	ヘラ沈線文 4 条以上。 口縁端に刻目。		マメツ		マメツ		黄褐色 黄茶色	石·長(I·	~3)		
9	甕	口径(24.2) 残高 6.2	端部欠損。ヘラ沈線文8 刺突文。	条+	マメツ		マメツ		黄褐色 黄褐色	石·長(1-	~6)		
10	甕	口径(23.8) 残高 12.6	ヘラ沈線文8条+刺突	文。	マメツ		胴上	ミガキ(ヨコ) ナデ	黄褐色 黄茶色	石•長(1-	~3)		
11	甕	口径(22.6) 残高 5.1	最上位にヘラ沈線文1 14条の沈線文(2条1編 山形文(2条1組)		ナデ		ナデ(マメ	ツ)	灰褐色黄褐色	石•長(1-	~3)		21
12	甕	残高 2.8	多条沈線の痕跡あり。		マメツ		マメツ		黒褐色 乳黄色	石•長(1-	~4)		
13	蓌	底径(6.5) 残高 2.9	平底。		マメツ		マメツ		黄茶色 黄灰色	石·長(1- 安山岩			
14	甕	底径(6.6) 残高 3.8	平底。		マメツ		マメツ		茶褐色 黄茶色	石•長(1~	~5)		
15	甕	底径 7.9 残高 4.7	平底。		マメツ		マメツ		乳黄褐色 乳黄褐色	石•長(1~	~4)		
16	甕	底径(7.0) 残高 3.9	平底。		マメツ		マメツ		茶褐色 茶褐色	石•長(1~ ◎	-4)		
17	甕	底径 7.6 残高 10.2	平底。わずかに立ち上か	<b>がる</b> 。	ミガキ(タテ)		マメツ		暗褐色 茶褐色	石•長(1~ ◎	-2)		

# SDI出土遺物観察表 土製品

				色調		(外面)	胎土	/# +v	ESSE ME
番号	器種	法量(cm)	形態・施文	外 面	内 面	色調   (内面)	焼 成	備考	図版
18	甕	底径(8.0) 残高 6.0	小さい上げ底。	マメツ	マメツ	乳黄茶色 乳黄色	石·長(1~3) 金 〇		
19	甕	底径(9.9) 残高 5.1	小さい上げ底。わずかに立ち 上る。	マメツ	マメツ	茶褐色 乳黄褐色	石·長(1~3) ◎		
20	甕	底径(7.0) 残高 3.4	小さい上げ底。	ミガキ(タテ)	ミガキ(ヨコ)	黄茶色 茶褐色	石·長(1~3)		
21	甕	底径(6.4) 残高 6.3	小さい上げ底。	マメツ	マメツ	乳茶褐色 乳黄褐色	石•長(1~2)		
22	甕	底径 5.4 残高 5.2	小さい上げ底。	マメツ	マメツ	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1~2)		
23	壺	口径 16.7 残高 33.7	口縁端に刺突文。 頸部にヘラ沈線文2条と刺 突文。	<ul><li>□頸 ハケ→ナデ</li><li>胴 ミガキ(ナナメ)</li></ul>	口頸 ミガキ(ヨコ) 胴上中 ミガキ(ヨコ) 胴下 マメツ	茶褐色 茶褐色	石·長(1~4) ◎	黒斑	21
24	壺	口径(17.4) 残高 7.2	口縁端部は丸みのある面をもつ。	マメツ	<ul><li>口頸 ナデ→ミガキ</li><li>(ヨコ)</li></ul>	淡黄茶色 乳黄茶色	石・長 (1~2)		
25	壺	口径(11.3) 残高 8.5	口縁端部は丸みをもつ。	類 ナデ 胴 マメツ	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1~6)		
26	壺	残高 2.3	口縁端に刻目。内面凸帯。凸 帯上は刻目か?。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長(1~2)		
27	壺	残高 6.3	口縁端に沈線文か?。 内面凸帯。全周せずか?。	マメツ	マメツ	灰茶褐色 黄茶色	石•長(1~3)		
28	壺	残高 8.0	頸部内面に明瞭な稜線。	マメツ	マメツ	茶褐色	石•長(1~4)		
29	壺	残高 5.7	球形の胴部。短頸壺になるか。	ハケ(タテ)	マメツ	乳黄褐色乳黄褐色	密〇		
30	壺	残高 8.4	ヘラ沈線文5条+刺突文。	マメツ	マメツ	黄茶色	石·長(1~4)		
31	壺	残高 7.3	ヘラ沈線文6条+断面三角 形の凸帯。凸帯上はマメツ。	マメツ	マメツ	黒色 灰黄色	石·長(1~4)		
32	壺	残高 4.9	ヘラ沈線文4条以上+刻目 凸帯。	マメツ	ナデ	黒灰色 黒灰色	石·長(1~2) 金 ◎		
33	壺	底径(13.0) 残高 4.8	わずかに凹みをもつ。平底。	ミガキ(マメツ)	マメツ	茶褐色 黄茶色	石・長(1~4)		
34	壺	底径(8.4) 残高 7.4	平底。	マメツ	マメツ	明茶色 乳黄褐色	石·長(1~3) 金 ◎		

(2)

SDI出土遺物観察表 土製品

	J L	, п ш т ж	170既乐红 工农吅						(0
番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調	整	(外面) 色調	胎土	備考	図版
	## 1	,,	7,7,0, 4,0,7,1	外 面	内 面	(内面)	焼 成	J	
35	鉢	口径(33.4) 残高 5.5	器壁が厚い。内面に弱い稜を もつ。	<ul><li>ロ ナデ</li><li>胴 マメツ</li></ul>	マメツ	黄褐色 黄褐色	石•長(1~4)		
36	蓋	残高 8.2	内面に極弱い稜をもつ。	ハケ(タテ)	マメツ	灰茶褐色	石·長(1~5) ◎		
37	蓋	口径(15.8) 残高 4.5	器壁が厚い。	マメツ	マメツ	黄橙色 黄橙色	石·長(1~5) ◎		
38	飯	底径 6.1 残高 6.7	壺の底部転用。	マメツ	マメツ	茶褐色黄茶色	石·長(1~5) ◎		21
39	甕	残高 5.6	ヘラ沈線文7条以上+刺突 文+竹管文。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石·長(1~5) ◎		21
40	甕	残高 4.2	2条1組の線。施文か文様か は不明。	ミガキ(マメツ)	ミガキ	茶色茶褐色	石·長(1~3) 金 ◎		
41	台付鉢	底径(6.1) 残高 2.2	無頸ないし短頸壺の底部。	マメツ	マメツ	明茶色 明茶色	石·長(1~2) 金 ⊚		21
42	土製品	直径 5.0	転用品。	マメツ	マメツ	淡黄茶色 淡黄茶色	石·長(1~2) ◎		21

表14	SD	)   関連出	土遺物観察表 土婁	№								(1)
番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調	]	整		(外面) 色調	胎	±	備考	図版
田つ	和的主	Δ重(ιιι)	772点 加及	外	面	内	面	(内面)	焼	成	UR "D	DINX.
43	甕	口径(20.3) 残高 9.7	ヘラ沈線文 5 条+刺突文。	<ul><li>ロ マメツ</li><li>胴 ハケ(ナナ)</li></ul>	-メ)	マメツ		茶褐色黄茶色	石·長( ◎	1~4)	P87	
44	甕	口径(22.0) 残高 2.5	ヘラ沈線文 4 条以上。	ハケ→施文		ハケ→ミガ	キか?	暗褐色黄褐色	石·長( ◎	1~4)	Q87	
45	甕	口径(13.0) 残高 1.7	ヘラ沈線文1条以上。	マメツ		マメツ	·	乳黄橙色 乳黄橙色	石・出	長(1)	R 87	
46	甕	残高 2.2	ヘラ沈線文2条以上。	マメツ		マメツ		暗茶色 暗茶色	石・± ◎	長(1)	Q87	
47	甕	口径(19.6) 残高 5.5	ヘラ沈線文4条+刺突文+ ヘラ4条+4条+刺突文以 上	不明		口端 三胴 マメッ	コナデ	黄褐色 茶褐色	石·長( ◎	1~2)	Q87	
48	甕	口径(16.6) 残高 4.8	ヘラ沈線文3条。	マメツ		<ul><li>回 ヨコナ</li><li>胴 ナデ</li></ul>	· デ	乳黄色 赤褐色	石·長( 〇	1~3)	Q87	

**—** 65 **—** 

(3)

# SDI関連出土遺物観察表 土製品

			工造物配条式 工名	·					(=/
番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調	整	(外面) - 色調	胎土	備考	図版
HF 7	1001王	/A里(CIII)	now nex	外 面	内 面	(内面)	焼 成	C. tud	11/1/
49	壺	口径(16.0) 残高 1.1	口縁端にヘラ沈線文1条+ 刻目。	ハケ(ヨコ)	ミガキ	淡黄茶色 淡黄茶色	石•長(1~3)	Q87	
50	極	口径(16.2) 残高 2.8	小さく垂下。	ナデ	ナデ	淡茶色 淡茶色	石•長(1~4)	R 87	
51	壺	残高 4.6	ヘラ描斜格子目文+ヘラ沈 線文1条。	マメツ	剝離	灰茶色 茶褐色	石·長(2~5) ◎	P 87	21
52	甕	残高 2.6	ヘラ沈線文2条以上。	ナデ	マメツ	暗茶色 淡茶色	石•長(1~3)	東トレンチ	
53	甕	口径(20.0) 残高 3.1	ヘラ沈線文5条。	不明	口端 ヨコナデ 胴 ミガキ(ヨコ)	淡黄色淡茶色	石・長(1~3)	北トレンチ	
54	甕	残高 2.6	ヘラ沈線文2条。	ハケ→施文	口端 ヨコナデ 胴 ナデ	淡黄茶色 淡黄茶色	石·長(1~3)	北トレンチ	
55	壺	残高 4.8	削り出しによる段か。 段上に刺突文。	ハケ→マメツ	マメツ	茶褐色 灰黄色	石·長(1~5) 金 ◎	南トレンチ	21
56	ミニチュア	底径 3.4 残高 1.3	くびれる底部。	ナデ	マメツ	乳黄橙色 乳灰色	石·長(1~2) 金 ◎	南トレンチ	

# 表15 SDI出土遺物観察表 石製品

番号 器種		744 <del>/</del> =	材質		備考	図版			
番号	<b>吞性</b>	残存	初貝	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	帰ち	17/1/
57	石庖丁	1/2	緑色片岩	9.6	4.4	0.9	39.7		
58	石器素材		緑色片岩	9.9	4.9	0.8	93.5		

# 表16 SKI出土遺物観察表 土製品

	R0 17E	法量(cm)	形態・施文	ī	司	整		(外面) 色調	胎 土	±	備考	図版
番号	器種	太里(cm)		外	面	内	面	(内面)	焼	成	加っ	
59	甕	残高 2.5	2条1組の山形文。	マメツ		マメツ		暗褐色 褐色	石·長 ◎	(1)		
60	壺	残高 4.1	頸部に沈線文1条以上。	ミガキ(ヨコ)		ミガキ(ヨコ)		明黄茶色 明黄茶色	石·長(	1~2)		

**(2**)

第4章

# 久米窪田森元遺跡

一 3 次調査地一

•		
	•	

# 第4章 久米窪田森元遺跡3次調査地

# 1. 調査の経過

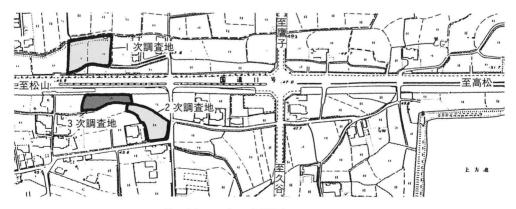
# (1)調査に至る経緯

1991 (平成3) 年5月、出光興産株式会社より、松山市久米窪田町856—1地内における開発にあたって、埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。

確認願いが申請された久米窪田856—1は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『129・鷹ノ子遺物包含地』内にあたる。当地を含む来住・久米地区は、これまでに数多くの発掘調査が実施されており、周知の遺跡地帯として知られている。同包蔵地内では、久米窪田森元1・2遺跡、久米窪田古屋敷遺跡などの調査が行われており、縄文時代から中世にかけての遺構や遺物が多数検出されている。また周辺地では、西方に官衙関連遺構の久米高畑遺跡群〔西尾幸則 1989〕や来住廃寺跡〔小笠原好彦 1989〕、南方に白鳳寺院址の中ノ子廃寺、千軒廃寺、東方に平谷古墳群、駄場姥ヶ懐窯址群などがある。

これらのことから、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、1991(平成3)年7月に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果土師器と須恵器を含む包含層と柱穴5基、土壙1基、溝2条と土師器・須恵器・植物遺体を遺存する落ち込み部を検出し、当該地に中世の集落関連遺構があることを確認した。

この結果を受け、文化教育課の指導のもと(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターと出光興産株式会社の二者は発掘調査について協議を行い、出光興産株式会社の協力のもと1992年11月1日より発掘調査を開始した。



第37図 調査区位置図 (S=1:5,000)

# (2)調査組織

調 查 地 松山市久米窪田町856-1

遺跡 名 久米窪田森元遺跡 3 次調査地

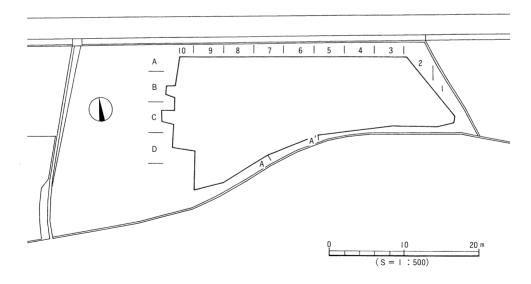
**調査期間** 野外調査 平成 4 (1992) 年11月1日~平成 5 (1993) 年 2月26日 室内調査 平成 5 (1993) 年 2月27日~同年 7月31日

調査面積 902 m²

調查委託 出光興産 株式会社松山出張所

調査作業員 市川 泰弘、岡崎 政信、藤井 和也、池内カヨコ、猪森しげ子、 大西アイ子、大西 元子、白井あさ子、田中 麗子、種子田千津子、 富岡キシオ、中屋 経子、西尾 和代、沼田 文子、平松 正乃、 福本 清香、三好ハナ子

(註) 本報告では、1.調査の経過、2.層位、3.遺構、4.まとめは山本、3.遺物(木簡)は西尾、3.遺物(大器)は宮内、3.遺物(木製品・種実)は岡根が各々担当した。



第38図 区割図

# 2 層 位 (第39図)

本調査地では、第 I 層から第 IX 層までの土層を確認した。調査は、期間や廃土処理場等の 条件により、第 V 層上面までの調査を行い、第 V 層から第 IX 層まではトレンチ掘りにより調 査を行った。以下、本調査地の基本層位を記述する。

第1層:灰色土で、15~20cmの堆積を測り、現在の耕作土となる。

第II層: 灰褐色土で、5~15cmの堆積である。鉄分包含の有無により分層できる。第II-① 層は灰褐色土(鉄分含まず)で、第II-②層は灰褐色土に鉄分が混入したものである。

第Ⅲ層: 茶褐色土で、5~20cmの堆積である。須恵器、土師器、緑釉陶器など古代から中世の遺物を包含する。

第Ⅳ層:黒色微粘性土で、22~50cmの堆積である。弥生時代後期の遺物を少量包含する。

第 V 層: 灰色粘土~暗灰色微粘性土(灰色砂混り)で 5 ~20 cmの堆積である。堆積層は 3 層に分層される。第 V —①層は灰色粘土、第 V —②層は灰色砂、第 V —③層は暗灰色微粘性土(灰色砂混り)で、第 V —②・③層は第 V —①層中に部分的にみられるものである。遺物は検出されなかった。

第Ⅵ層:暗灰色粘土で、4~15cmの堆積である。植物遺体を含む。

第Ⅲ層: 黒灰色微粘性土~黒褐色微粘性土で、10~35cmの堆積である。第Ⅲ—①層黒灰色微粘性土、第Ⅲ—②層明灰色微粘性土、第Ⅲ—③層黒褐色微粘性土の3層に分層される。上層の第Ⅵ層及び下層の第Ⅲ層よりも植物遺体を多く含む。

第四層:明緑灰色粘性土で20~28cmの堆積である。植物遺体を含む。

第IX層:明緑灰色砂礫で、地山層である。調査地西半部では第III層の下部が第IX層になる(第
IV ~ VIII層が欠除する)。

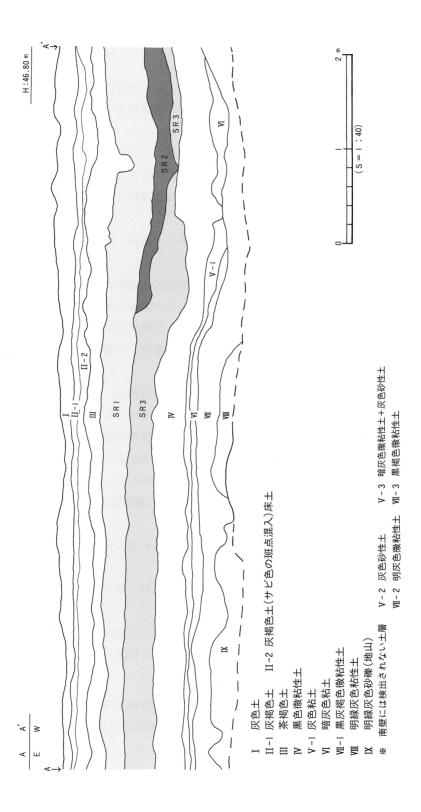
第 V 層上面の地形は、調査区南中央部で中洲状の高まりが見られ、さらにトレンチ調査ではあるが、第 IX 層上面でも同様な地形が確認されている。

各層位は遺物より、第Ⅲ層は中世、第Ⅳ層は弥生時代後期、第V層から第Ⅲ層までは弥生時代後期以前に堆積したものと考えられる。

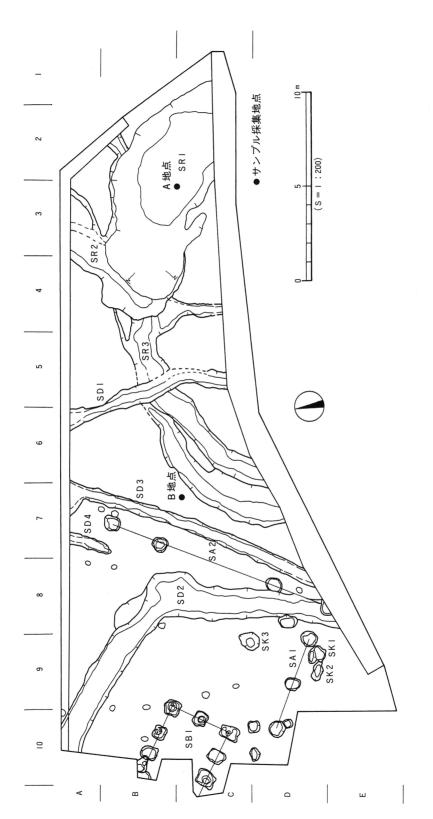
遺構は、IV層上面での検出であり、調査地西半部より掘立柱建物1棟、柵列2条、溝3条柱穴17基、土壙3基を、東半部より溝1条、自然流路3条を検出した。

# 3. 遺構と遺物

本調査における遺構は全て第Ⅳ層上面で検出した。検出遺構は掘立柱建物 1 棟、栅列 2 条、溝 4 条、柱穴17基、土壙 3 基、自然流路 3 条である。古墳時代の遺構は溝 1 条 (SD 2)、奈良時代の遺構は流路 2 条 (SR 1 · 2) である。



第39図 基本層位図



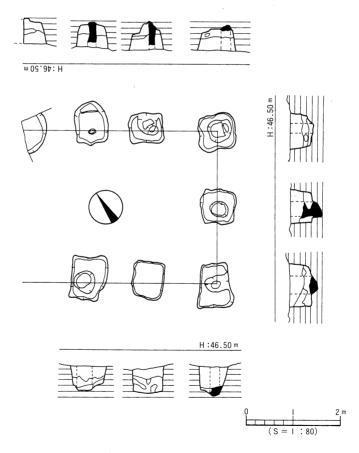
第40図 遺構配置図

# (1) 掘立柱建物跡 (第40·41図、図版26)

#### SBI

調査区西端部 B10~C10区に位置する。西部は未調査であり、建物規模は 2×3 間以上で、梁行長3.2m、桁行長4.1mを測る。築造方位は東西棟であるが、30°南へ偏している。平均柱間は、東西1.4m、南北1.7mである。各柱穴は方形または長方形を呈し、長辺60~90cm、短辺60~70cm、深さ60~70cmを測る。柱痕径は確認されたもので10~24cm、深さは50cmを測る。柱穴埋土は、上層は暗茶褐色土に黄色土が少量混るもので、下層は黒色土中に白色粘土のブロックが混るものである。また柱痕埋土は、暗茶褐色土に黄色土と白色土が少量混るものである。遺物は柱穴内上層より須恵器片が1点出土した。

時期は、出土遺物が少量のため明確にできなかった。



第41図 SBI測量図

#### (2) 栅列

#### SAI (第40・42図)

調査区西部D9区に位置する。2間分を確認したが、西部及び東部は未調査地につづくものと思われる。検出長は5mを測る。築造方位は東西方向ではあるが、90°南に偏しておりSB1と同一軸方向をとる。柱間は西側で2.4m、東側で2.6mである。各柱穴の平面形態は円形もしくは楕円形を呈し、径65~80cm、深さ30~40cmを測る。柱穴埋土は上層は暗茶褐色土、下層は黒褐色土に白色粘土と黄白色粘土が混るものである。柱穴内から弥生土器もしくは土師器の小片が少量出土し、東端の柱穴からは柱材と思われる木片が基底面より出土している。

# S A 2 (第40·42図)

調査区中央西寄りのB7~D8区に位置し、SD2とSR1を切る。中央部の柱穴は確認されなかったが、南北方向で全長12.2mの4間分を確認した。柱間は北で2.7m、南で3.0mを測る。各柱穴は楕円形を呈し、規模は長辺70~90cm、短辺50~70cm、深さ30~45cmを測る。柱穴埋土は、黒色粘性土、乳白色粘性土、淡青白色粘性土が入り混ったものである。柱穴内からは須恵器の小破片と木片が少量出土した。

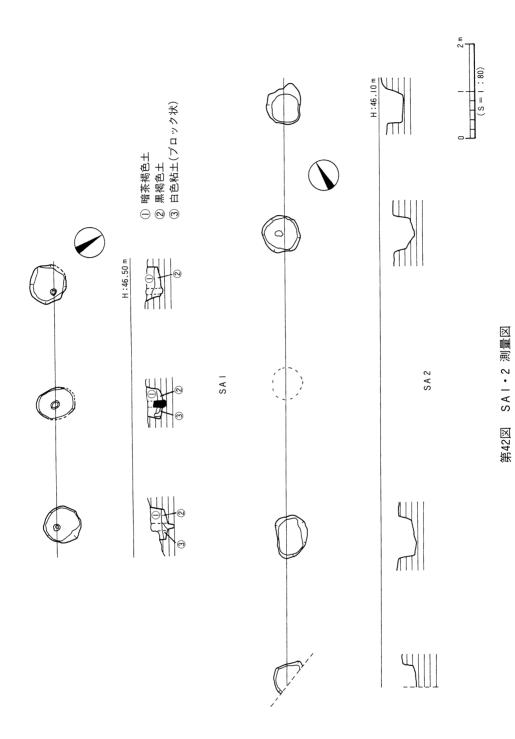
#### (3) 溝

#### SDI (第40·43図、図版27)

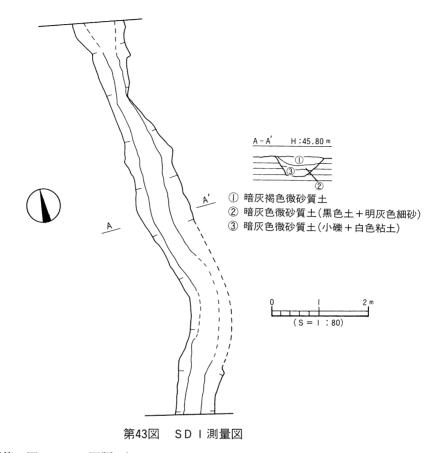
調査区中央部B・C5~A・B6区に位置し、SR1に切られ、SR3を切る南北方位の溝である。全長8.2m、幅0.4~1.0m、深さ40cmを測る。断面形は船底状を呈する。埋土は、3層に分層される。上層は暗灰褐色微砂土、中層は上層土に黒色土と明灰色細砂が混入するもの、下層は上層土に小礫と白色粘土が混入するものである。遺物は上・中層より土師器片と須恵器片が、下層より種子と木器が出土した(下層からの土器の出土はない)。また溝南部の下層下面よりバラの茎と葉が出土した。

# SD2 (第40·44図、図版28)

調査区西部のA10~B・C・D・E 9 区に位置し、SA 2 に切られる。北西隅から南東方向へ、溝の中央部でほぼ南へ向きをとる。検出長17.6m、幅1.2~2.4m、深さ30cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は上層の暗茶褐色土と、下層の黒褐色土の 2 層からなる。遺物は、上層では4ヶ所から土師器(甕)が集中して出土し、下層では基底面より弥生土器もしくは土師器の小片が出土した。



— 76 —



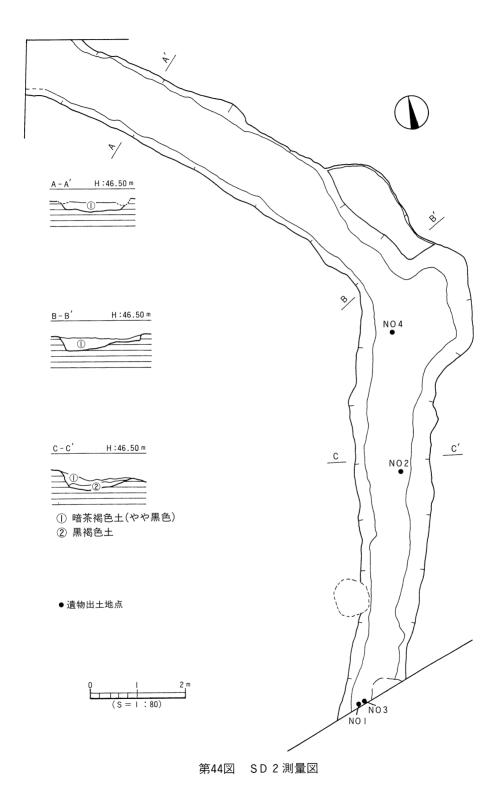
出土遺物 (第45図1~4、図版36)

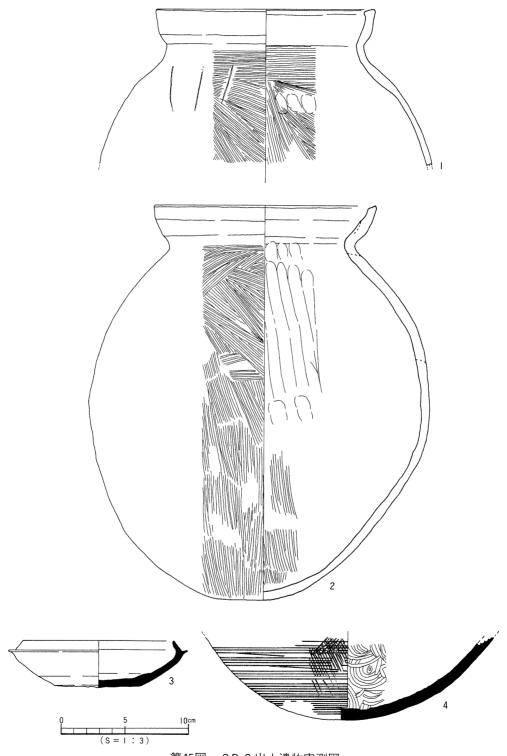
1~4はいずれもSD2埋土上層から出土したものである。

〔土師器〕1・2は甕形土器である。両者とも口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する。1は端部は内側に肥厚している。調整は口縁部はヨコナデ調整、体部は刷毛目調整を施す。肩部外面に長さ3cm程度の沈線が認められる(記号か?)。2は体部は楕円形を呈し、底部はわずかに平底である。調整は内外面共に口縁部はヨコナデ調整、体底部は刷毛目調整を施す。体部上半部内面には指頭痕が顕著に残る。

〔須恵器〕3は坏身、4は甕の底部片である。3は低く内傾するたちあがりをもち、端部は 尖り気味に丸く仕上げる。底部は平底風でヘラ切り痕がわずかに残る。4は外面に回転カキ 目調整後平行叩き、内面は円弧叩きを施す。

時期:出土遺物等からSD2は古墳時代後期、6世紀後半のものと判断される。





第45図 SD2出土遺物実測図

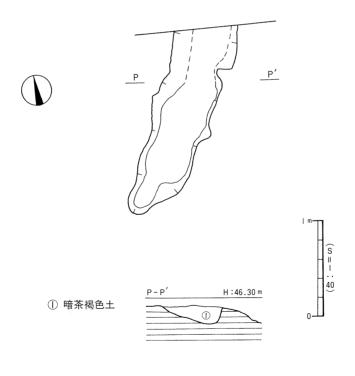
#### SD3 (第40·47図、図版29)

調査区中央部西寄りA・B・C 7~D 8 区に位置し、S R 1 を切る。S A 2 とほぼ並行に主軸をとる南北方位の溝である。検出長13.1m、幅0.6m、深さ36cmを測る。断面形は船底状を呈する。埋土は溝の北部・南部と中央部では違いが見られ、北部・南部は黒色土・白色粘土・乳白色粘土の攪拌土、中央部は第 IV 層中までの掘り込みの為、黒色微粘性土に暗茶褐色土粒(1~2 cm)が混る土壌となる。遺物は須恵器小片の他、木片と種子が少量出土した。

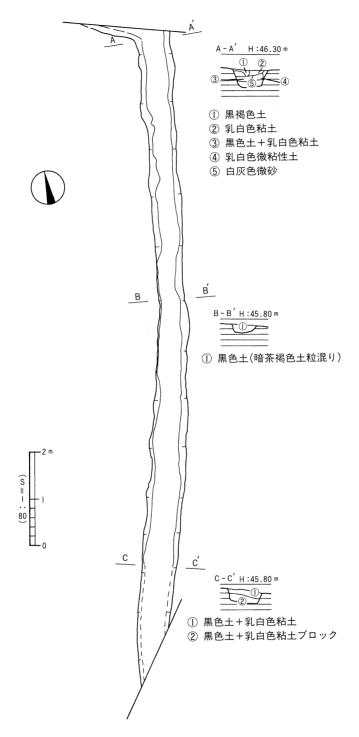
時期: SD3出土遺物は少なく年代の特定は難しいが、6世紀代のものと考えておきたい。

#### S D 4 (第40·46図)

調査区中央西寄り、A7区に位置する。検出長2m、幅0.65m、深さ19cmを測り南北方位の溝である。断面形はレンズ状を呈する。埋土は暗茶褐色土の単一土壌である。遺物は土師器と須恵器の小片が少量と石器が1点出土した。



第46図 SD4測量図



第47図 SD3測量図

# (4) 自然流路

れる。

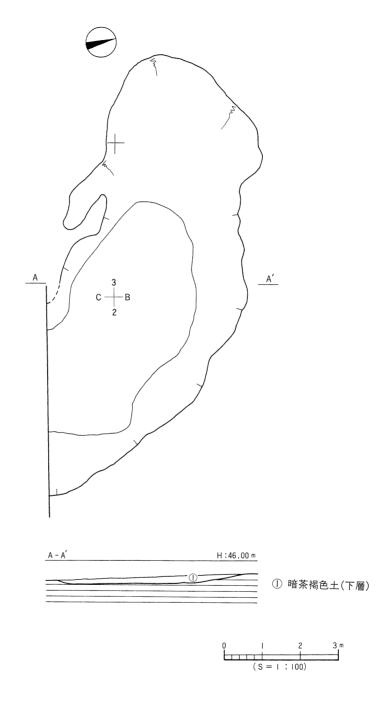
SRI (第48·49図、図版30·31)

調査区東部B1~4区とC1~3区に位置し、SR2・3を切る。調査の進行上、重機による表土掘削作業の際に上層を除去した為、下層の一部分を調査するにとどまった。検出長12m、幅5m、深さ20cmを測り、調査地東部南(C2区)へと徐々に深さを増す。南北の断面形は皿状を呈する。埋土は、上層の茶褐色土(黒味をおびる)と、下層の暗茶褐色土(やわらかめ)の2層に分層される。遺物は下層からの出土で、須恵器、木器、木片、種子が出土した。出土した木片には加工痕のあるものや、焼焦げているものがみられ、また種子では、サクラ属サクラ節核は堆積が厚い南部(C2区)に集中して出土した。

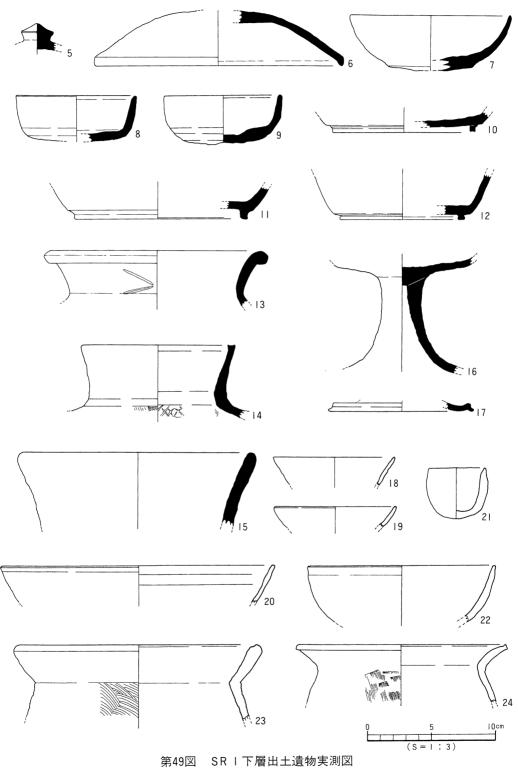
出土遺物 (第49図 5~24、図版36)

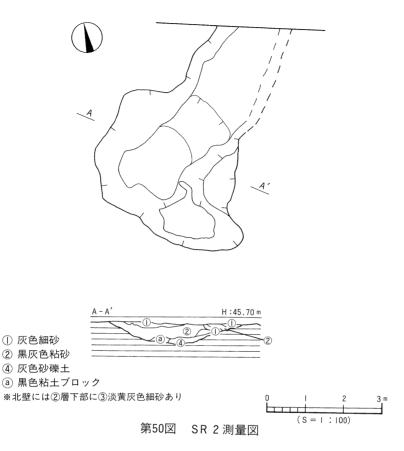
〔須恵器〕5 は宝珠様つまみ、6 は器高の高い坏蓋である。坏蓋は天井部は丸みをもち、なだらかに口縁部へ下がり、口縁部は下方へ屈曲する。口縁端部は丸く仕上げられている。7~9 は無台坏、10~12は高台の付く有台坏である。7 は椀形態をなす坏で、体部と底部との境界付近で段をなす。8・9 は推定口径9.0~9.4cmの小型の坏で、口縁部はやや内湾する。底部は平底風で回転へラ切り痕が残る。有台坏は口縁部がすべて欠損しており底部のみである。高台は底部と体部の境界付近につくもの(10・11)と境界よりやや内側につくもの(12)とがある。底部の調整はすべて回転ナデ調整のみを施している。13~15は壺の口縁部片である。13は推定口径17.5cmを測り、口縁部は珠玉状におさめられている。頸部外面に「く」の字状の沈線が認められる(記号か)。14はやや軟質のもので口縁端部は平坦面をなす。頸部外面に格子叩き、内面は円弧叩きが看取される。15は器壁の比較的厚いもので口縁端部は丸く仕上げる。16・17は高坏である。16の柱部は円筒状で、裾部は「ハ」の字状に外反してのびる。17は脚端部片で、下外方に外反気味に屈曲する。

〔土師器〕18~20は坏の口縁部片である。18の口縁部は斜め上方に直線的に立ちあがり、口縁端部は丸くおさめている。19はやや内湾気味の口縁部で、口縁端部は尖り気味に丸い。両者とも内外面共にヨコナデ調整を施す。20はやや内湾気味に立ちあがり、口縁端部付近でわずかに外反する。口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。21はミニチュア土器である。口径 6 cm、器高5.4cmを測り、体部下半の外面には黒斑が認められる。22は椀形態をなす坏である。内湾する口縁部をもち、口縁端部付近でわずかに凹む。内外面の調整は磨滅のため不明。23・24は甕形土器である。23の口縁部は中位でやや内湾し、口縁端部内面はわずかに凹む。胴部外面は粗い刷毛目調整、内面はナデ調整を施す。24はやや外反する口縁部をもち口縁端部は「コ」字状に仕上げている。頸部内面はわずかに稜をなす。胴部外面は刷毛目調整を施す。時期:SR1出土遺物には多少の年代差が認められるが、総じて8世紀代のものと判断さ



第48図 SRI測量図

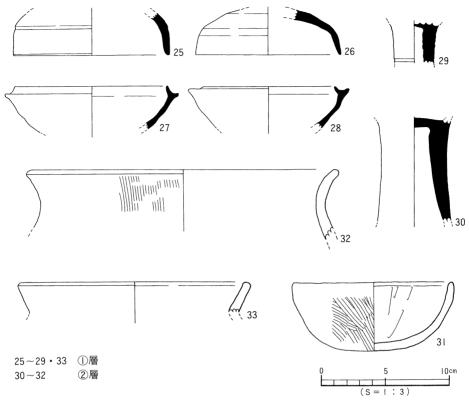




SR2 (第50・51図、図版32・33・36)

調査区東部A4~B4区に位置し、SR1に切られ、SR3を切る。検出長6m、幅3.6m、深さは最深部で60㎝を測る。断面形は皿状を呈する。埋土は北壁断面での観察では、①層灰色細砂、②層黒灰色粘砂、③層淡黄灰色細砂、④層灰色砂礫土の4層に分層され、流路南部(B4区)においては①層、②層、④層の堆積であり、北部と南部ではやや異なる堆積(南部では③層欠除)がみられる。遺物は、①層では須恵器、木器、木片、種子が、②層では土師器、須恵器、木片、種子、植物遺体が出土した。なお、②層の種子と植物遺体は、流路南部(B4区)において東西2m、南北1.5mの範囲で②層上位より集中して出土した。また木片は、②層下位よりの出土が目立った。③層では、木片と須恵器片が少量、④層中より須恵器片と木片が少量出土した。

出土遺物 (第51図25~33、図版36) 25~29・33は①層、30~32は②層の出土品である。 〔須恵器〕25・26は坏蓋、27・28は坏身である。25の天井部と口縁部の境界は沈線状の凹みによって表されている。口縁部はやや外反して下がり端部は尖り気味に丸く仕上げる。26は天井部と口縁部境の稜は消失する。27はたちあがりは短く内傾し、端部は丸く仕上げる。



第51図 SR 2 出土遺物実測図

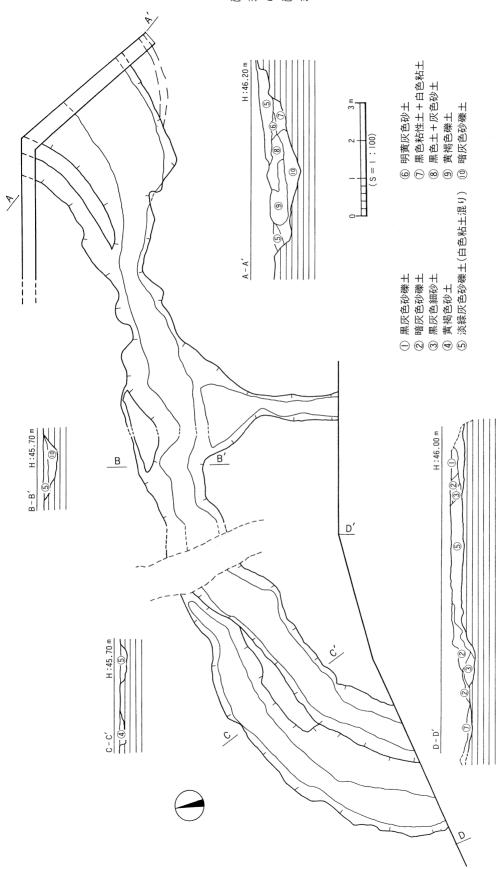
28は27に較べてよりたちあがりの内傾度は強く、受部は上外方に長くのびる。29・30は高坏の脚部片である。円筒状の柱部をもつ。29の柱部中位には1条の沈線が認められる。

〔土師器〕31は完形の椀形土器である。体部は丸みをもち口縁部は内湾してたちあがり、口縁端部は丸く仕上げる。体部外面は斜め方向の粗い刷毛目調整、内面は工具による削り痕が看取される。32・33は甕形土器の口縁部片である。32は口縁部が外反気味に直立するもので、口縁端部は丸く仕上げる。口縁部外面は粗い刷毛目調整を施す。33は口縁端部内面はやや肥厚し、口縁端部はわずかながら平坦面をなす。内外面共にヨコナデ調整を施す。

時期:出土遺物や切り合い関係から7世紀中~8世紀代のものと考えておきたい。

#### SR3 (第52·53図、図版34·36)

調査区北東隅から中央西寄りの南部にかけての検出で、SR1・2に切られる。検出長21m、幅1.5~2.7m、深さは最深部で約50cmを測る。断面形は、西部では皿状を呈する。埋土は東壁土層及び南壁土層の観察より、10層(第52図)に分層される。流路中央(B4区)から東部では⑤~⑩層の堆積がみられ、西部では②~⑤層及び⑦層が堆積し⑧~⑩層はみられ



第52図 SR 3 測量図

なかった。また④層はB6~C7区の範囲内だけの堆積である。溝基底部は埋土と同調し中央(B5区)より西部では一段高くなる。遺物は、⑤層中より土師器、須恵器、種子が少量、⑦層中より弥生土器と土師器が少量出土し、他の土層からの遺物の出土はなかった。

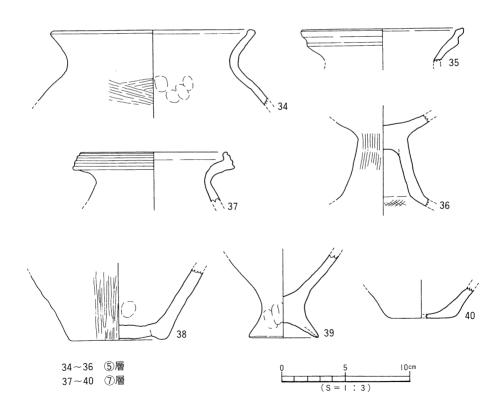
出土遺物 (第53図34~40)

34~36は(5)層、37~40は(7)層から出土したものである。

〔土師器〕34・35は甕形土器の口縁部片である。34は口縁端部内面はやや肥厚し、端部は丸く仕上げる。口縁部は内外面共にヨコナデ調整、頸部外面は刷毛目調整、内面はナデ調整を施す。35は口縁端部を面取りし内傾させる。36は高坏の脚部片。柱部は三角錐状を呈し、裾部はゆるやかに外側に開いている。柱裾部境内面はわずかに稜をなす。

〔弥生土器〕37は凹線文壺形土器。口縁部は上方に拡張し、端部に3条の凹線文を施す。38~40は甕形土器の底部片である。38はやや上げ底を呈し底部外面に縦方向のヘラミガキ調整を施す。39は上げ底を呈し底端部は尖り気味におさめる。底部外面に黒斑が認められる。40は平底の底部。体部はゆるやかに斜め上方にたちあがる。

時期:出土遺物やSR2が先行することから6世紀~7世紀中頃と考えられる。



第53図 SR 3 出土遺物実測図

# (5) 土壙

#### S K I (第54図)

調査地南部南端のD9区に位置し、SK2を切る。平面形は不整形を呈する。長辺85cm、短辺85cm、深さ34cmを測る。断面は南北軸で2段となる。埋土は上層の暗褐色土と下層の黒褐色土(白色粘土がブロック状に混入)に分層される。遺物は下層からの出土はなく、上層の上面より須恵器が出土した。

#### SK2 (第54図)

調査地西部南端のD9区に位置し、SK1に切られる。平面形は不整楕円形を呈する。長辺1m、短辺0.5m、深さ34cmを測る。断面形は南北軸で船底状を呈する。埋土は上層の暗褐色土、中層の黒褐色土、下層の白色粘土の攪拌土の3層に分層される。遺物は上・中層より弥生土器もしくは、土師器の小片が少量出土したのみで、下層からの遺物の出土はない。

### SK3 (第54図、図版34)

調査区西部中央寄りのC9区に位置し、切り合い関係はない。平面形は楕円形を呈する。 長辺1.1m、短辺0.84m、深さ54cmを測る。断面形は南北軸で「U」字状を呈する。埋土は上層の暗茶褐色土、中層の黒褐色粘性土、下層の黒色粘性土の3層に分層される。遺物は上層中より弥生土器もしくは土師器の小片が少量、また礫石が上層及び下層下面(基底面)より1点ずつ出土した。

#### (6) 柱穴

本調査において確認された柱穴は17基である。いずれも第Ⅳ層上面で、調査地西部からの 検出である。柱穴確認面での埋土はいずれも埋土上層が暗茶褐色土のものである。ここでは 平面形態により四つのグループに分類する。

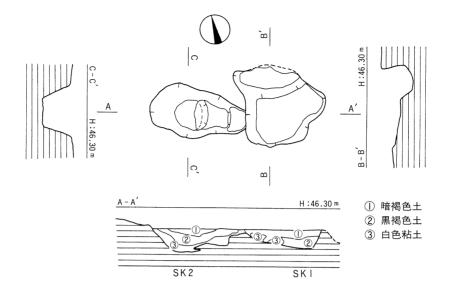
A類: 平面形態が円形もしくは楕円形で規模の小さいもの SP1~6,11~16

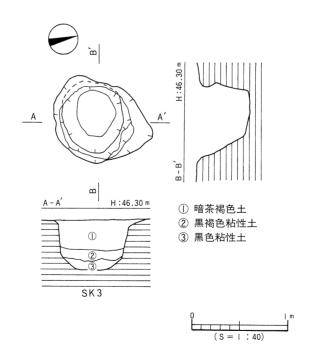
 B類: 平面形態が方形のもの
 SP9, 10

**C類**: 平面形態が不整形のもの SP7, 8

**D類**: 平面形態が楕円形でA類より規模が大きいもの S P 17

なお、B類は、SB1を構成する柱穴より規模は小さいが、平面形態が類似する掘り方である。さらにD類は、SA2を構成する柱穴と、平面形態・規模ともに類似するものである。各グループの柱穴造営には時間差がうかがわれるが、柱穴内からの遺物の出土はわずかであり、明確な時期と時期差は判断しえない。





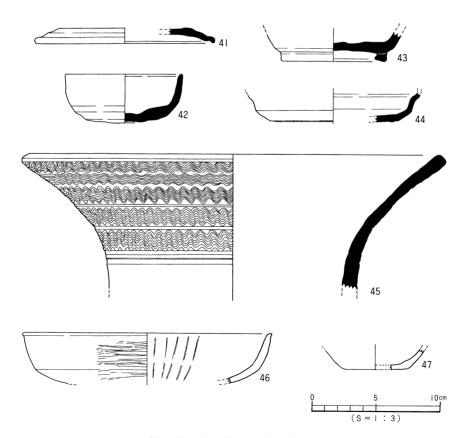
第54図 SK I・2・3 測量図

# (7) その他

#### Ⅰ) 第Ⅲ層出土遺物(第55図41~47、図版37)

〔須恵器〕41は坏蓋片。扁平な天井部から段をなして口縁部に下がり、口縁端部は下方へ屈曲する。天井部外面に回転へラ削り調整を施す。8世紀。42は無台坏。体部は内湾気味に立ち上がり口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。底部に回転へラ切り痕がわずかに残る。7世紀。43は高台の付く坏。高台は比較的太く底部端に付き外端面で接地する。内外面共に回転ナデ調整を施す。8世紀。44は須恵器皿。口縁端部及び底部は欠損している。体部は外傾して立ち上がり口縁部で強く外反する。内外面共に回転ナデ調整を施す。8世紀。45は甕の口縁部片。口縁部は強く外反し口縁端部は「コ」字状に仕上げる。口縁部外面に3条の沈線と数状の波状文を施す。8世紀。

〔土師器〕46・47は土師器坏。46の体部は内湾気味に立ち上がり口縁端部付近でわずかに外反する。体部外面は横方向のヘラミガキ調整を施す。内面に暗文が看取される。47は平底の底部からやや内湾気味に立ち上がる。内外面共にヨコナデ調整を施す。8世紀。



第55図 第Ⅲ層出土遺物実測図

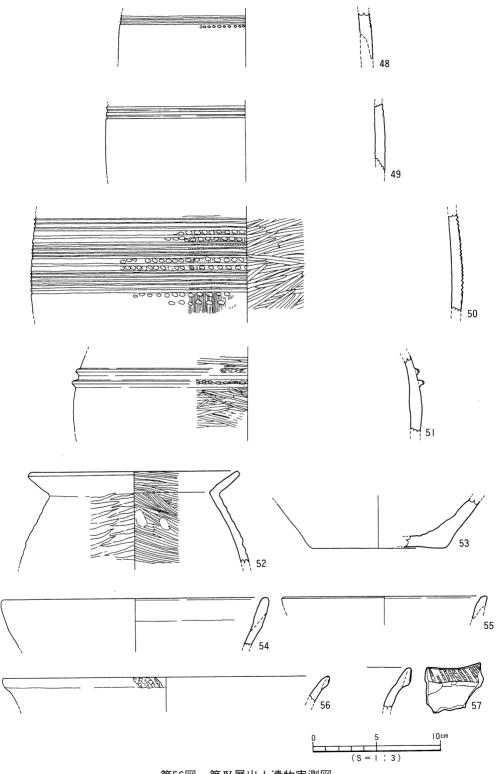
#### 2) 第Ⅳ層出土遺物(第56図48~57、図版37)

【弥生土器】48~50は甕形土器の胴部片。48・49共に外面にヘラ状工具による3条以上の沈線文が施され、48は沈線文下に刺突文を施す。50は櫛状工具による沈線文が施され、沈線文間に刺突文が2段ずつ施されている。51は壺形土器の胴部片。胴部上位に断面三角形の凸帯が2条貼付され凸帯上に刻み目を施す。52は「く」の字状口縁を呈する甕形土器。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。胴部外面に叩き調整、内面は刷毛目調整を施す。53は壺形土器の底部片。わずかに上げ底を呈する。〔縄文土器〕54は口縁部内面が肥厚する粗製土器である。内外面共にナデ調整が施される。55・56は口縁部が「く」の字状に外反し、口縁が肥厚する粗製深鉢形土器である。肥厚部は断面三角形状のもので、肥厚部分に縄文が施される。57は波状口縁を呈する有文深鉢で、肥厚部分に縄文が施される。これらの縄文土器は縄文後期の縁帯文土器の前半段階、津雲A式、彦崎K1式に相当する。

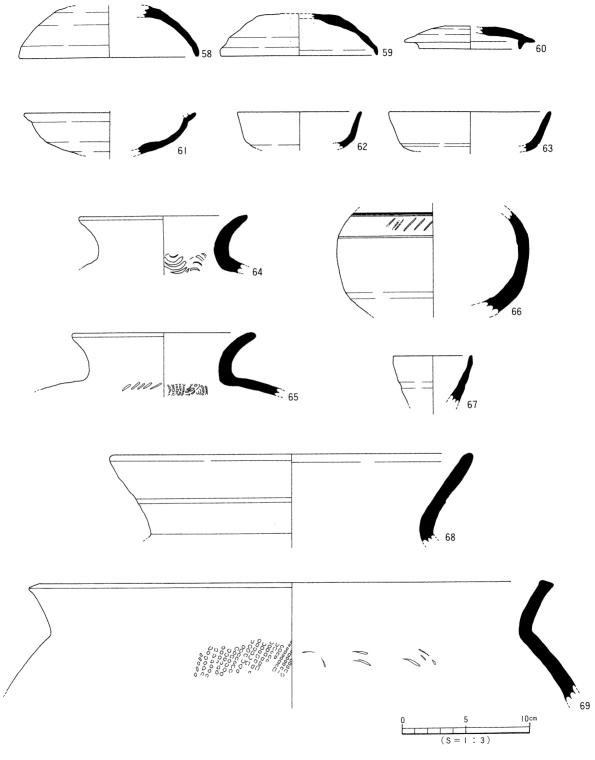
# 3) 層位·出土地点不明遺物(第57~59図58~79、図版38)

[須恵器] 58~60は坏蓋、61~63は坏(身)である。58·59は天井部と口縁部を分ける稜は 消失し、天井部から口縁部にかけて丸くなだらかなカーブを描いている。 6世紀後半~末。 60は扁平な天井部をもち内面にかえりを有する。口縁端部及びかえりの端部はやや尖り気味 である。7世紀前半。61は坏身片。たちあがりは欠損している。底部は丸みをもち受部は上 外方にのびる。6世紀。62・63は坏片。口縁部は両者共にやや外反気味に立ち上がる。内外 面共に回転ナデ調整を施す。8世紀。64~66は壺形土器。64・65は口縁部は大きく外反し口 縁端部は丸く仕上げる。65の頸部外面に平行叩き、内面に円弧叩きが認められる。66は口縁 部と底部は欠損。体部から鈍く屈曲する肩部に2条の沈線が巡り、沈線間に右上がりの刺突 列点文を施す。7世紀。67は提瓶の口縁部片。口縁中位に凹線状の凹みがみられる。6世紀。 68~71は甕形土器。68は口縁部は外反気味に立ち上がり口縁端部は丸く仕上げる。口縁中位 に1条の凹線が巡る。7世紀。69は口頸部はやや外方に立ち上がり口縁端部は「コ」字状に 仕上げる。外面に格子叩き痕、内面に円弧叩き痕が残る。8世紀。70・71は底胴部片。いず れも長胴で底部には底部と胴部との接合痕が顕著に認められる。調整は70は外面回転カキ目 調整、71は回転カキ目調整後、格子叩きを施す。内面は同心円叩きを施す。73は短脚高坏の 脚部片。脚基部は比較的太い。74は鉢。胴部から口縁部にかけて直立気味に立ち上がり、口 縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。内外面共に回転ナデ調整を施す。72は横瓶である。

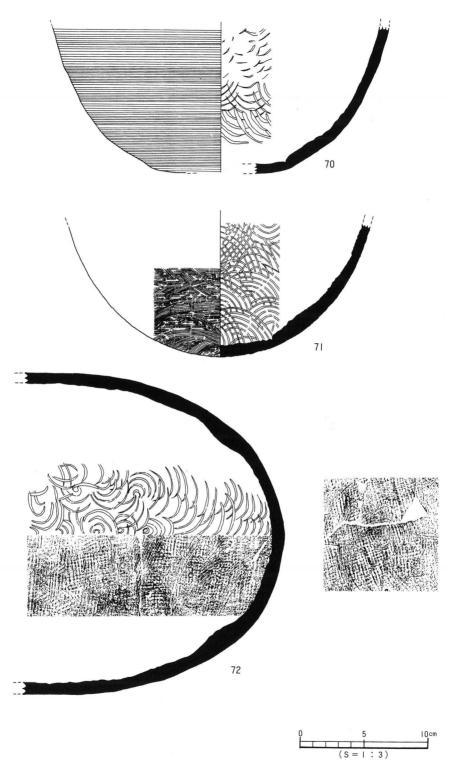
[陶磁器] 75は口縁部内外面の釉をかきとった、いわゆる口禿の白磁椀である。釉は青味をわずかに帯びた純白に近い白色を呈する。12世紀後半。〔土師器〕76は土師器坏。直線的に立ち上がる口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。ロクロ成形で、底部の切り離しはヘラ切りによる。10世紀。77は甕形土器。口縁部中位で段をなし口縁端部は丸く仕上げる。78は高坏形土器の脚部片。柱部は筒状を呈し、裾部は外方に開く。79はミニチュア土器。口縁部は端部付近でやや外反し、口縁端部は丸く仕上げる。



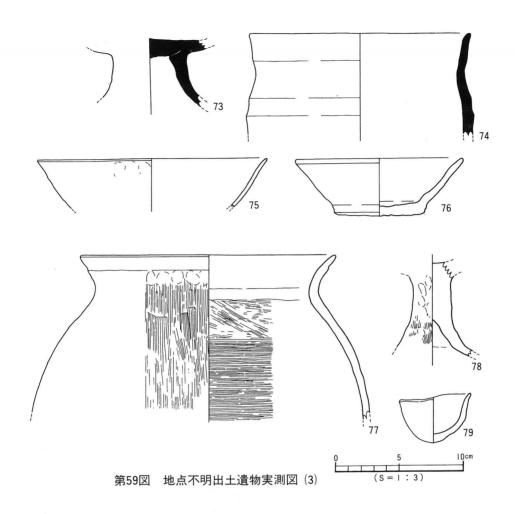
第56図 第Ⅳ層出土遺物実測図



第57図 地点不明出土遺物実測図(I)



第58図 地点不明出土遺物実測図 (2)



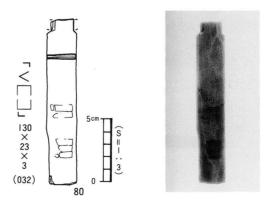
# (8) SR1出土の木簡(第60図、図版39)

出土木簡は文字が抹消され判読困難 であるが墨痕が確認される。本調査地 の北側隣接地からも奈良時代の木簡が 出土しており(『木簡研究』二)、こ の遺跡との関係も考えられる。

(西尾)

# 関係文献

愛媛県教育委員会『一般国道11号松山東道路 関係遺跡埋蔵文化財調査報告書II』 (1981年)



第60図 SR I 下層出土木簡

# (9) 木製品

出土木製品には用途が特定できるものと、そうでないものとがあり、そのうち46点を図化した。用途不明品については完形、もしくはほぼ完形に近いと思われるが用途のわからないものをA類とし、ある製品が破損し、その一部片であるために用途がわからなくなったものをB類とした。以下、用途のわかるものから出土地点別に記していくこととする。樹種は観察表に記した。

表17 出土木製品一覧

出土地点	木 簡	斎 串	匙形製品	円物	下駄	木 錘	部材	杭	用途フ	下明品 B類
									A 類	B類
SR 1	1	1	1	4	(2)	2	4	3	7	14
SR2	_	1	_	1	1	_		_	_	3
S D 1	-		_	_	_			_	1	_
計	1	2	1	5	1 (2)	2	4	3	8	17

# Ⅰ) S R I 下層 (第61・62図81~118、図版39・40)

#### 斎串 (81)

81は上部が欠損し、その形状は不明である。下先端は剣先状を呈し、両面から削り出している。厚さ0.6cmを測る板目材を使用。

#### 曲物 (87~90)

87・88は曲物の底板で、辺縁より2cm内側に側板位置を決める針書き刻線が巡る。辺縁は 斜めに角を落としている。2点ともに板目材を使用している。89は底板もしくは天板で、樺 皮結合の曲物である。表面にはケビキが施される。補修のためか3ヶ所に穴が穿っている。 紐擦れ痕などはみられない。柾目材を使用している。90は曲物の側板の細片で、斜平行のケ ビキを施している。柾目材を使用している。

#### 木錘 (91・92)

2点は芯持ち材を使用しており、全長14cm前後を測る。92は腐食が進みその加工はわかりにくいが、91のように中心に向けて多方向から削り細めたものと思われる。91は広葉樹を使用し直径約4.5cmを測る。

#### 匙形製品 (94)

94は板目材を使用している。幅1.2cm程度の頸部から撥形に広がっており、先縁は半月形を 呈する。表面は平滑で、中央がわずかに甲高く、辺縁は両面から薄く削り出される。

# 下駄 (102 · 103)

102・103は現存長9 cm前後、幅2.5~3 cmを測る。2点は側面からみると同様の木取りとなっており、その様子から下駄の歯のようなものと考えている。

部材 (111・112・117・118)

111は芯持ち材に縦2cm×横1cmのホゾ穴が穿ってある。上端は4方から丸く削り出されているが、下端は欠損しており形状は不明である。112は腐食が進み、いずれの面も破断面に見えるが方形のホゾ穴が穿ってあった可能性が考えられる。117は両端にものがあたった痕跡がみられることから箱物の側板のようなものを考えている。針葉樹の柾目材を使用している。118の断面形は長方形に近い形を呈している。一方の端は仕口の加工を施した建築部材のようなものを考えている。

杭(114~116)

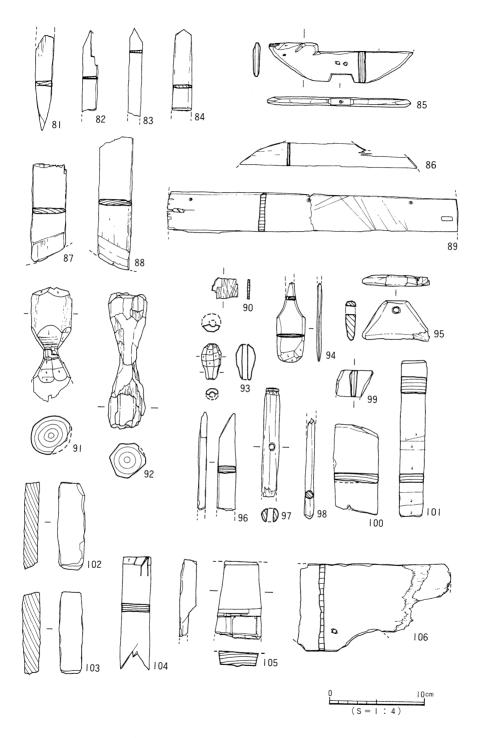
 $114 \cdot 115$ は芯持ち材を使用しており、 $2 \sim 3$  方向から片面のみ削り尖らせている。114には工具の刃こぼれが擦痕として観察できる。鉄斧によるものと思われる。116は直径2.5cm、現存長46.5cmを測る。空木を使用し、端を斜めに切り落としている。

用途不明品 A 類 (83・85・93・95・99・100・113)

83は厚さ0.2cmを測る柾目材を使用している。斎串の可能性を考えている。85は厚さ0.8cm の針葉樹の板目材を使用している。半月形の板の一部を「コ」字状に切り欠き周縁は面取りをおこなうなど丁寧な加工が施されている。先端近くに1ヶ所、中央に2ヶ所、切り欠いた側面に1ヶ所穿孔がみられる。95は厚さ1cm程度の柾目材を使用しており、平面形は台形を呈する。上辺よりに穿孔がみられ、下辺は面取りを行いやや尖らせている。93は約1/3片で、全長3.8cm、最大径は復元で2cmを測るものである。全体に面をつけている。鳴鏑の可能性を考えているが、横方向から穿った小孔はみられない。99は面取りを行い全体に丁寧な加工が施され、表面はなめらかである。100は現存長9.5cm、厚さ0.9cmを測る。99同様表面はなめらかに仕上げている。裏面は傷みがひどい。113は現存長30.7cm、最大径7.5cmを測る芯持ち材を使用している。両端は4方から削り出されている。杵として使用した後の再利用とも考えたが、使用痕はみられない。

用途不明品B類 (82・84・86・96~98・101・104~110)

82は板目材を使用し、現存長8.6cm、厚さ0.3cmを測る。84は柾目材を使用。現存長8.6cm、厚さ0.4cmを測る。上端は山形を呈し、下端は押し切られたように段をもつ。86は厚さ0.3cmの針葉樹の板目材を使用している。以上3点は形代のようなものの可能性を考えている。96は板目材で現存長10.3cm、幅1.9cm、厚さ0.8cmを測る。端は斜めに尖らせており表面はなだらかに仕上げられている。97は現存長11.5cm、直径1.5cmを測る。先端より0.5cmの位置を削り込み、くびれを持つ。頭の部分は面取りを行っている。中ほどは穿孔されており、内面は焼け焦げている。火箸による穿孔と考えられる。98は直径0.8cm前後の棒状のもので、先端はやや尖りぎみにつぶされている。101は現存長16.4cm、幅2.6cm、厚さ1.7cmを測る板目材で、下方に向けて削られており厚みを減じている。



第61図 SRI下層出土遺物実測図(I)

105は現存長8.2cm、厚さ1.6cmを測る板目材で、刃物による切り込みが入り木目にそって剝げている。木表面はなめらかである。104は現存長11.9cm、厚さ0.8cmを測る板目材で、刃物による切り込みがみられる。106は厚さ0.7cmを測る柾目材を使用しており、中心から反転した場合組み合わせ式机の脚のような形であるが、木取りや材の厚み、無数の刃物によるキズを見る限り、その可能性は薄いようである。107は現存長22.3cm、幅2cm前後を測る。板目材を使用しており先端は焼け焦げている。108は現存長25.4cm、幅1.5cm前後を測る。板目材を使用しており、面取りを行い断面形は楕円形を呈する。109は現存長42.2cm、幅1.7cm前後を測る。柾目材を使用している。棒状のもので表面は面取りを行い、丸味を帯びている。先端には木釘痕がみられた。110は現存長18cmで、太さ3.6×2.5cmの割裂材を使用しており、面取りを行っている。

#### 2) SR2 (第63図119~125、図版41)

SR2出土品は、119は埋土②層、他は①層からの出土である。

斎串 (119)

119は先端を山形につくり、上端近くの側面の左右  $1 \, \gamma$ 所に切り込みを入れている厚さ0.1cmと薄い柾目材を使用している。

曲物 (123)

123は直径16.2cmを測る柾目材を使用した曲物の底板で、木釘結合を行っている。

下駄 (124)

一木造りの連歯下駄で、全長26.6cm、幅6.5cmを測る。前壺は歯の前に右によせて穿っている。後壺は歯の前に穿っている。平面形は長楕円形を呈しており木面を上面に使用している。歯は内側に斜めに削り出している。本来はもう少し歯の高さがあったと思われる。

用途不明品B類 (120~122·125)

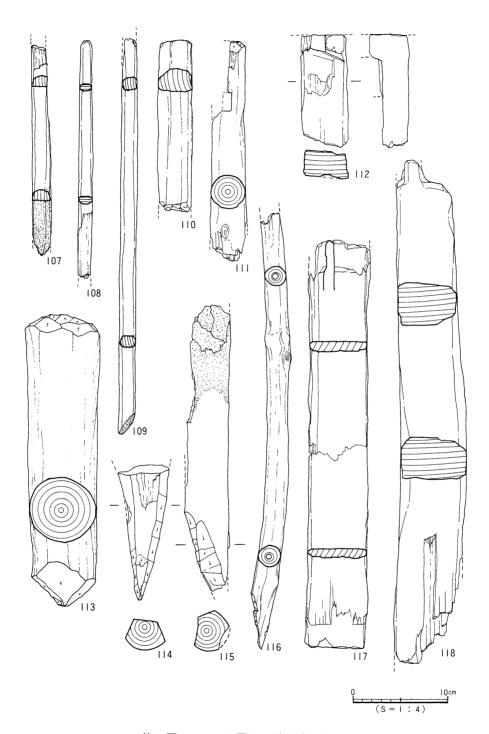
125は芯持ち材で、現存長77.8cmを測る。腐食が進み、加工痕はみられない。先端は欠損しておりやや尖ったようにも見える。120は現存長12.7cm、幅3.6cm、厚さ0.7cmを測る柾目材である。121・122は同一個体と思われる。厚さ0.5cmほどの柾目材を使用している。

これらの他に、部材などの角が欠けたような細片も数点みられた。

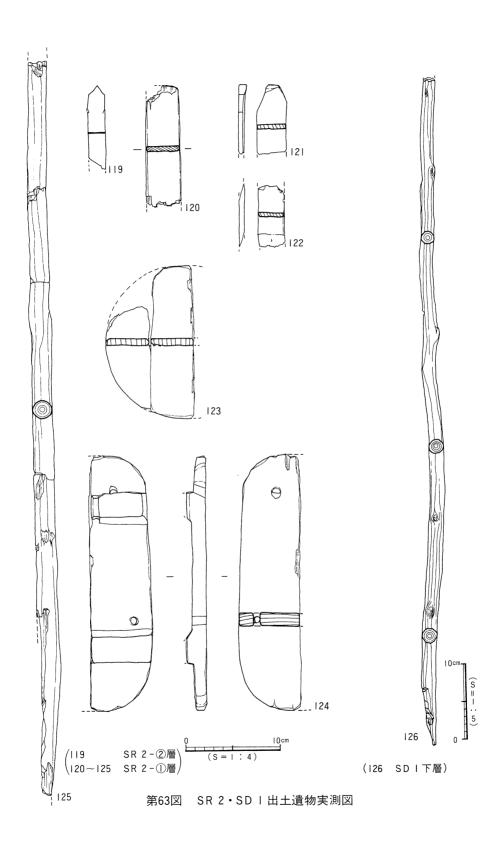
#### 3) SDI下層(第63図126、図版41)

用途不明品A類(126)

126は直径 2 cm前後の芯持ち材を使用しており、現存長89cmを測る。枝を落とし、表面は丁寧に面取りを行っている。先端は斜めに切り落とされている。



第62図 SRI下層出土遺物実測図(2)



#### (10) 種 実

当調査地では約100個のモモ核や、スモモ核、約350個のサクラ属サクラ節核などが主に採集された。各自然流路内、溝内の出土個数は下表に記している。

モモ核は最大のものでトレンチ内より出土した長さ36.1×幅24.4×復元厚17.6mmを測る。 最小のものはSR1より出土した17.7×14.2×12.2mmを測るものである。核は丸みを帯びた ものの他にアーモンド形をしたものがみられた。

スモモ核の最大は $15.8 \times 14.0 \times 8.9$ mm、最小は $11.1 \times 10.5 \times$ 復元7.2mmを測り、平均約13mmの長さで、円形を呈し、表面にはモモのようなしわはみられない。

サクラ属サクラ節核の最大は $8.3 \times 6.2 \times 4.8$ mm、最小は $6.5 \times 5.3 \times 4.5$ mmを測る。平均すると長さ7.5mmを測る。丸みの強い楕円形を呈する。

ウメ核は18.5×16.1×復元10.0mmを測る。

ウリ類の種子は10.0×4.0mmを測る。

ヒェウタン類の種子は11.0×7.0mmを測る。

コナラ属の堅果は10mm程の球形を呈する。

出土地点と出土する種実

SR1においてのみスモモとサクラ属サクラ節核が集中していた。

表18 出土種実一覧

	分類群				出土	地点		
和名	学名	部位	SR1	S R 2	SR3	SD1	SD3	不明
マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylor	球果	1	2				
コナラ属	Quercus	堅果	5	5				
ウメ	Prunus mume sieb. et Zucc.	核	1					1
スモモ	Prunus salicina Lindley.	核	20(12)					7
モモ	Prunus persica Batsch.	核	67(23)	15(6)	3(1)	3 (3)	1(2)	30(18)
サクラ属サクラ節	Prunus sect. Pseudocerasus	核	329(8)					21
ジュズタマ	Coix Lacryma-jobi L.	果実	9					
ウリ類	Cucumis melo L.	種子	3					
ヒョウタン類	Lagenaria siceraria standl.	種子	1	3				
オナモミ	Xanthium strumarium L.	果実					1	
不明	Unkown			1				

( )は半欠の個数を示す。

# 4. まとめ

本調査地では、古墳時代~奈良時代の生活関連遺構と弥生時代後期~中世の遺物を確認した。

掘立柱建物SB1は全様は明らかでないが、柱掘り方、柱穴規模などから、周辺調査検出の一連の掘立柱建物と関連があるものと思われる。

SD2は出土遺物より古墳時代(6C)の遺構であるが、その性格は明確にできなかった。 SR1は本調査地北側隣接地の久米窪田Ⅱ遺跡(S51年県教委)で確認された大溝の南延 長部であると思われ、護岸工事等の痕跡はみられなかったが、木簡を含む木製品、須恵器な どの遺物は同様な出土状況をみた。第Ⅳ層から下層にかけての堆積状況は、遺物の出土量が 少ない事、植物遺体の堆積層がみられる事から、弥生時代後期以前は湿地帯もしくは淀みで あったと思われる。ただし、水田址等の遺構は検出されなかった。

南北方向のSD3より東では地山面が一段低くなることから当調査地は、来住舌状台地東南部の落ち際の可能性も考えられる。

なお、(10)種実については金原正明氏の助言を得た。末尾ながら、記して感謝いたします。

#### 遺物一覧—凡例—

- (1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。 遺物は土器を宮内が、木器を岡根が作成した。
- (2) 遺物観察表の各記載について。

**法量欄** ( ):復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例)□→□縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部~底部。

**胎土・焼成欄** 胎土欄では混和剤を略記した。

- 例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( ) 中の数値は 混和剤粒子の大きさを示す。
- 例) 砂・長 (1 ~ 4) 多→「1 ~ 4 mm大の砂粒・長石を多く含む」 である。焼成欄の略記について。 ◎→良好、 ○→良、 △→不良。

表19 SD2出土遺物観察表 土製品

	け 器種 法量(cm) 形態・施文	T/#b +/	調	整	(外面) 色調	胎土	備考	図版	
番号	<b></b>	法重(cm)	形態 • 施又	外 面	内 面	(内面)	焼 成	畑ち	∟ LAINX
1	甕	口径(16.8) 残高 12.3	内湾する口縁部。口縁端部は 内側に肥厚。口縁端面は内傾 する。	<ul><li>回 ヨコナデ</li><li>厠 ハケ(6~7本/1cm)</li></ul>	<ul><li>回 ヨコナデ</li><li>胴 ハケ(5~6本/1cm)</li></ul>	茶褐色褐色	石·長(1~2)		36
2	甕	口径(17.4) 底径 4.0 器高 31.2	内湾する口縁部。口縁端面は 内傾し、内面は稜をなす。底 部は平底風。	<ul><li>回 ヨコナデ</li><li>胴 ハケ(6~7本/1cm)</li></ul>	<ul><li>日 ヨコナデ</li><li>胴上 ナデ</li><li>胴下 ハケ</li></ul>	褐色 茶褐色	石·長(1~3) ◎		36
3	坏身	口径(11.8) 器高 3.7	たちあがりは低く内傾し端 部は尖り気味に丸い。底部は 平底風。	<ul><li>回転ナデ</li><li>底 回転ヘラ削り1/3</li></ul>	<ul><li>回転ナデ</li><li>底 ナデ</li></ul>	灰褐色	石•長(1~3)		
4	甕	残高 6.5	丸底の底部。	回転カキメ→叩き	叩き	灰褐色	密		

## 表20 SR1下層出土遺物観察表 土製品

(1)

				調	整	(外面)	胎 土	** **	con u.c.
番号	器種	法量(cm)	形態・施文	外 面	内 面	色調 (内面)	焼 成	備考	図版
5	蓋	つまみ径2.6 つまみ高1.3	宝珠様のつまみ。	ナデ	ナデ	灰色	密〇		
6	坏蓋	口径(19.5) 残高 4.3	丸みのある天井部からなだらかに口縁部に至り、口縁端 部は丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色	密		36
7	坏	口径(14.0) 残高 3.9	無台坏。内湾する口縁部。端 部は尖り気味に丸い。口縁上 位に凹線状の凹みあり。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色	密		36
8	坏	口径(9.4) 残高 3.6	無台坏。直立気味に立ちあが る口縁部。口縁端部は尖る。 底部にヘラ切り痕あり。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰白色	密		
9	坏	口径(9.0) 残高 3.9	無台坏。体部下半に1条の凹線が巡る。底部にヘラ切り痕あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 〇		
10	坏	底径(11.0) 残高 1.6	有台坏。高台は底部端よりや や内側に付く。 高台端面に凹みあり。	回転ナデ	<ul><li>回転ナデ</li><li>底 ナデ</li></ul>	灰色	密(石·長1) ◎		
11	坏	底径(13.0) 残高 2.5	有台坏。高台は底部端付近に 付き、やや外端面で接地する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	密		
12	坏	底径(9.9) 残高 3.5	有台环。高台は低く、底部端 より内側に付く。平端面で接 地。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密		
13	壺	口径(17.5) 残高 4.3	外反する口縁部。端部は珠玉 状におさめる。頸部に記号あ り。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色灰色	密		36
14	壺	口径(12.2) 残高 5.6	外反する口縁部。口縁端面は 平坦面をなす。	① 回転ナデ 類 格子叩き	① 回転ナデ 頭 円弧叩き	暗灰色	<u>\$</u>		
15	壺	口径(18.8) 残高 5.8	壺の口縁部。口縁端部は丸く おさめる。器壁は厚い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密	自然釉	
16	高坏	残高 8.7	高坏の脚部片。円筒状の柱部。 裾部はラッパ状に開く。	図転へラ削り   脚 回転ナデ	ナデ	灰色	石・長1 ◎		
17	高坏	口径(11.4) 残高 0.7	高坏の脚部小片。脚端部は下 外方に外反して屈曲する。	ナデ	ナデ	灰白色	密		

## SR1下層出土遺物観察表 土製品

Γ"						r			
番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調	整	(外面) 色調	胎土	備考	ज्य एक
# 5	有合T里	太里(cm)	<b>// / / / / / / / / / / / / / / / / / /</b>	外 面	内 面	巴調 (内面)	焼 成	加考	図版
18	坏	口径(12.8) 残高 3.0	直線的に立ちあがる口縁部。 口縁端部は尖り気味に丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色	密		
19	坏	口径(12.9) 残高 2.0	内湾する口縁部。口縁端部は 丸くおさめる。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄色	密〇		
20	坏	口径(18.7) 残高 3.8	直線的に立ちあがる口縁部。 口縁端付近でわずかに外反 する。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色	密		
21	ミニチュア	口径(6.0) 残高 5.4	口縁部は直立気味で、口縁端 部は尖り気味に丸くおさめ る。	<ul><li>ロ ヨコナデ</li><li>順 ナデ</li></ul>	ヨコナデ	灰黄色	石·長1 ◎	黒斑	
22	坏	口径(16.8) 残高 4.2	境形態をなす坏。口縁端部は 尖り気味に丸く仕上げる。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	乳白色	密		
23	甕	口径(19.6) 残高 6.0	口縁部は中位でやや内湾し、 口縁部は平坦面をなす。 胴部外面は粗いハケ目調整。	<ul><li>□ ヨコナデ</li><li>厠 ハケ(6本/1cm)</li></ul>	ナデ	乳灰褐色	石•長(1~4)		
24	甕	口径(22.3) 残高 6.1	外反する口縁部。端部は「コ」 字状におさめる。	<ul><li>ロ ヨコナデ</li><li>胴 ハケ</li></ul>	① ヨコナデ 胴 摩滅の為不明	乳黄茶色	石·長(1~4)		

## 表21 SR2出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調	整	(外面) 色調	胎土	備考	図版
шэ	70712	/五里(CIII)	7万恩、旭文	外 面	内 面	(内面)	焼 成	佣亏	I LAINX
25	坏蓋	口径(12.2) 残高 3.3	天井部と口縁部の境界は凹線による。口縁部はやや外反して下がり、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	淡褐色	密〇	①F	
26	坏蓋	口径(11.4) 残高 3.5	やや尖り気味の天井部。 口縁部は外反して下がり端 部は丸く仕上げる。	天 回転へラ削り1/2 回 回転ナデ	回転ナデ	灰色	密	①F	
27	坏身	口径(12.0) 残高 3.4	たちあがりは低く内傾し端 部は丸い。受部は短くやや上 方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密	①層 自然釉	
28	坏身	口径(10.4) 残高 3.3	たちあがりは短く内傾し端 部は尖り気味に丸い。 受部は上外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	石·長(1~2)	①層	
29	高坏	残高 3.0	円筒状の脚部。1 条の沈線あり。 小片。	回転ナデ	回転ナデ	乳褐色 灰白色	密〇	①層	
30	高坏	残高 8.0	筒状の脚部。脚基部は比較的 太い。	摩滅の為不明	ナデ	乳白色	密	②層	
31	椀	口径 12.6 器高 5.4	完形品。口縁部は、内湾して たちあがり、端部は丸く仕上 げる。	<ul><li>ココナデ</li><li>胴 ハケ(5本/1cm)</li></ul>	ナデ	灰黄色 灰褐色	石·長1 ◎	②層 黒斑	36
32	甕	口径(24.3) 残高 3.9	外反する口縁部。口縁端部は 丸く仕上げる。	ハケ(5本/1cm) →ナデ	ナデ	乳褐色	石•長(1~2) ◎	②層	
33	甕	口径(18.1) 残高 2.4	甕の口縁部。口縁端部は平坦 面をなし、端部内面はやや肥 厚する。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色	石·長(1~2)	①層	

**(2**)

表22 SR3出土遺物観察表 土製品

	00.73	<b>*=</b> ( )	weeks the t	調	整	(外面)	胎土		
番号	器種	法量(cm)	形態・施文	外 面	内 面	色調 (内面)	焼 成	備考	図版
34	甕	口径(16.1) 残高 6.0	口縁部は「く」の字状を呈し、 口縁端部は内側に肥厚する。	<ul><li>回 ヨコナデ</li><li>順 ハケ</li></ul>	<ul><li>回 ヨコナデ</li><li>胴 ナデ</li></ul>	乳黄褐色	石·長(1~2) ◎	⑤層 黒斑	
35	甕	口径(17.1) 残高 3.3	口縁端面は面取りして内傾 する。	ヨコナデ	摩滅の為不明	灰黄色	石・長(1~3)	⑤層	36
36	高坏	残高 7.2	脚柱部は三角錐を呈し、裾部 はゆるやかに傾斜する。柱裾 部内面にわずかに稜あり。	<ul><li>塚 摩滅の為不明</li><li>脚上 ハケ→ナデ</li><li>脚下 ナデ</li></ul>	ナデ	乳灰色	石·長(1~2)	⑤層	
37	壺	口径(11.6) 残高 3.9	口縁部は上方に拡張し、口縁 端面に3条の凹線文を施す。	① ヨコナデ 胴 摩滅の為不明	□ ヨコナデ 胴 摩滅の為不明	乳黄色	石·長(1~3) ◎	⑦層	
38	甕	底径(7.5) 残高 5.5	やや上げ底を呈する甕形土 器の底部。外面に縦方向のミ ガキ調整を施す。	ヘラミガキ	摩滅の為不明	乳黄褐色	石•長(1~3)	⑦層	
39	甕	残高 6.5	上げ底。底端部は尖り気味に 仕上げる。	ナデ	摩滅の為不明	灰黄色 黒灰色	石・長(1~2)	⑦層 黒斑	
40	甕	底径(5.4) 残高 2.5	平底の底部。底部からゆるや かに斜め上方に立ちあがる。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	黒灰色 暗灰色	石•長(1~3)	⑦層	

## 表23 第 III 層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調	整	(外面) 色調	胎土	備考	図版
田つ	和的工主	AE(CIII)	7万思、旭文	外 面	内 面	(内面)	焼 成	佣考	I AW
41	坏蓋	口径(14.2) 残高 1.2	扁平な天井部から、段をなし て下がり、口縁部は下内方へ 屈曲。端部は丸い。	天 回転へラ削り 回 回転ナデ	回転ナデ	灰色	密		
42	坏	口径(9.35) 器高 3.9	直立気味に立ちあがる口縁 部。端部は尖り気味に丸い。 底部にヘラ切り痕あり。	<ul><li>回転ナデ</li><li>底 回転へラ削り</li></ul>	<ul><li>回転ナデ</li><li>ば ナデ</li></ul>	灰色 青灰色	密		
43	坏	底径(8.4) 残高 2.3	有台坏。高台は比較的太く、 底部端に付く。外端面で接地。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	石•長(1~2)		
44	ш	残高 2.3	体部は外傾して立ちあがり、 口縁端部で強く外反する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密		
45	甕	口径(33.7) 残高 10.6	口縁部は強く外反し、端部は 「コ」字状におさめる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	石·長(1~2)		37
46	坏	口径(19.7) 残高 3.5	内湾する口縁部。口縁端部は やや外反する。内面に工具に よる削り痕あり。	ヘラミガキ	工具痕あり	乳黄白色	石・長(1~2)		37
47	坏	底径(6.9) 残高 2.1	平底風の底部。斜め上方に直 線的に立ちあがる。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳灰黄色 乳黄褐色	石·長1 ◎		

表24 第Ⅳ層出土遺物観察表 土製品

			17000000000000000000000000000000000000	調	 整	(外面)	胎土		
番号	器種	法量(cm)	形態・施文	外 面	内 面	色調(内面)	焼 成	備考	図版
48	虁	残高 3.6	胴部外面に3条以上の沈線 文、沈線文下に、刺突文あり。	ヘラミガキ	摩滅の為不明	乳灰白色	石・長1 〇		
49	甕	残高 5.5	胴部外面に3条以上の沈線 文を施す。	ナデ	ナデ	淡黄褐色	石·長(1~2) ◎		
50	甕	残高 7.8	胴部外面に17条以上の沈線。 沈線文間に 2 連の刺突文を 施す。	ハケ(11本/1 cm)	ヘラミガキ	灰黄色	石·長(1~4) ◎		
51	壺	残高 6.0	胴部上位に 2.条の凸帯を貼付。凸帯上に刻み目を施す。	ヘラミガキ	ナデ	灰黄色	石•長(1~3) ◎	黒斑	
52	甕	口径(16.0) 残高 7.0	「く」の字口縁を呈する甕形 土器。口縁内面は明瞭な稜を もつ。	□ 摩滅の為不明 胴 タタキ	ハケ(11本/1 cm)	乳黄灰色	石·長(1~2) ◎		
53	壺	底径(10.5) 残高 3.9	わずかに上げ底を呈する底 部片。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	乳黄褐色	石•長(1~5)		
54	鉢	口径(20.2) 残高 3.7	口縁部内面が肥厚する粗製 土器。口唇部は丸く仕上げる。	ナデ	ナデ	淡黄灰色	石·長(1~2) 金 ⊚		37
55	深鉢	口径(25.8) 残高 2.1	口縁部は「く」の字状に外反 し、口縁端は肥厚する。	ナデ	摩滅の為不明	黄白色	石・長(1~4)		37
56	深鉢	口径(15.0) 残高 1.7	口縁部は「く」の字状に外反。 肥厚部は断面三角形状を呈 し、肥厚部に縄文を看取。	摩滅の為不明	ナデ	灰黄褐色	石・長(1~2)		37
57	深鉢	口径(20.8) 残高 3.2	波状口縁を呈する有文深鉢。 肥厚部に縄文を施す。	ナデ	摩滅の為不明	乳黄白色	石·長(1~4)		37

## 表25 地点不明出土遺物観察表 土製品

**(1**)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文		調	整		(外面) 色調	胎	±	備考	図版
留写	<b></b> 在 1 里	/五里(cm)	<b>炒思、爬又</b>		外 面	内	面	(内面)	焼	成	畑つ	LEI/IX
58	坏蓋	口径(14.1) 残高 4.0	天井部からなだらかなカー ブを描いて口縁部に下がる。 口縁端部は丸い。	<b>B</b>	回転へラ削り1/2 回転ナデ	回転ナデ		青灰色 灰色	密			
59	坏蓋	口径(12.4) 残高 3.3	やや扁平な天井部からなだ らかに口縁部に下がり、口縁 端は下方にやや屈曲する。	<b>B</b>	回転へラ削り1/3 回転ナデ	天 ナデ 回 回転ナデ		灰褐色 青灰色	石·長 ◎	(1~2)		
60	坏蓋	口径(8.0) 残高 1.8	扁平な天井部。かえりは口縁 端部より下がり、端部は尖り 気味。	(月)	回転へラ削り1/2 回転ナデ	回転ナデ		青灰色	密			
61	坏身	受部径(13.7) 残高 3.1	たちあがりは欠損。受部は上 外方にのび、受部端に沈線状 の凹みあり。	慮厠	回転へラ削り1/2 回転ナデ	回転ナデ		灰色 青灰色	石·長 ◎	(1~2)		
62	坏	口径(9.8) 残高 2.9	無台坏。外反して立ち上がる 口縁部。端部は丸い。	回転		回転ナデ		青灰色 灰色	密			
63	坏	口径(12.7) 残高 3.1	無台坏。やや外反気味に立ち 上がる口縁部。端部は丸くお さめる。	回転	ミナデ	回転ナデ		灰色	密			

# 地点不明出土遺物観察表 土製品

				調	整	(外面)	胎土		(2
番号	器種	法量(cm)	形態・施文	外 面	内 面	色調 (内面)	焼成	備考	図版
64	壺	口径(13.2) 残高 4.6	外反する口縁部。端部は丸く 仕上げる。	回転ナデ	① 回転ナデ ・ 円弧叩き	乳灰色	密 ③		
65	壺	口径(14.5) 残高 4.9	大きく外反する口縁部。端部 は丸く仕上げる。	① 回転ナデ 第 平行叩き	① 回転ナデ 頸 円弧叩き	灰白色	密〇		
66	壺	残高 8.0	扁球形の胴部。胴部上位に 2 条と 1 条の沈線文。沈線文間 に刺突列点文を施す。	胴上 ナデ 胴下 回転へラ削り	回転ナデ	青灰色 灰白色	密		
67	提瓶	口径(6.2) 残高 3.7	提瓶の口縁部か。口縁中位に 凹線状の凹みあり。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	青灰色	石・長1 ◎		
68	甕	口径(28.6) 残高 7.3	外反気味に立ち上がる口縁 部。口縁中位に1条の凹線が 巡る。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	密	自然釉	
69	甕	口径(39.4) 残高 9.5	外反する口縁部。端部は「コ」 字状に仕上げる。	<ul><li>回転ナデ</li><li>胴格子叩き</li></ul>	① 回転ナデ 胴 円弧叩き	淡灰色	密		
70	甕	残高 11.6	底部内面に接合痕顕著。	回転カキ目	回転ナデ	淡灰色灰 緑色 淡灰色	長1 ⑤		38
71	甕	残高 10.1	丸底風の底部。	カキ目(平行)	円弧叩き	灰色	密〇		
72	横瓶	残高 25.6	底部外面に格子叩き、胴部は 平行の叩きを施す。	叩き(格子目)	同心円叩き	灰色	密 🔘		38
73	高坏	残高 5.4	短脚高坏の脚部片。脚基部は 比較的太い。	回転ナデ	ナデ	乳黄灰色	密		
74	鉢	口径(17.4) 残高 8.0	直立気味に立ち上がる口縁 部。口縁端部は尖り気味に丸 く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 乳黄灰色	密		38
75	椀	口径(18.0) 残高 3.8	白磁椀。内湾気味に立ち上が る口縁部。口縁端部はやや外 反する。	ナデ	ナデ	白色	密 〇		
76	坏	口径(13.0) 底径(7.1) 器高 4.5	平底の底部。口縁部はやや外 反気味に立ち上がる。 底部は回転ヘラ切り離し。	回転ナデ	ナデ	乳灰色	石·長(1~3) ◎		38
77	甕	口径 20.2 残高 12.9	外反する口縁部。口縁中位に 段をなす。口縁端部は先細り する。	<ul><li>回 ヨコナデ</li><li>胴 ハケ(9本/1cm)</li></ul>	<ul><li>ロ ヨコナデ</li><li>厠 ハケ(12本/1 cm)</li></ul>	乳黄褐色	石·長(1~2) ◎		
78	高坏	残高 7.4	高坏形土器の脚部片。円筒状の柱部からラッパ状に開く。	ハケ(9本/1 cm) →ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰褐色	石•長(1~2)		
79	ミニチュア	口径 7.6 器高 5.2	尖り気味の底部。口縁端部は 外反する。	<ul><li>回 ヨコナデ</li><li>胴 ナデ</li></ul>	ナデ	暗灰色	石·長(1~3) 金 ◎		

**—** 109 **—** 

**(2**)

# 表26 SR1下層出土遺物観察表 木製品

(1)

表26	<del>-                                    </del>		直物觀祭表	<b>不製品</b>				T	(1
番号	品目	法	量(cm 幅	厚さ	木取り	樹種	備考	グリッド	図版
80	木簡	全 長	<b>₽⊞</b>	0.3	板目材	樹種同定(未)	墨痕。		39
00	不問	15.0	2.3		11% (2) 1/3	切性问定 (水)	3E71/C0		
81	斎中	(10.0)	0.9	0.6	板目材	ヒノキ		2 B	39
82	不明 B	(8.6)	( 1.5)	0.3	板目材	ヒノキ	形代か?	南北東ベルト	39
83	不明 A	9.4	1.3	0.2	柾目材	ヒノキ	斎串か?	3 B	39
84	不明 B	(8.6)	2.1	0.4	柾目材	ヒノキ	斎串か?		39
85	不明 A	15.3	4.1	0.8	板目材	ヒノキ	鳥形か?	4 B	39
86	不明 B	(18.7)	2.4	0.3	板目材	ヒノキ	形代か?	2 C	39
87	曲物	(10.4)	3.6	0.6	板目材	ヒノキ		2 C	39
88	曲物	(14.0)	( 3.5)	0.7	板目材	ヒノキ		3 B	39
89	曲物	30.6	4.1	0.6	柾目材	ヒノキ	樺皮結合。 穿孔3ケ所。	3 B	39
90	曲物	( 2.1)	( 2.7)	(0.3)	柾目材	ヒノキ		2 C	39
91	木錘	(13.3)	径 3.5~4.2	径 3.8~4.5	芯持ち材	ヤブツバキ		2 B	39
92	木錘	14.3	径 4.2		芯持ち材	ヤブツバキ	腐食進む。	3 B	39
93	不明 A	3.8	2.0		芯持ち材	ウツギ属	鳴鏑か?	2 C	39
94	匙形 製品	( 8.3)	3.0	0.4 頸部 1.1	板目材	ヒノキ		3 A	39
95	不明 A	7.0	3.2	1.1	柾目材(?)	ヒノキ	φ1 cmの穿孔を施す。		39
96	不明 B	(10.3)	1.9	0.8	板目材	ヒノキ		4 B	39
97	不明 B	(11.5)	径 1.5		芯持ち材	ヒノキ	φ 0.6cmの穿孔を施す。	1 C	39
98	不明 B	(10.5)	径 0.7~ 0.9			ヒノキ			39
99	不明 A	3.9	2.8	0.8	板目材	ヒノキ		4 B	39

**(2**)

## SR1下層出土遺物観察表 木製品

		法	<u> </u>	m)	T	T			\ <u>-</u>
番号	品目	全長	幅	厚さ	木取り	樹 種	備考	グリッド	図版
100	不明 A	9.5	4.8	0.9	板目材	ヒノキ		2 B	39
101	不明 B	16.4	2.6	1.0~ 1.7	板目材	ヒノキ		南北東ベルト	39
102	下駄 (?)	9.2	2.9	1.5	板目材	ヒノキ		2 B	39
103	下駄 (?)	8.7	2.5	2.2	板目材	ヒノキ		2 C	39
104	不明 B	11.9	3.0	0.8	板目材	ヒノキ			39
105	不明 B	( 8.2)	4.9	1.6	板目材	ヒノキ		3 B	39
106	不明 B	(15.7)	19.1	0.7	柾目材	ヒノキ			39
107	不明 B	(22.3)	1.5	1.2	柾目材	モミ属	焼け焦げる		40
108	不明 B	(25.4)	1.5	1.0	板目材	ヒノキ		南北東ベルト	40
109	不明 B	42.2	1.5~ 1.8	1.4	柾目材 (?)	ヒノキ	木釘穴有。	4 B	40
110	不明 B	(18.0)	3.6	2.5		ヒノキ		2 C	40
111	部材	(23.1)	径 3.0~ 3.5		芯持ち材	サカキ	2 × 1 cmホゾ穴	3 B	40
112	部材	12.0	5.0	2.7	板目材	スギ		3 B	40
113	不明 A	(30.7)	径 7.0~7.5		芯持ち材	カヤ		2 B	40
114	クイ	(14.3)	径 (5.5)		芯持ち材	ヤブツバキ		7 C	40
115	クイ	(30.5)	径 4.5		芯持ち材	マツ属複維 管束亜属	焼け焦げる。	2 C	40
116	クイ	(46.5)	径 2.5		芯持ち材	ウツギ属		3 B	40
117	部材	43.4	6.5	1.0	板目材	スギー ヒノキ科		2 C	40
118	建築部材	(53.0)	6.7	4.5	板目(?)	ヒノキ		2 B	40

表27 SR2出土遺物観察表 木製品

番号	品目	法量(cm		木取り		樹種	備考	グリッド	図版
<b>金万</b>		全 長	幅	厚さ	不収り	1四 1至	C. turk	ッド	i i i i i i i i i i i i i i i i i i i
119	斎串	(8.9)	1.9	0.1	柾目材	ヒノキ	②層	3 A	41
120	不明 B	12.7	3.6	0.7	柾目材	ヒノキ	① <b>層</b>	4 B	41
121	不明 B	(7.5)	3.1	0.5	柾目材	ヒノキ	① <b>層</b>	3 B	41
122	不明 B	( 6.5)	2.8	0.4	柾目材	ヒノキ	① <b>層</b>	3 B	41
123	曲物	16.2	4.6	0.9	柾目材	ヒノキ	木釘結合 ①層	3 B	41
124	下駄	26.6	( 6.5)	1.5	板目材	ヒノキ	一木造り連歯。 ①層	3 A	41
125	クイ (?)	(77.8)	直径 2.0		芯持ち材	コナラ属 アカガシ亜属	① <b>層</b>	4 B	41

## 表28 SD1下層出土遺物観察表 木製品

番号	品目	法 量(cm)			+ H2 ()	# 1番	備考	グリ	図版
		全 長	幅	厚さ	木取り	樹種	1佣 专	ッド	
126	不明 A	(89.0)	直径 (2.6)		芯持ち材	ヤブツバキ	表面丁寧な面取り。		41

第5章

# 自然科学分析

# 5-1 久米窪田森元遺跡 3 次調査地出土木材の樹種同定

#### 1. 試 料

〔試料Ⅰ〕久米窪田遺跡 3 次調査地出土木材57点の樹種同定を行った。試料となった木材は木錘・匙形製品・曲物・下駄などの木製品から、部材・杭・用途不明品と多岐にわたる。試料は、保存の良いものから腐朽の進んだものまであり、切片の作成しずらいものもあった。切片の作製は資料から直接採取して行い、その際資料保護のため必要最小限の採取とした。試料は、樹種一覧表(表29)に記載した。

〔試料2〕久米窪田森元遺跡3次調査地出土木材の比較資料として、来住廃寺18次調査地出土木材28点の樹種同定を行った。試料となった木材は杭が主であった。試料は、ほとんどが腐朽の進んだものであり、切片の作製にはかなり困難を要した。切片の作製は資料から直接採取して行い、その際資料保護のため必要最小限の採取とした。試料は、樹種一覧表(表30)に記載した。

## 2. 方 法

試料からカミソリによって横断面(木口面)・放射断面(柾目面)・接線断面(板目面)の切片を作製し、顕微鏡によって解剖学的特徴を観察しその特徴および所有する現生標本との対比によって同定を行った。同定された分類群はそれぞれの同定レベルによって属・亜属・種で表した。

## 3. 結果

〔試料 I 〕同定の結果は一覧表(表29)にまとめた。同定された分類群は10であった。なお、主要なものは写真に示した。以下に各分類群の特徴とその樹種および木材の特性を記す。

〔試料 2〕同定の結果は一覧表(表30)にまとめた。同定された分類群は11であった。主要なものは写真に示したが、腐朽が著しく鮮明な写真は示しえなかった。以下に各分類群の特徴とその樹種および木材の特性を記す。

a. カヤ Torreya uncifera Sieb. et Zucc. イチイ科

仮道管と放射柔細胞の2種類から構成される針葉樹材である。

横断面:早材から晩材への移行はゆるやかで、均質緻密である。

放射断面:仮道管の壁面にはらせん肥厚があるが、腐朽のため不鮮明である。

分野壁孔は小型のヒノキ型で1分野に普通4個存在する。

接線断面:仮道管の壁面には2本づつ対になるらせん肥厚が著しい。放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質からカヤに同定される。カヤは宮城県以南の温帯から暖帯に分布する常緑の高木であり、適潤な谷間を好む。高さ30m、径2mに達する。木材は堅硬緻密で弾性にとみ、水湿に耐え耐久力がある。碁将棋盤・器具・彫刻などに使われ、遺跡の出土例では弓に多い。

#### b. モミ属 Abies マツ科

仮道管と放射柔細胞の2種類から構成される針葉樹材である。

横断面:早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部が狭い。

放射断面:分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1~4個存在する。放射柔細胞の末端壁は じゅず状に肥厚し大きな特徴である。

接線断面:放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質からモミ属に同定される。モミ属は亜熱帯に生育する寒冷種から温帯に生育するものまでがある。大きいものでは高さ40m、径2m以上に達する。木材は軽軟かつ保存性が悪い。建築・器具など多様に使われる。

#### c. マツ属複維管束亜属 Pinus subgen. Diploxylon マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管および垂直・水平樹脂道をとりかこむエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面:早材から晩材への移行は急で早材部の幅も広く、晩材部および移行部には正常樹 脂道がある。

放射断面:放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内こう面には鋸歯状肥厚があり、鈍いものや高さのやや低い鋸歯をもつものが多い。

接線断面:放射組織は単列でたいがいは10細胞高以下であり、水平樹脂道を含んだ紡錘形の放射組織がある。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。放射仮道管の鋸歯状肥厚はやや低いものが多く、クロマツ起源の木材である可能性が高い。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、交配可能で中間種がある。いずれも本州から九州、琉球、朝鮮南部にかけて分布する。樹木は高さ40m、径2mにも達する。材は重硬な良材で水湿によく耐え、建築・土木など用途が広く用いられている。

#### d. スギ Cryptomeria japonica D.Don スギ科

仮道管、軸方向柔細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面:早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。また年輪の外半分には軸方向柔細胞が散在する。

放射断面:放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に2個存在するものがほとん

どである。

接線断面:放射組織は単列で、多くは10細胞高以下である。

以上の形質からスギと同定される。スギは本州から九州まで分布する常緑高木で、クスノキについで大木となる。高さ30m、径2mにも達する。材は、軽軟であるが強靱で、建築など日本の材中最も用途が広い。

e. ヒノキ Chamaecyparis obtusa Endl. ヒノキ科

仮道管、放射柔細胞、および軸方向柔細胞から構成される針葉樹材。

横断面:早材から晩材への移行はやや急で、晩材部が少ない。

放射断面:放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は典型的なヒノキ型で1分野に2個のものが多い。

接線断面:放射組織は単列で、多くは10細胞高以下である。

以上の形質からヒノキに同定される。なお、分野壁孔の型が確認できないが2個存在し、他の特徴が明らかにヒノキである試料もヒノキと同定した。ヒノキは、福島県以南の本州から九州にかけて分布する常緑高木で、高さ30m、径1m以上に達する。材は木理通直、肌目緻密であり、建築、家具など多様に使われる。

f. スギーヒノキ科 Cryptmeria-Cupressaceae

スギとヒノキ科に近似するが、特徴が腐朽によって明らかでなく、識別できないため、スギーヒノキ科とした。

g. コナラ属アカガシ亜属 Quercus subgen. Cyclobal anopsis ブナ科

横断面:中型ないしやや大型の道管が1~数列幅で放射方向に配列する放射孔材である。 軸方向柔細胞は接線状に配列する。

放射断面:道管は単穿孔で、放射柔細胞は平伏細胞のみである。

接線断面:放射柔細胞が構成する放射組織は、同性放射組織型で単列のものと広放射組織があり、複合放射組織および集合放射組織の分布を示す。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。アカガシ亜属には、アカガシ・イチイガシ・シラカシ・アラカシなど8種がある。常緑広葉樹で、本州中部以南に分布し、照葉樹林帯 (暖温帯)上部を構成する主要な常緑高木である。高さ20~30m、径1 m前後。弾力性があり強く硬い材で、農具等の器具類・船舶・土木など堅材的用途に用いられる。

h. ヤブツバキ Cammellia japonica L. ツバキ科

横断面:小さな道管がほぼ単独で平等に分布する散孔材である。

放射断面:道管の穿孔は、20前後の階段穿孔板をもつ多孔穿孔である。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなり、直立細胞にはダルマ状にふくれているものがある。

接線断面:放射組織は多列の異性放射組織型で、1~4細胞幅である。

以上の形質よりヤブツバキに同定される。ヤブツバキは本州中部以南に広く分布する常緑高木である。高さ15m、径50cmにも達する。木材は強靱かつ堅硬で、建築・器具などに使用される。

#### i. サカキ Clevera japonica Thunb. ツバキ科

横断面:小さな道管がほぼ単独で平等に分布する散孔材である。

放射断面: 道管の穿孔は、狭く100以上に達するものもある階段穿孔板をもつ多孔穿孔である。 放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる。

接線断面:放射組織は単列の異性放射組織型である。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは本州中部以南に広く分布する常緑低木である。高さ12m、径30cmに達する。木材は強靱かつ堅硬で、建築・器具などに使用される。

#### j. ウツギ属 Deutzia ユキノシタ科

横断面:小さな道管が平等に散在する。

放射断面:道管の穿孔は、50前後にも達する階段穿孔板の多孔穿孔である。放射組織は平 伏細胞と直立細胞からなる。

接線断面:放射組織は多列の異性放射組織型で、2・3細胞幅からなり高さが高い。鞘状細胞が著しい。

以上の形質からウツギ属に同定される。ウツギ属は本州または本州以南に分布する落葉の 低木である。材は硬いが低木であるため細く髄が虚ろとなる。

#### k. ヒノキ科 Cupressaceae

ヒノキ科に近似するが、特徴が腐朽によって明らかでなく、特に分野壁孔の数が確認できないため、ヒノキ科とした。

## 1. アサダ Ostrya japonica Sarg. カバノキ科

横断面:小さな道管がややまばらに分布する散孔材である。軸方向柔細胞が短接線状に分 布する。

放射断面: 道管は単穿孔で、内壁には微細ならせん肥厚がある。放射組織は平伏細胞と直 立細胞からなる。

接線断面:放射組織は同性放射組織型で、1~3細胞幅である。

以上の形質からアサダに同定される。日本では北海道から九州まで分布する落葉高木で、 高さ15m、径60cmに達する。材はやや強く耐朽め保存性は中庸であり、家具・器具・建築な どに用いられる。

### m. スダジイ Castanopsis sieboldii Hatusima ブナ科

横断面:年輪のはじめに中型の道管がやや疎に数列配列し、晩材部では小道管が火炎状に 配列する環孔材である。

放射断面:道管は単穿孔である。放射柔細胞はおおむね平伏細胞からなる。

接線断面:放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質からスダジイと同定される。スダジイは本州の関東以南に分布し、照葉樹林の主要構成要素の一つである。高さ20m、径1mに達する。木材は耐朽・保存性がやや低く、薪炭のほか建築・器具・家具などに用いられる。

## n. シロダモ Neolitsea sericea Koidz. クスノキ科

横断面: 径50 μ 前後の道管が、単独か放射方向に複合してまばらに分布する散孔材である。 放射断面: 道管は単穿孔を主とするがまれに階段穿孔板の多孔穿孔を示す。放射柔細胞は 平伏細胞と縁辺の直立細胞からなる。

接線断面:放射組織は上下端が直立細胞からなる異性放射組織型で、2列幅が主である。 以上の形質からシロダモに同定される。本州南部から九州、台湾、中国の暖地に分布する 常緑高木で、高さ15m、径1mに達する。木材は耐朽・保存性、切削・加工性ともに中庸で、 建築・家具・器具などに使われる。

#### o. サクラ属 Prunus バラ科

散孔材:小さい道管が単独あるいは複合して均質に分布する散孔材である。

放射断面:道管は単穿孔で、内壁には螺旋肥厚があるが腐朽のため不鮮明である。放射柔 細胞は平伏細胞と直立細胞からなる。

接線断面:放射組織は異性放射組織型で1~3細胞幅である。

以上の形質からサクラ属に同定される。サクラ属は種類によるが日本各地に分布する落葉 高木である。高さ15m、径1mに達するものもある。材は耐朽・保存性が高く、建築・家具・ 器具など広汎にわたって使用される。

## p. ヒサカキ属 Eurya ツバキ科

横断面:単独の小さな道管が平等に散在する散孔材である。

放射断面:道管の穿孔は、狭く100以上に達するものもある階段穿孔板をもつ多孔穿孔であ

る。放射組織には平伏細胞と直立細胞からなる。

接線断面:放射組織は異性放射組織型で、1~3細胞幅でやや高い。

以上の形質よりヒサカキ属に同定される。ヒサカキをはじめ6種ある。ヒサカキ属は本州中部以南に広く分布する常緑低木で、やや乾燥した丘陵にふつうにみられる。高さ10m、径30cm。材は緻密で強さ中庸で、小細工、薪炭に使用される。

#### 4. 所 見

〔試料 I 〕同定された樹種はヒノキが最も多く用途も多用である。木錘には硬く重いヤブツバキが使われ、鏑の可能性を考えている製品には硬いウツギが使用されており、適した選材といえる。また、ヒノキ材の多用は西南日本において 4世紀以後に普遍的にみられる現象である。

〔試料 2〕同定された樹種はマツ属複維管東亜属が多いものの、スダジイ・シロダモ・ヤブツバキなど多用である。杭材については、低木も多く、樹種を選択的に使用したのでなく、周辺に生育する樹木を用いた可能性が高いとみられる。

## 【参考文献】

島地謙・伊東隆夫 (1982) 図説木材組織・地球社 島地謙ほか (1985) 木材の構造・文永堂出版 日本第四紀学会編 (1993) 第四紀試料分析法・東京大学出版会

表29 久米窪田森元遺跡 3 次調査地 樹種一覧 (1)

No.	層	グリッド	器種	分類群 (和名	/ 学名)
114	S R-1	7-C	杭	ヤブツバキ	Cammellia japonica L.
97	S R-1	C 1	用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
86	S R-1	C 2	用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
117	S R-1	C 2	部材	スギーヒノキ科	Cryptomeria-Cupressaceae
115	S R-1	C 2	杭	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen.Diploxylon
110	S R-1	C 2	用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
113	S R-1	В2	用途不明	カヤ	Torreya nucifera Sieb. et Zucc.
116	S R-1	В3	杭	ウツギ属	Deutzia
92	S R-1	В3	木錘	ヤブツバキ	Cammellia japonica L.
111	S R-1	В3	部材	サカキ	Cleyera japonica Thunb.
112	S R-1	В3	部材	スギ	Cryptomeria japonica D.Don
99	S R-1	4 B	用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
109	S R-1	4 B	用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
106	S R-1		用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
95	S R-1		用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl'.
104	S R-1		用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
98	S R-1		用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
欠番	S R-1			不明	
84	S R-1	 	用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
94	S R-1	3 A	匙子形	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
91	S R-1	2 B	木錘	ヤブツバキ	Cammellia japonica L.
100	S R-1	2 B	用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
102	S R-1	2 B	下駄	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
81	S R-1	2 B	斎串	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
88	S R-1	3 B	曲物	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
83	S R-1	3 B	斎串	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
105	S R-1	3 B	用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
89	S R-1	3 B	曲物	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
未掲載	S R-1	4 B	用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
96	S R-1	4 B	用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.

<sup>(</sup>註) 1.分析作業の過程より、表中のNoは乱れている。なおNoは本報告の掲載番号に対応する。 2.欠番・未掲載のものが一部ある。

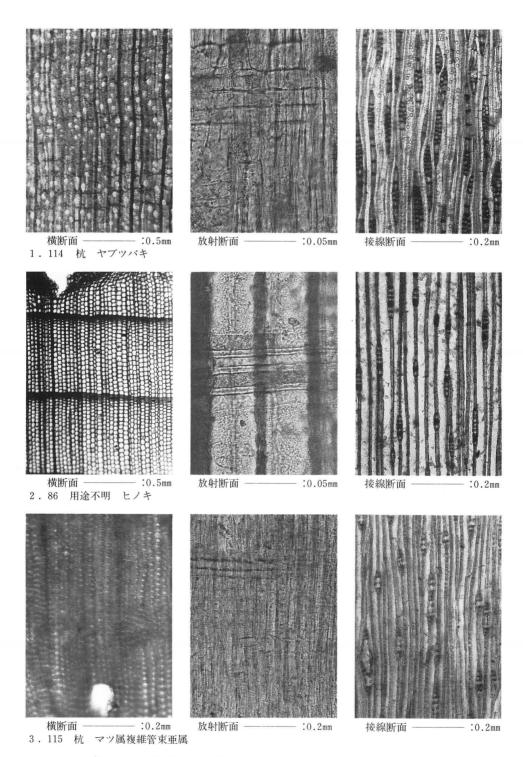
## 久米窪田森元遺跡 3 次調査地 樹種一覧 (2)

No.	層	グリッド	器 種	分類群 (和名	/ 学名)
85	S R-1	4 B	鳥形(?)	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
93	S R-1	2 C	(鳴)鏑(?)	ウツギ属	Deutzia
87	S R-1	2 C	曲物	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
103	S R-1	2 C	下駄	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
未掲載	S R-1	2 C	用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
未掲載	S R-1	2 C	用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
118	S R-1	2 B	建築部材	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
108	S R-1	南北東ベルト	建築部材	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
107	S R-1	南北東ベルト	用途不明	モミ属	Abies
82	S R-1	南北東ベルト	形しろ	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
101	S R-1	南北東ベルト	用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
未掲載	S R-1	東トレンチ	曲物	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
121	S R-2	3 B	用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
未掲載	S R-2	3 B	用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
124	S R-2	3 A	下駄	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
123	S R-2	3 B	曲物	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
125	S R-2	4 B	杭(?)	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen.Cyclobalanopsis
120	S R-2	4 B	用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
119	S R-2	3 A	斎串	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
未掲載	S R-1	2 C	用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
90	S R-1	2 C	曲物	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
126	S D-1		用途不明(弓?)	ヤブツバキ	Cammellia japonica L.
未掲載	S R-2	3 B	用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
未掲載	S R-2	3 B	用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
未掲載	S R-2	3 B	用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.

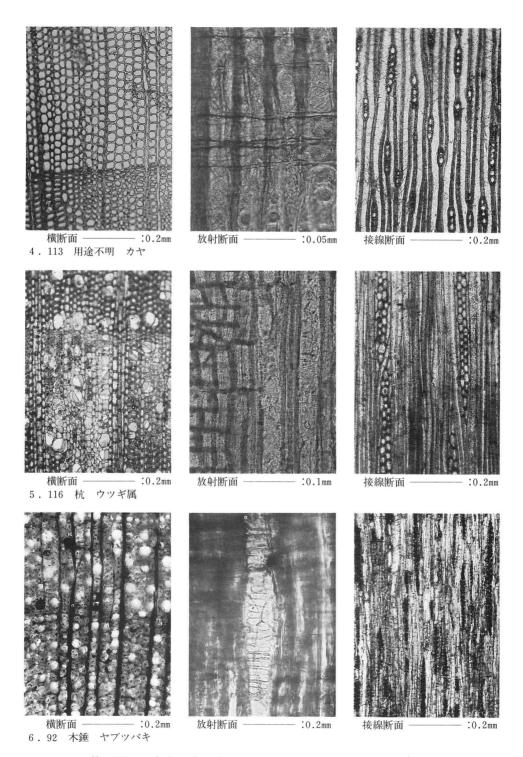
表30 来住廃寺18次調査地 樹種一覧

No.	区	グリッド	器 種	分類群 (和名	/ 学名)
54	1	7-C	用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
71	1	C 1	木錘	ヒノキ科	Cupressaceae
70	1	C 2	用途不明	ヒノキ	Chamaecyparis obtusa Endl.
	1	C 2	杭 1	アサダ	Ostrya japonica Sarg.
	1	C 2	杭 2	ヤナギ属	Salix
	1	C 2	杭 3	ヤブツバキ	Cammellia japonica L.
	1	В2	杭 4	ヤブツバキ	Cammellia japonica L.
	1	В3	杭 5	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen.Diploxylon
	1	В3	杭 6	サクラ属	Prunus
	1	В3	杭 7	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen.Diploxylon
	1	В3	杭 8	サクラ属	Prunus
	1	4 B	杭 9	ブナ属	Fagus
	1	4 B	杭 10	シロダモ	Neolitsea sericea Koidz.
	1		杭 11	スダジイ	Castanopsis sieboldii llatusima
	1		杭 12	スダジイ	Castanopsis sieboldii llatusima
	1	*****	杭 13	スダジイ	Castanopsis sieboldii llatusima
	1		杭 14	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen.Cyclobalanopsis
	1		杭 15	ヒサカキ属	Eurya
	1		杭 16	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen.Diploxylon
	1		杭 17	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen.Diploxylon
	1	3 A	杭 18	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen.Diploxylon
	1	2 B	杭 19	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen.Diploxylon
	1	2 B	杭 20	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen.Diploxylon
ļ	1	2 B	杭 24	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen.Diploxylon
	1	2 B	杭 23	シロダモ	Neolitsea sericea Koidz.
	2	3 B	杭 26	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen.Diploxylon
	2	3 B	杭 27	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen.Diploxylon
	2	3 B	杭 28	シロダモ	Neolitsea sericea Koidz.

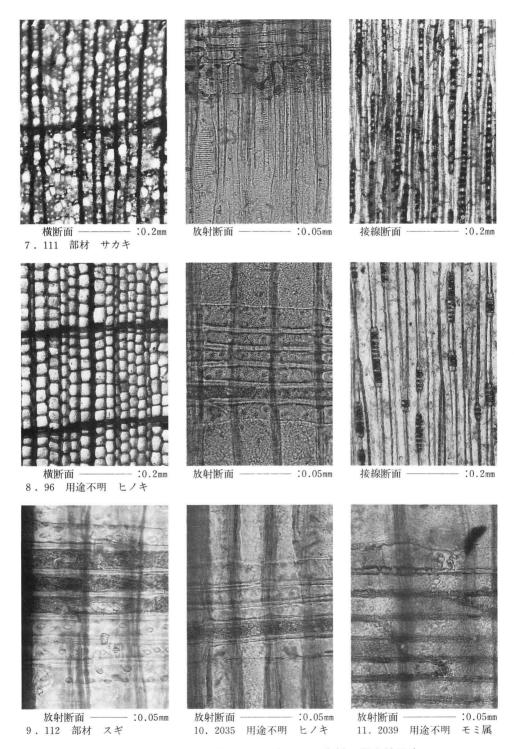
<sup>(</sup>註) 1.杭のNo.(器種の欄)は、第5図第Ⅲ層上面木杭検出状況の番号に対応する。



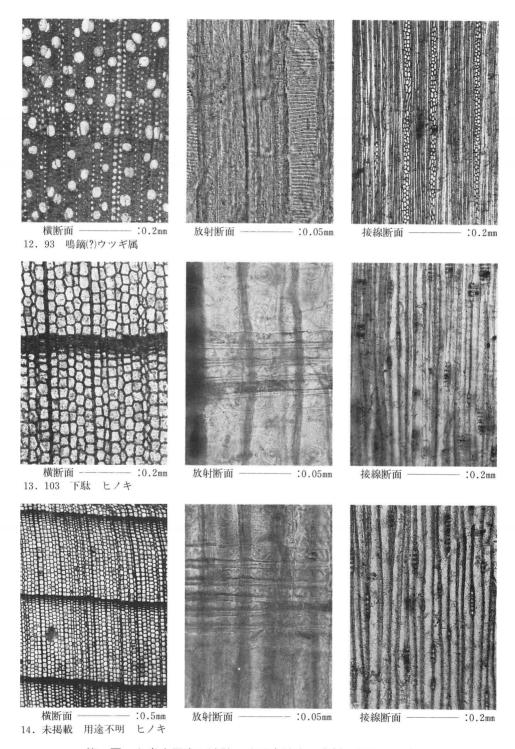
第64図 久米窪田森元遺跡 3 次調査地出土木材 顕微鏡写真 I



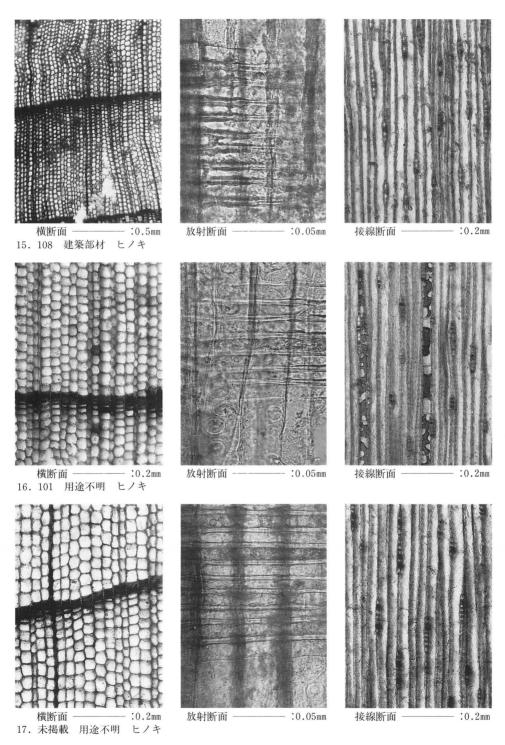
第65図 久米窪田森元遺跡 3 次調査地出土木材 顕微鏡写真 II



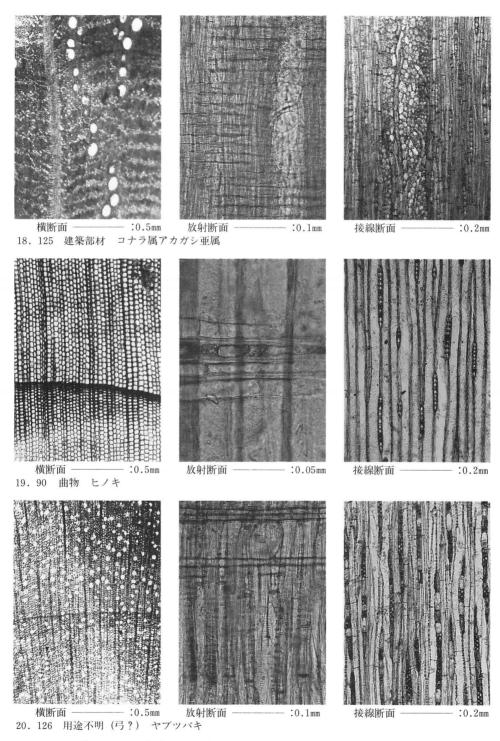
第66図 久米窪田森元遺跡 3 次調査地出土木材 顕微鏡写真Ⅲ



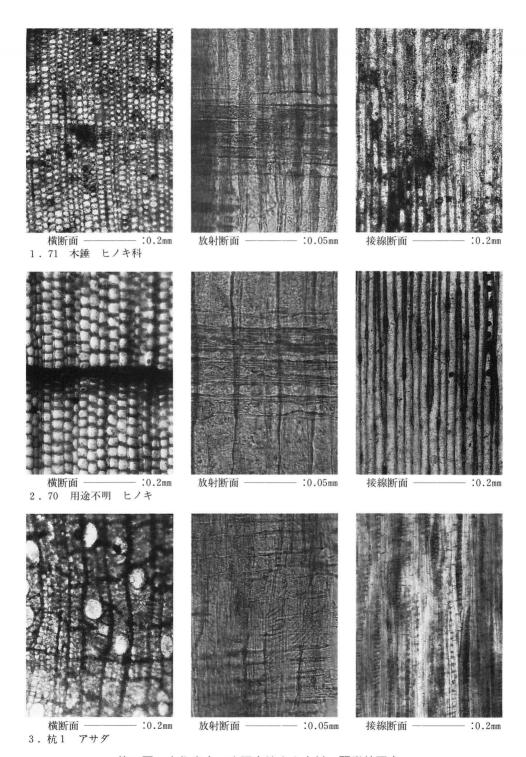
第67図 久米窪田森元遺跡 3 次調査地出土木材 顕微鏡写真Ⅳ



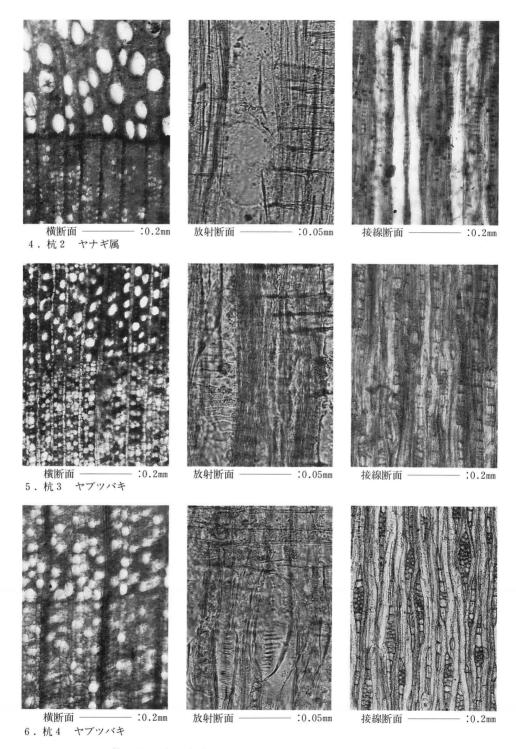
第68図 久米窪田森元遺跡 3 次調査地出土木材 顕微鏡写真 Ⅴ



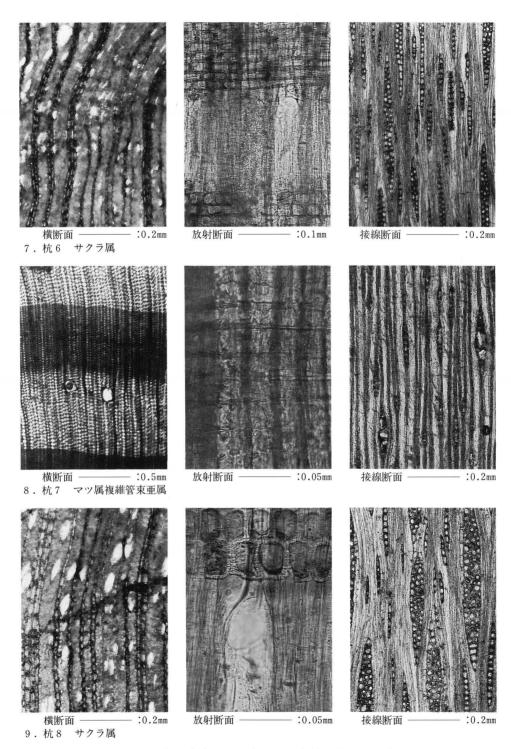
第69図 久米窪田森元遺跡 3 次調査地出土木材 顕微鏡写真 Ⅵ



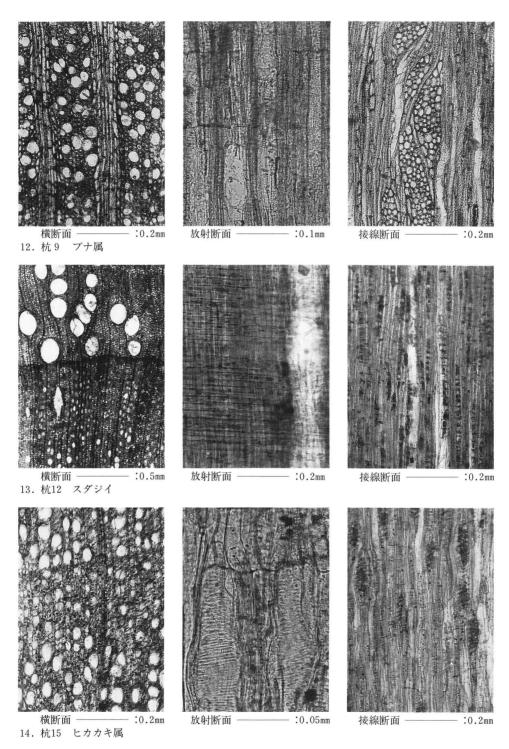
第70回 来住廃寺18次調査地出土木材 顕微鏡写真 I



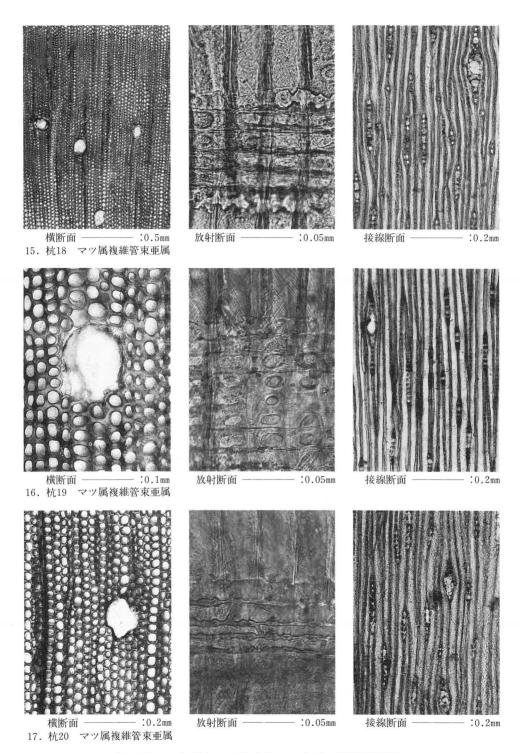
第71図 来住廃寺18次調査地出土木材 顕微鏡写真II



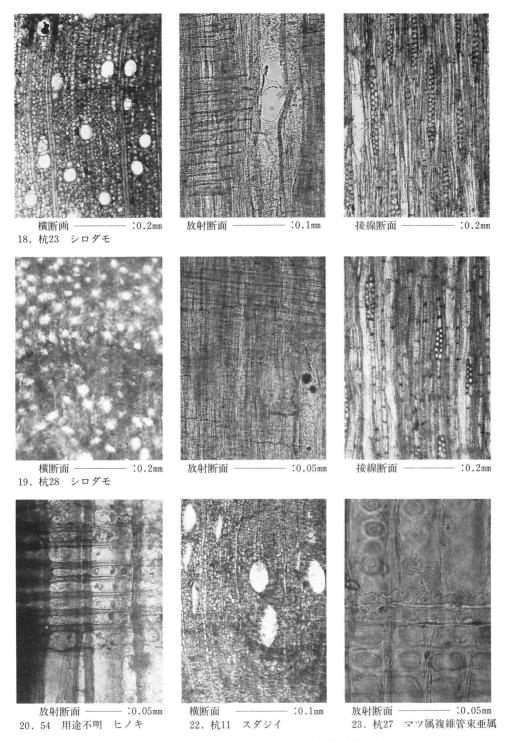
第72図 来住廃寺18次調査地出土木材 顕微鏡写真Ⅲ



第73図 来住廃寺18次調査地出土木材 顕微鏡写真Ⅳ



第74図 来住廃寺18次調査地出土木材 顕微鏡写真 V



第75図 来住廃寺18次調査地出土木材 顕微鏡写真Ⅵ

# 5-2 久米窪田森元遺跡 3 次調査地の植物珪酸体分析

#### はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO2) が蓄積したものであり、植物が枯れた後も微化石 (プラント・オパール) となって土壌中に半永久的に残っている。この微化石は植物により様々な形態的特徴を持っていることから、土壌中から検出してその組成や量を明らかにすることで過去の植生環境を復元することができる (杉山, 1987)。

久米窪田森元遺跡 3 次調査地では、奈良時代や弥生時代後期およびそれ以前の遺構・遺物が検出された。そこで各時期の試料について植物珪酸体分析を実施し、イネ科栽培植物の検討および遺跡周辺の古植生・古環境の推定を試みた。

# 2. 試 料

調査地点はA地点とB地点である。A地点では、SR1の下層から第IX層までの各層について 7点が採取された。B地点では、第V-3層から第IX層までの各層について 7点が採取された。試料数は計14点である。なお、試料採集地点(A地点・B地点)は第40図に示す。

# 3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾 (105℃・24時間)
- 2) 試料1gを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40μm、約0.02g)※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散 (300w・42KHz・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子 (20 μm以下) 除去、乾燥
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成
- 7)検鏡・計数

同定は、機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。 計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精 査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビー ズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位 :  $10^{-5}\,\mathrm{g}$ ) をかけて、単位面積で層厚 1 cmあたりの植物体生産量を算

出した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキの値を用いた。その値はそれぞれ2.94(種実重は1.03)、6.31、1.24である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は0.48、クマザサ属は0.75である。

# 4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表31、表32および第76図、第77図に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。(第78図~82図)

#### 〔イネ科〕

イネ、イネの籾殻(穎の表皮細胞)、ヨシ属、ウシクサ族(ススキ属やチガヤ属など)、キビ族型、ウシクサ族型、ウシクサ族型(大型)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型(おもにクマザサ属)、メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、未分類のタケ亜科、表皮毛起源、棒状珪酸体、茎部起源、地下茎部起源、未分類等「樹木〕

ブナ科―シイ属、クスノキ科 (バリバリノキ?)、その他

### (I) A地点 (第76図)

SR1の下層から第IX層までの各層について分析を行った。

その結果、最下位の第IX層(砂礫層、試料 7)ではネザサ節型が少量検出されたが、その他の分類群はあまり見られなかった。弥生時代後期以前とされる第VII-①層(試料 6)ではネザサ節型が増加し、ウシクサ族(ススキ属など)やクマザサ属型なども見られた。また、ブナ科一シイ属やクスノキ科(バリバリノキ ?)などの照葉樹に由来する植物珪酸体も検出された。ネザサ節型は第VI層(試料 5)では減少しているが、第V-②層(試料 4)では再び増加している。また、第VI層より上位ではヨシ属が検出され、第V層では棒状珪酸体が大幅に増加している。

弥生時代後期とされる第Ⅳ層(試料2)では、ネザサ節型が大幅に増加しており、密度は11万個/g以上にも達している。また、ヨシ属も増加しておりウシクサ族(ススキ属など)やクマザサ属型なども少量見られた。

奈良時代とされる S R 1の下層では、ネザサ節型は減少しているが密度は 6 万個/g以上と依然として高い値である。また、同層ではイネやイネの籾殻(穎の表皮細胞)に由来する珪酸体も検出された。

おもな分類群の植物体量の推定値(表32)によると、おおむねネザサ節型が卓越しているが、第Ⅳ層や第Ⅴ-①層などではヨシ属も多くなっていることが分かる。

#### (2) B地点(第77図)

第 V - ③層から第 IX層までの各層について分析を行った。これらの各層はいずれも弥生時代 後期以前の堆積とされている。

分析の結果、最下位の第 IX層(砂礫層、試料14)では、ネザサ節型が比較的多く検出され、 ヨシ属やウシクサ族(ススキ属など)も少量検出された。第 III層(試料13)でもほぼ同様の 結果であったが、同層ではブナ科─シイ属も見られた。

おもな分類群の植物体量の推定値(表32)によると、おおむねネザサ節型が卓越しているが、第Ⅳ層ではヨシ属が優勢になっていることが分かる。

# 5. 考 察

#### (1) イネ科栽培植物の検討

A地点のSR1の下層(試料1、奈良時代)では、イネが3,300個/gと比較的高い密度で 検出され、イネの籾殻(穎の表皮細胞)に由来する珪酸体も検出された。これらのことから、 同層の時期には遺跡周辺で稲作が行われていたものと推定される。

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族(ムギ類が含まれる)、キビ族(ヒエやアワ、キビなどが含まれる)、オヒシバ属(シコクビエが含まれる)、トウモロコシ属、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)などがあるが、これらの分類群は検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に 由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明につい ては今後の課題としたい。

#### (2) 古植生・古環境の推定

分析結果から、久米窪田森元遺跡における堆積当時の植生や環境について推定すると次のようである。

第IX層 (礫層) の堆積当時は、ネザサ節を主体とするイネ科植生であったものと考えられるが、河川の影響などなんらかの原因でその他のイネ科植物の生育にはあまり適さない環境で

あったものと推定される。

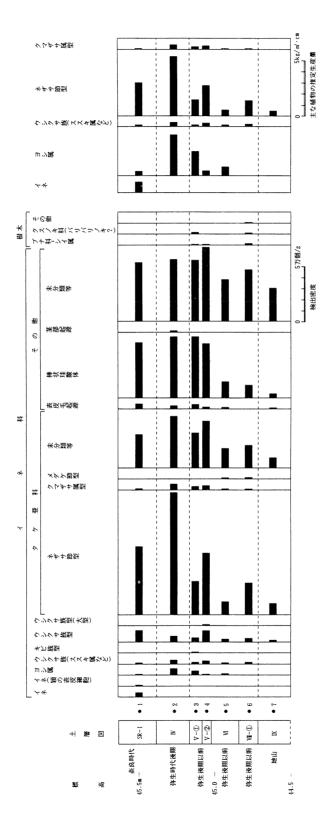
弥生時代後期以前とされる第Ⅲ層~第 V 層の堆積当時は、ネザサ節を主体としてススキ属やクマザサ属なども生育するイネ科植生が継続されていたものと考えられ、とくに第Ⅲ-③層や第 V-③層などの堆積当時はネザサ節の生育が旺盛であったものと推定される。これらの植物は比較的乾いた土壌条件を好むことから、当時は比較的乾いた土壌条件で推移したものと推定される。なお、この時期には遺跡周辺などでシイ属やクスノキ科(バリバリノキ?)などの照葉樹も見られたものと考えられる。

弥生時代後期とされる第Ⅳ層の堆積当時は、ネザサ節が繁茂するイネ科植生であり、周辺などではヨシ属も比較的多くみられたものと推定される。奈良時代とされるSR1の下層の堆積時期もネザサ節が多くみられたと考えられるが、この時期には遺跡周辺などで稲作が行われていたものと推定される。

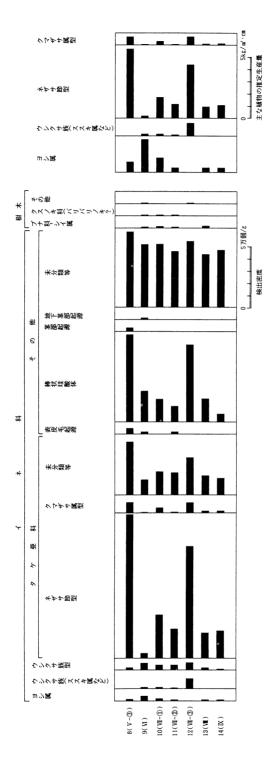
ネザサ節やススキ属などのイネ科植物には、その有用性から燃料や道具、住居の屋根材や 建築材、敷物などとして盛んに利用されていたものと考えられる。特に笹類は鹿などの草食 動物の食料としても重要であったものと考えられる。

### 参考文献

- 杉山真二 (1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点。植生史研究、第2号: p.27-37
- 杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体,富士竹類植物園報告、第31号:p.70-83.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) ―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量 分析法―. 考古学と自然科学、9: p.15-29.
- 藤原宏志 (1979) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (3) ―福岡・板付遺跡 (夜臼式) 水田および群馬・日高遺跡 (弥生時代) 水田におけるイネ (O.sativa L.) 生産総量の推定―. 考古学と自然科学、12: p.29-41.
- 近藤錬三・ピアスン友子 (1981) 樹木葉のケイ酸体に関する研究 (第2報) —双子葉被子植物樹木葉の植物 ケイ酸体について—. 帯広畜産大学研究報、12: p.217-229.



第76図 久米窪田森元遺跡3次調査地A地点における植物珪酸体分析結果



第77図 久米窪田森元遺跡3次調査地B地点における植物珪酸体分析結果※すべて弥生時代後期以前の堆積物

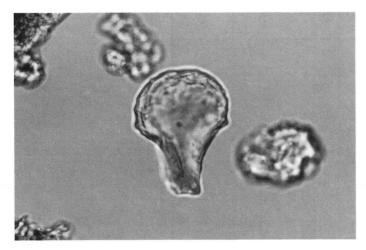
表31 久米窪田森元遺跡3次調査地の植物珪酸体分析結果	地の植	物珪酸	体分析	結果								(単位	(単位:×100個/	(8/則
			A	型型	祖					В	州	<b>1</b> ∏{		
分類 群	П	2	က	4	2	9	7	8	6	10	11	12	13	14
<b> </b>														
**	33													
イネ籾殻 (穎の表皮細胞)	7													
国ショ	7	29	34	7	13			14	44	20	7		7	7
ウシクサ族 (ススキ属など)	13	36	14	30	13	20			12	13	7	82		
キビ族型	! ! !	! ! ! !	7		1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1								
ウシクサ族型	107	53	41	104	27	33	21	21	62	46	44	09	21	7
ウシクサ族型 (大型)				7										
タケ亜科	1 1 1 1 1 1			; ; ; ; ;	! ! ! !									
ネザサ節型	979	1119	310	570	126	299	104	1183	44	359	241	917	207	224
クマザサ属型	13	53	34	44	13	13		92	9	46	7	89	14	21
メダケ節型					7	13								
未分類等	313	485	323	437	180	206	26	437	125	196	183	306	164	140
その他のイネ科														
表皮毛起源	53	30	41	15	13		7	49	19		22			
棒状珪酸体	520	574	578	503	153	120	42	718	256	189	132	626	193	20
茎部起源		18						28						
地下茎部起源									12					
未分類等	540	268	564	681	379	472	305	620	517	521	460	544	436	468
樹木起源				 										
ブナ科-シイ属			7	7		13			9	13	7		21	
クスノキ科(バリバリノキ?)			14			7			9	7	7			
かの街						7			9			2		
植物珪酸体総数	2232	2995	1968	2406	925	1202	575	3162	1116	1408	1118	2630	1064	937

表32 人木洼田森兀遺跡3次調宜地の王な分類群の植物体重の推定値	宣地の王	な分類	群の種	物体重	この雅力	三個						(単位	(単位:kg/m²•cm)	12 • cm)
			A	A地点	4116					В	B 居 点	41		
分類 群	1	2	ಣ	4	5	1 2 3 4 5 6	7	∞	6	10	=	12	9 10 11 12 13	14
イネ科														
*	0.98													
国へE	0.42	3.73	0.42 3.73 2.17 0.47 0.84	0.47	0.84			0.89	2.75	0.89 2.75 1.23 0.46	0.46		0.45 0.44	0.44
ウシクサ族(ススキ属など)	0.17	0.44	0.44 0.17 0.37 0.16	0.37		0.25			0.15	0.16	0.09	1.02		
タケ亜科	1				; ; ;	, , , , ,								
ネザサ節型	3.01	5.37	1.49	2.74	0.61	1.43	3.01 5.37 1.49 2.74 0.61 1.43 0.50	5.68	0.21	1.72	1.16	4.40	0.21 1.72 1.16 4.40 0.99 1.07	1.07
クマザサ属	0.10	0.40	0.40 0.26 0.33	0.33	0.10	0.10		0.69	0.05	0.34	0.05	0.67	0.69 0.05 0.34 0.05 0.67 0.11 0.16	0.16

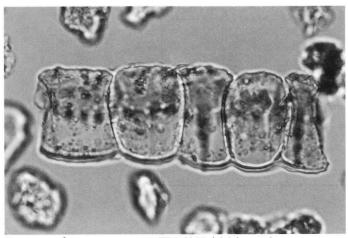
※表31の値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数をかけて算出。



1. イネ A 地点

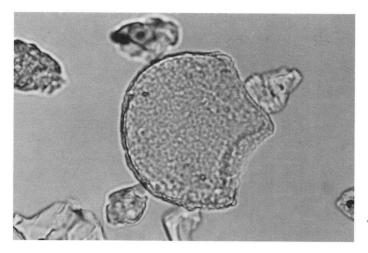


 イネ A 地点

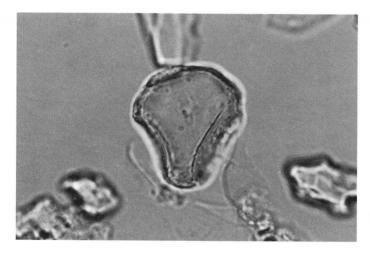


第78図 プラント・オパール顕微鏡写真(1)(400倍)

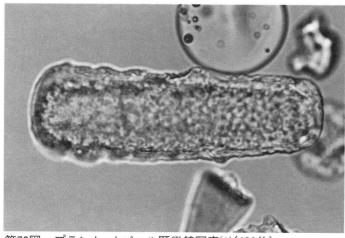
 イネ A 地点



4. ヨシ属 A 地点

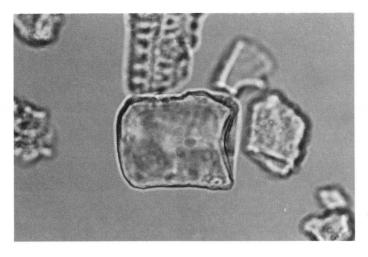


 ウシクサ族(ススキ属など) A 地点

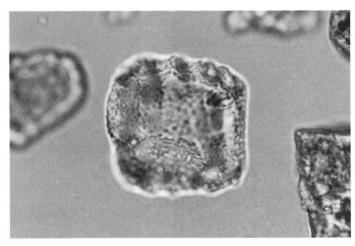


第79図 プラント・オパール顕微鏡写真(2)(400倍)

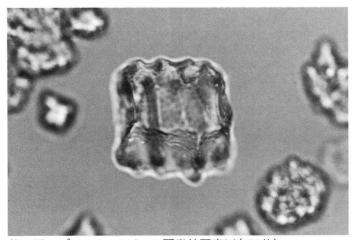
6. キビ族型 A 地点



 7. ウシクサ族型 A 地点

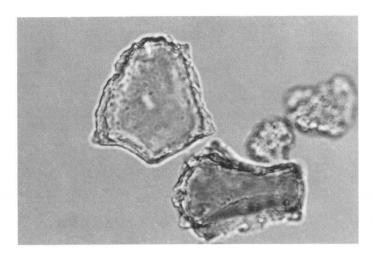


8. ネザサ節型 B 地点

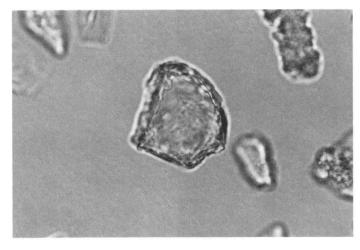


第80図 プラント・オパール顕微鏡写真(3)(400倍)

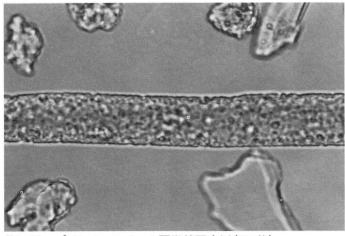
9. ネザサ節型 B 地点



10. クマザサ属型 A 地点

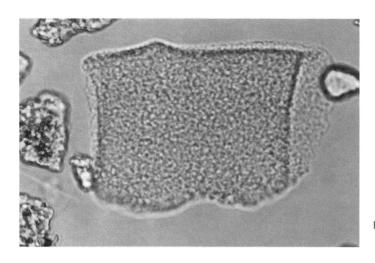


II. クマザサ属型A 地点

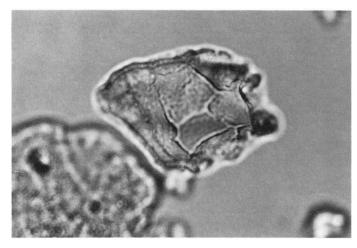


第81図 プラント・オパール顕微鏡写真(4)(400倍)

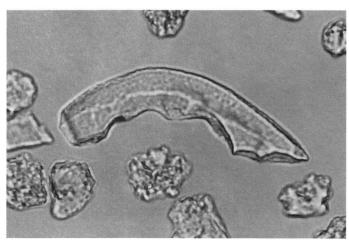
12. 棒状珪酸体 A 地点



13. イネ科の茎部起源 A 地点



14. ブナ科―シイ属B 地点



第82図 プラント・オパール顕微鏡写真(5)(400倍)

15. クスノキ科(バリバリノキ?)A 地点

# 第6章 調査の成果と課題

本刊では、来住廃寺18・20次、久米窪田森元遺跡 3 次の 3 遺跡について報告を行った。 3 遺跡は、来住台地の弥生時代及び古代の集落構造を考える上で注目される資料となった。

#### 弥生時代

来住廃寺20次検出の溝SD1は、検出地点や断面形、出土遺物より、来住V遺跡の第1・ 2環濠とされた溝と同一遺構であると思われる(今回は、1ないし2号環濠のどちらになる かは特定できなかった。継続調査中)。また、来住廃寺14次、同15次、同18次出土の弥生前期 土器は20次SD1とほぼ同じ時期のものであると思われる。これ等は、来住廃寺周辺に広く、 前期末の集落が展開していたことを示す資料であり、未検出の住居址は来住廃寺西~南西部 に存在することを示唆するものである。

今回の報告中にもあるが、近年来住台地上では、外来系の土器が数点出土している。来住廃寺14 次調査では周防地域の土器が、来住廃寺15・18次調査では愛媛県西部の南予から高知県西部に分布 する所謂土佐型甕が出土している。いずれも、胎土・焼成は共伴する土器とは異なるため、搬入品 と思われるものである。同地域との時間的併行関係や交流が知れる資料として重要な資料である。

明確に文字を読みとることは困難であったが、久米窪田森元遺跡 3 次 S R 1 出土の木簡状木製品は特筆されるものである。 S R 1 は、木簡状木製品の他、多くの種子や木製品を出土しており、古代の来住台地の植生、さらには土地利用からの集落経営が分析される資料である。 S R 1 は、

調査区の東西に継続する溝であり、今後の周辺調査は大いに重要視されるところである。

#### 植生復元

古代

久米窪田森元遺跡 3 次調査地では比較分析も含め幾つかの自然科学的分析を行った。来住台地における集落経営の変化や土地利用の変化を遺構の検出以外に自然科学を用いることで明らかにしようという考えからである。木製品や種子といった目に見える遺物以外にも、時期特定が可能な遺構についてはその埋土を分析することで植生の復元は可能である。今後、継続的な分析作業が実施されれば将来的に集落分析の重要な資料となるものであろう。

来住台地の集落経営は、現在の国道11号線バイパスを1つの南限としていることが、本報告の2遺跡、また既存の調査資料により明らかになりつつある。そして自然地形も、これを境に大きく下向し、集落境と同調するのである。よって、弥生時代から中世の来住地域の居住は、台地上を主に展開していたものと思われる。今後は、古代寺院及び官衙遺構建設以前、以後の居住域の変化過程を明らかにすることが望まれることである。なお、来住台地の弥生時代と中世の資料充実のため、巻末に付論を掲載した。

# (付論1) 来住廃寺14次調査地出土の弥生土器

梅木謙一

### はじめに

来住廃寺14次調査は、平成2年度の来住廃寺寺域確認調査として実施された。本調査については、平成3年3月に『来住廃寺―平成2年度調査概報―』として既に報告がなされているものである。

本稿では、その際未報告となった弥生時代前期土器について資料の追加報告を行い、来住台地における弥生時代資料の充実につとめようとするものである。

# [1]調查概要

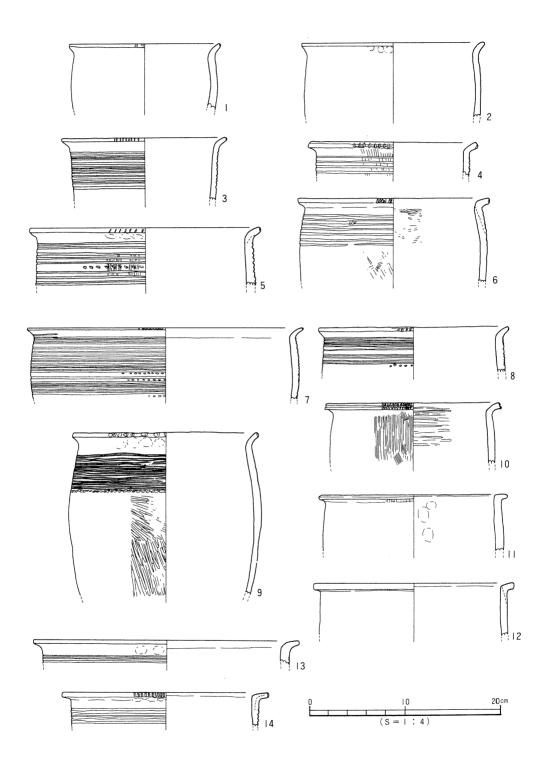
調査地は、来住廃寺(白鳳時代寺院跡) 塔址の北西50mに位置する。また、近年、大規模な回廊状遺構が検出されているが、この東側回廊の西20m(回廊内)の地点である。調査では、6世紀後半から7世紀代の遺構が検出されている。本稿で取り上げる弥生時代遺物は、B地区の北側、7世紀代の遺構が切る遺物包含層中より出土している。この層からは、弥生時代前期末に比定される土器片が多量に出土し、異なる時期のものはわずかにみられる量であり、前期末の土器相を知るには良好な資料であるといえるものである。

# 〔2〕出土資料

遺物包含層より出土した弥生時代前期末の土器には、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、蓋形土器、ミニチュア品がある。個体識別ができるものとしては、173点の資料が得られた。以下、器種ごとに資料を提示し、器形や施文等について整理を行い、出土土器相の分析を試みる。なお、その土器についての詳細は文末に観察表を付載したので参照していただきたい。

#### 1. 甕形土器 (第83~85図1~35、図版42)

Ⅰ)折り曲げ口縁( I ~I 4) 折り曲げることにより口縁部を成形するものである。 膨らみをもつ胴部に、屈曲・屈折する口縁部をもつもので、折り曲げが弱いもの(1~10)と折り曲げが強く「L」字状を呈するもの(11~14)がみられる。口縁端面には、刻目をもつもの(1・3~10・14)と刻目をもたないもの(2・11~13)がある。なお、10は端面に沈線文を施した後に刻目を施している。胴部文様は、無文のもの(1・2~11・12)、ヘラ描き沈線文だけのもの(3・4)、沈線文と刺突文が組みあうもの(5・7~9)の三種がある。5は2ヶの刺突文が1組みられるが、施文であるかは確かでない。8は沈線文帯が上下二段となり空白部分に刺突文が施されてもよいものである。



第83図 包含層出土遺物実測図(1)

2) 貼り付け口縁( $15\sim24$ ) 粘土紐を貼り付けることで口縁部を成形するものである。 外面上端に接するもの( $15\sim22$ )と、口縁端部よりやや下る位置にあるもの( $23\sim25$ )とがある。

前者 (15~25) は、口縁部の断面形が三角形状を呈するものである。口縁端面は、刻目をもつもの  $(15\cdot16$ 、19~22) と刻目をもたないもの  $(17\cdot18)$  がある。20は指頭押圧後、さらに刺突文を加えるものである。21は、20と同じ技法が口縁部内端にも施されるものである。胴部は、無文のもの (15)、ヘラ描き沈線文帯だけのもの (16~19)、沈線文帯と刺突文が組み合うもの (20) がある。

後者の口縁端部より下に凸帯をもつもの (23~25) では、凸帯上に刻目をもつもの (25・26) と刻目をもたないもの (23) がある。23は、口縁端部が面取りされる。25は、口縁端面に指頭押圧後さらに刺突文が施される。凸帯下位には、ヘラ描き沈線文が 1 条看取される。24は、口縁端部を欠損するものである。

3)鉢形土器になる可能性もあるものである(26~29)。

口径は大きく、器壁が厚く、口縁部の粘土紐も大きいものであり、甕形土器 1~25とは異なる様相を呈しているものである。胴部への加飾は施されないものである。

4) 胴部片(30~35)

30は口縁部下に2条のヘラ描き沈線文を施すものである。31は口縁部を欠損している。ヘラ描き沈線文の間に山形文を施すものである。32は、31と同じ表現であるが山形文は2条1組の工具で施されている。33は沈線文間に竹管文が施されるものである。34はヨコ方向後タテ方向の沈線文を施し、格子目文をするものである。35はヨコ方向後、タテ方向と竹管文が組み合うものである。

- 2. 帝形土器 (第86~91図、図版43・44)
  - Ⅰ) 大型品(36~38)

36~38は、口径が30cmを越える大型品である。短く外反する口縁部をもつ。口縁部内面には凸帯、頸部外面にはヘラ描き沈線文を4条もつ。また、口縁端面にもヘラ描き沈線文をもち、36では刻目を施す。

2)内傾する頸部に、短く外反する口縁部をもつものである(39~43)。

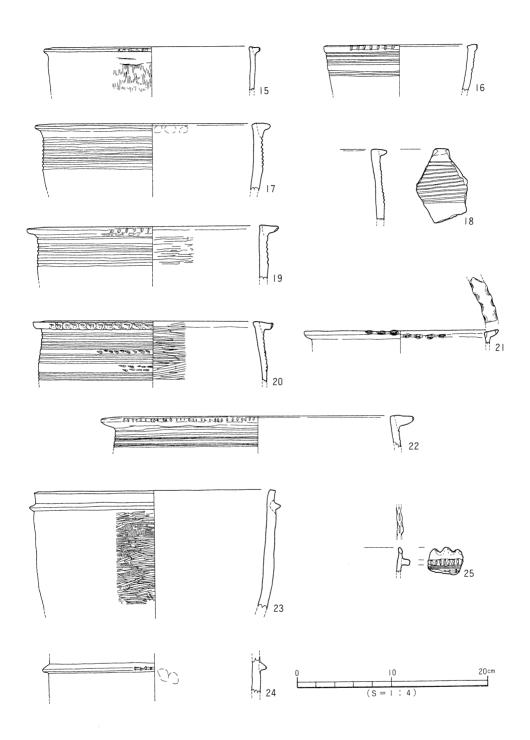
39は肩部が強く張るものと思われるものである。39~42の頸部にはヘラ描き沈線文が2~4条施される。43はやや異形となるものである。

3) 短い口頸部をもつものである(44)。

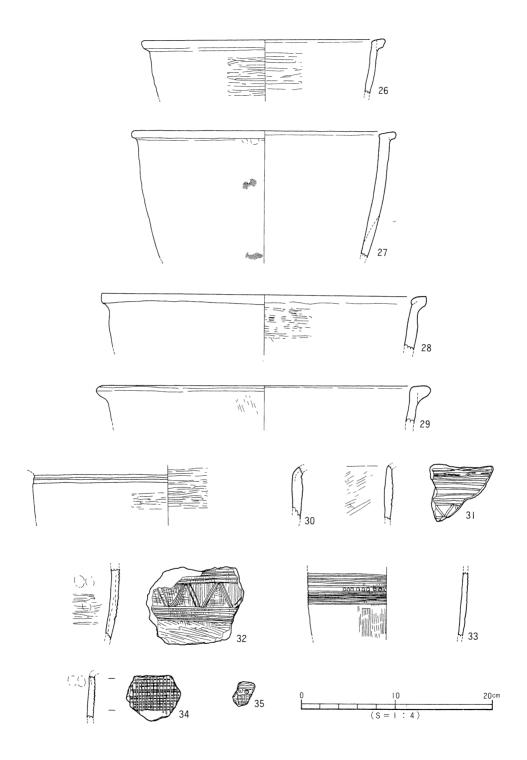
44はわずかに外反する口縁部をもつもので、胴部は長胴になるものである。

4)太くやや長い口頸部をもつものである(45~50)。

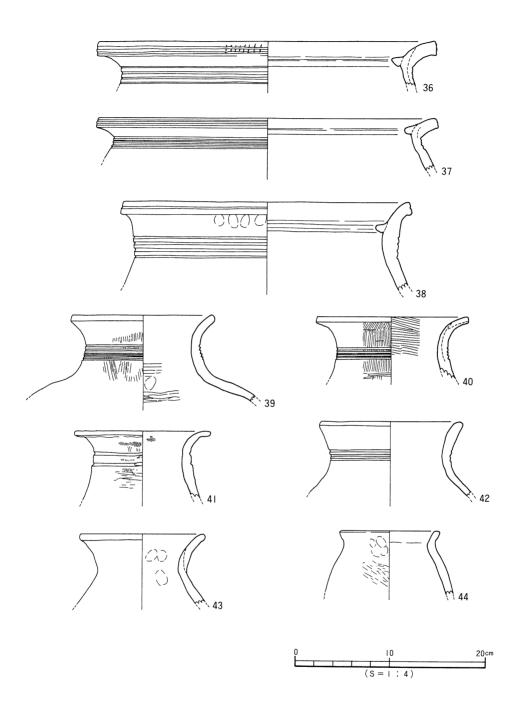
頸部は直立ないしやや外傾となる。45・46はヘラ描き沈線文が頸部上位まで施される。



第84図 包含層出土遺物実測図(2)



第85図 包含層出土遺物実測図 (3)



第86図 包含層出土遺物実測図 (4)

47・48は頸部下位にヘラ描き沈線文が施されるものである。50は口縁端面の上下端部に刻目をもつものである。49は口縁端面に沈線文を施した後に、さらに刻目を施すものである。51は頸部下位に刺突文をもつものである。

5)39~50のようにロ頸部が著しく(長く)発達しない形態をとる壺形土器の胴部片である(52~57)。

52は肩部が張るもので、貼り付け凸帯と小さい棒状浮文をもつ。53は球形を呈する胴部で、 頸部にヘラ描き沈線文を4条以上もつ。55は直立ぎみの頸部に丸みのある胴部をもつもので ある。頸部下位は板状工具の押圧により段が形成される。54は頸部が太いもので、頸部下位 にヘラ描き沈線文2条と刺突文をもつ。56・57は、球形の胴部を呈するもので、56は頸部内 面に明確な稜、57は頸部下位にヘラ描き沈線文を1条以上もつものである。

6) 筒状の長い口頸部をもつものである (58~76)。

58~61は、口径が15cm程で、中型品でもやや小さい法量のものである。58・59・61には口縁内面に凸帯をもち、58・61は凸帯は全周せず一部が注口状になるものである。頸部は沈線文と凸帯が施され、59は凸帯上を指頭押圧、61は指頭押圧後さらに上下二段に刺突文が施される。61の頸部凸帯は2条であるか、幅広の1条の凸帯であるかは判断が難しいものである。

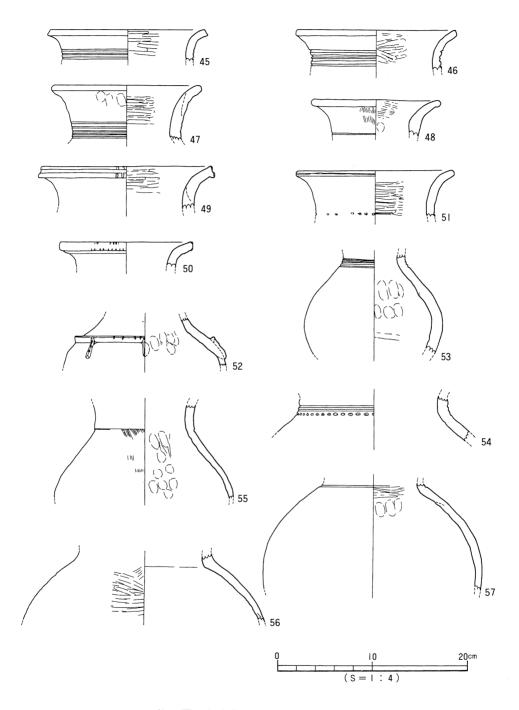
62~69は、口径が20~25cmで、中型品でも大きい法量のものである。長い口頸部は、外傾度が強くなる。口縁内面には、66・67を除き凸帯が施される。内面凸帯では、2条の凸帯をもつもの(64)や、凸帯上に刻目をもつもの(63~65)がある。62は頸部にヘラ描き沈線文と凸帯を施す。加えて、耳状の浮文を貼り付け、浮文上にヨコ方向の刻目を施す。凸帯上には、指頭押圧により刻目が施される。63・67・69は頸部にヘラ描き沈線文を施し、67では沈線文間に刺突文を施す。65・66は口縁端面にヨコ沈線文後刻目を施す。

69~73・75・76は頸部片である。69~71は内面に凸帯があり、69・70では凸帯は全周しない。さらに、70では内面凸帯上面に竹管文を3列施す。69・71は頸部にヘラ描き沈線文、70では指頭押圧の凸帯を施す。72~76は頸部下半にヘラ描き沈線文と凸帯を施す。凸帯上は指頭押圧し、さらに押圧内に刺突文を73では $1_{\tau}$ 、72・75では上下2段に施す。

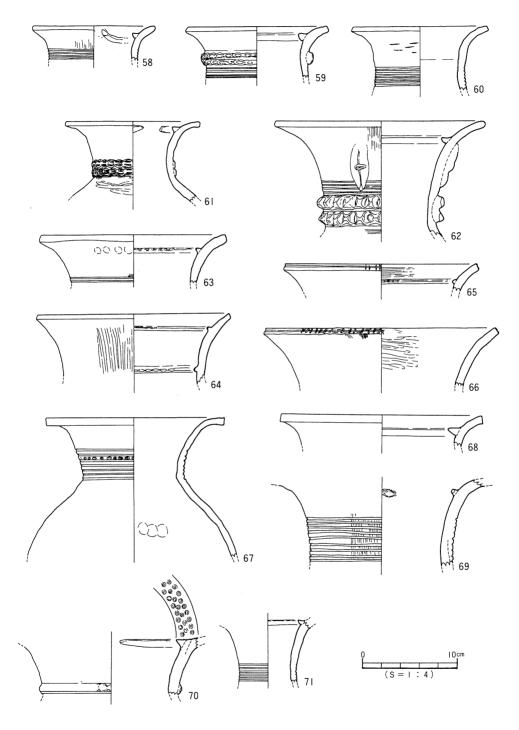
74は頸~胴部片である。頸部下端と胴部最大径に凸帯を施す。凸帯は幅広のものと思われ、中央にへう描きによるヨコ方向の沈線文を施したのち、上下段に指頭押圧し、さらに押圧内に上下2段の刺突文を施す。

7) 長い口頸部をもつ壺形土器の胴部片である(77~90)。

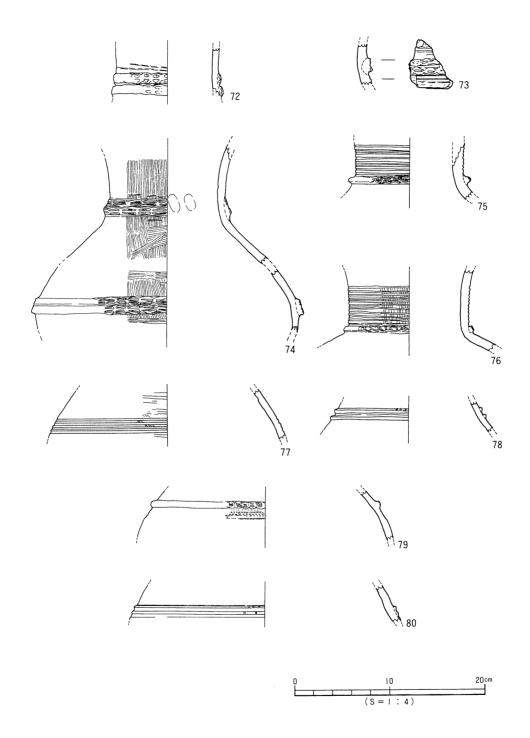
77~80は、肩部に施文するものである。77はヘラ描き沈線文、78・80は凸帯、79は凸帯と 貝殻腹縁による沈線文が施されるものである。78は2条の凸帯のうち上側の凸帯に限り刻目 を施す。79は、凸帯上は指頭押圧後刺突文を上下2段に施す。



第87図 包含層出土遺物実測図(5)



第88図 包含層出土遺物実測図 (6)



第89図 包含層出土遺物実測図 (7)

8) 長い口頸部をもつ壺形土器の胴部片で、最大径時に胴中位を中心に幅広く施文されるものである(81~90)。

81は凸帯を2条以上施すものである。82~85は凸帯とヘラ描き沈線文が組み合うものである。凸帯は刻目が施され、84・85は指頭押圧、83は押圧後上下2段に刺突文を施す。

86~88は貝殻腹縁による施文が施されているものである。86はヘラ描き沈線文間に、山形文と斜めの貝殻腹縁による施文がなされる。87は指頭押圧の凸帯と組み合うものである。88は指頭押圧の凸帯とヘラ描き沈線文+貝殻腹縁文が組み合うものである。

89・90はヘラ描き斜格子目が施されるものである。90は指頭押圧の凸帯とヘラ描き沈線文が組み合うものである。

# 9) 壺形土器の胴部小片である。

91は貝殻腹縁による4条以上の弧文をもつ。92はヘラ描き文と貝殻腹縁の弧文が組み合うものである。93は幅広で、断面方形の凸帯上にヨコ・タテ方向のヘラ描き文が施される。94は乳頭状の小さい粘土痕が貼り付けられている。95は文様であるのか、絵画となるのかは判断しがたいものである。ヘラ描きによるヨコ方向とタテ方向の線が組み合うものである。96・97は同形態のもので、ヘラ描きの沈線文は無加飾部が幅広い。

### 10) 搬入品

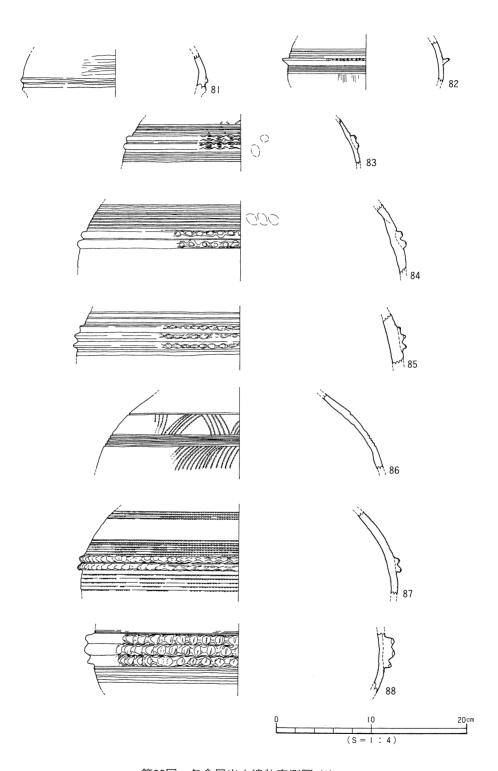
98は肩部が著しく張り、内傾する長い頸部に、外反する口縁部がつくものである。内面には凸帯をもつ。肩部には、貼り付けないし削り出しの幅広凸帯があり、凸帯上には貝殻腹縁による斜格子目が施される。凸帯下位には、貝殻腹縁によるヨコ方向の直線文2条、羽状文2段、ヨコ方向の直線文2条が施される。頸部には、ヘラ描きによる4条の直線文が施される。赤褐色を示し、良好な焼成となる。山口県綾羅木遺跡出土品に類例が多く、周防灘北・西岸部からの搬入品と考えられる。

## 3. 鉢形土器 (第92図)

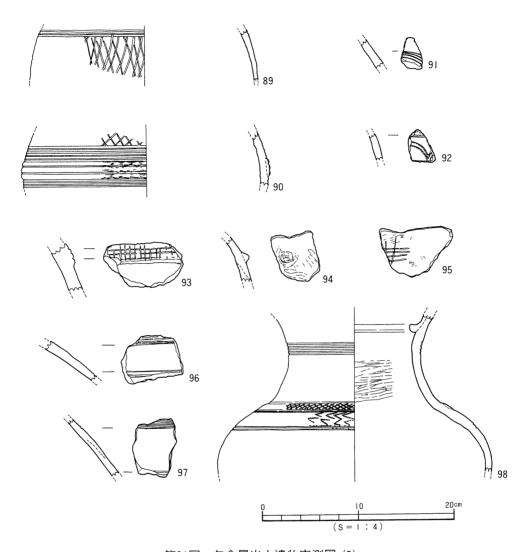
99~101は口径が24~30cmとなり、やや大きい法量をもつものである。口縁部はゆるやかに 外反する。

102は図上復元で器形の全様が判明するものである。口縁部は、貼り付けによる成形技法をとる。

103は口縁部の形状が逆「L」字状となるものである。焼成前の小円孔が1ヶ看取される。 104~107は直口口縁のものである。104は口縁部がわずかに外反(外傾)し、端部は丸く仕上げる。105・106は端部が面取りされる。また、外端部はナデにより小さく突出する。107は 内湾して立ち上がるもので、端部は細く丸く仕上げる。



第90図 包含層出土遺物実測図 (8)



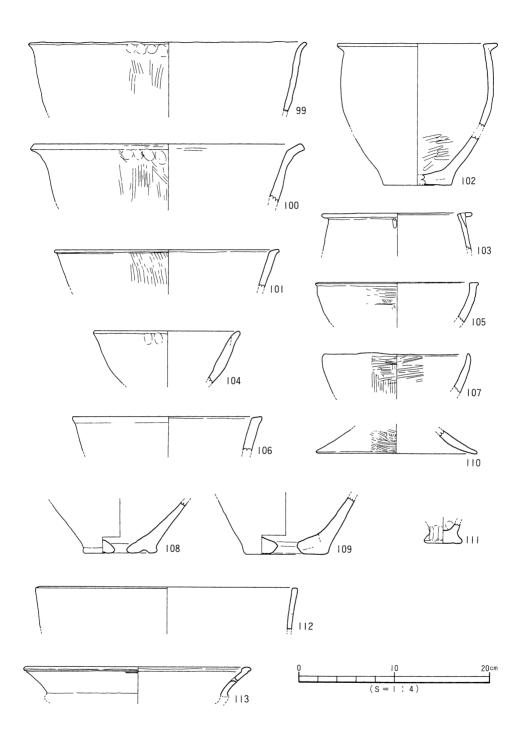
第91図 包含層出土遺物実測図 (9)

# 4. 転用品 (第92図)

108・109は、所謂「コシキ」への転用品である。108は壺形土器、109は甕ないし壺形土器の底部を焼成後に穿孔したものである。

# 5. 蓋形土器 (第92図)

110はゆるやかに開き、端部が細く丸いものである。口径の小さいものに使用されたものであろう。



第92図 包含層出土遺物実測図(10)

#### 6. ミニチュア品 (第92図)

111は平底でくびれる底部となるものである。甕形土器の体部がつくものと思われる。

#### 7. 縄文土器 (第92図)

112・113は縄文時代晩期の土器と思われる。112は角度に若干疑問の残るものである。113は浅鉢の口縁部片で、焼成前の円孔がみられるものである。

# 〔3〕分 析

## 1) 器種と器形

来住廃寺18次調査地出土の弥生時代前期末の土器は、173点が数えられた。各器種の出土量は、甕形土器97点、壺形土器62点、鉢形土器10点、蓋形土器 1 点、その他(ミニチュア等)3点である。また、各器種の構成比は、甕形土器56.1%、壺形土器35.8%、鉢形土器5.8%、蓋形土器0.6%、その他1.7%となる。

甕形土器は半数を占め、壺形土器は30%強となり、この二器種が量的に主要なものとなっていることがわかる。鉢形土器は、個体識別の問題もあるが、若干の増加を考えても10%程度にとどまるものと考えられる。なお、本資料中には高坏形土器の資料はみられなかった。

次に各器種内の器形態について整理する。

甕形土器 口縁部の成形により、折り曲げるもの(a類)、口縁端部に粘土紐を貼り付けるもの(b類)、口縁部よりやや下る位置に粘土紐を貼り付けるもの(c類)に分類される。これ等の比率は、a類44点(45.3%)、b類50点(51.5%)、c類3点(3.0%)である。a類とb類は主体をなし数量的に大差なく、c類は極少量にとどまっていることが分かる。

器形態は、いずれも胴部にやや膨らみをもち、直立ぎみに胴上半部が立ち上がることを共通としている。さらには、基本的に胴部最大径は口径を凌ぐことはなく、口径に近い値を示しているものとなっている。底部形態は、やや厚い平底が多く、わずかに立ち上がりをもち凹みをもつ底部は少量みられるにすぎない(未掲載)。

帝形土器 器形の全様を知る資料はない。

出土品は口径が30cmを越える大型品とそれ以下の中・小型品があり、口頸部の形態には幾つかのものがみられる。

大型品は、頸部径が広く、短い口頸部のものがある。中・小型品は、頸部があまり発達しないものと著しく発達するものに大別され、出土量の多数を占める。この他、短頸のものが極少量みられる。

胴部形態は、総じて球形化を呈し、頸部の発達が強いものほど、胴部中位に最大径をもつようになる。

鉢形土器 口径が24~30cmにおよぶ大型品とそれ以下の中・小型品がある。大型品は、口縁部の折り曲げが弱いものが知れる。なお、甕形土器のなかの「貼り付け口縁で粘土紐が大きく方形状のもの」は鉢形土器になる可能性が高いものである。中・小型品では、直口口縁のものが多くみられる。口縁端面は面取りされるものと丸く仕上げられるものがあるが、面取りのものでは外方に若干突出する現象があり、中期前半の高坏形土器ないし台付鉢の、坏部の口縁部を連想させるものとなっており注目される。

蓋形土器とミニチュア土器等については、出土事例と遺存状況が良好でないため論考をひかえる。

### 2)施文

本資料では、甕形土器・壺形土器は加飾性が強く、鉢形土器は無文化傾向の強いものが多いという状況にある。以下、各器種の施文について整理する。

甕形土器 口縁端部と胴上半部に加飾される。全く加飾のないものも少量ある。

口縁端部には、刻目を施すものが多く59.8%のものに刻目が施される。刻目は、全面に小さい刻目が施されるものが多い。少数例では、端面にヨコ方向の沈線文を施した後刻目を入れるもの(1点)や指頭押圧後に押圧内に刺突文を施すもの(2点)がある。さらに、口縁内端部を刻むもの(1点)がみられる。

胴部には、73.1%のものに加飾が施される。文様は、ヘラ描きの多重沈線文が主要で、刺 突文が組み合された例も多い。刺突文は、刺突文だけで文様を構成することはなく、沈線文 間や沈線文帯の最下位に位置するものとなる。少数例として、山形文、竹管文、格子目文が ある。山形文では工具に注目され、2条1組の工具を使用し施文される例が3例みられた。

一方、口縁部と胴部に加飾を施さないものが少数例みられる。その大半は、b 類中で鉢形 土器にも認定されうる土器群がこの事例にあたり、この他のものでは a 類中で折り曲げが強 く逆「L」字状を呈するものに無加飾のものがみられた。

壺形土器 口縁端部、頸部、胴部、口縁部内面に加飾する。無文のものは極少数である。 大型品は、全てのものに口縁端部と頸部は沈線文、口縁内面には凸帯を施している。口縁端部には刻目をもつものが1点ある。

中・小型品は、頸部の発達が弱いものは、頸部に沈線文が施されることが多い。口縁端部は面取りされるものには沈線文や刻目を施すが、その例は少ない。胴部への加飾は、無文であることが多く、例外として肩部に貼り付け凸帯と棒状浮文が施されるものが1点出土している。例外の1点は、当平野の文様構成にはない手法で、外来の要素と考えられる。

頸部が著しく発達するものは、頸部、口縁内面、胴上半部への加飾が著しい。頸部には多条の沈線文の他、貼り付け凸帯を施すものが多い。凸帯は、基本的に指頭押圧され、押圧内に刺突文を施すものも多くみられるが、口縁内面には凸帯をもつ傾向にあり、凸帯上は刻目を施すものもある。例外として、凸帯の上面に竹管文を施すものが1点ある。

口縁端面は、加飾例が少ないが、沈線文後に刻目を施すものがみられる。胴部は、肩部から 胴部中位までを多重沈線文と刻目(指頭押圧が多数)凸帯で加飾するものが多い。この他、 文様モチーフとしては、斜格子目文や山形文、弧文が少数例としてみられる。工具として貝 殻を使用するものが少数みられる。例外品として、幅広の貼り付け凸帯(凸帯上に格子目文) をもつものが1点みられた。

鉢形土器 無文であることを基調としている。

# 3)調整

変形土器 外面はタテ刷毛目調整が多く、ヘラ磨き調整のものもみられる。内面は、ナデないしヨコヘラ磨き調整される。

壺形土器 外面は刷毛目調整後、ヘラ磨きを行うものが多い。少数例として刷毛目調整だけのものがみられる。内面は、口縁部はナデ及び磨きで、体部はナデである。

鉢形土器 外面はタテ刷毛目調整されるが、口縁部下はヨコヘラ磨きを加えるものがある。

# 「4〕結 び

来住廃寺14次出土資料は、器種に甕形土器、壺形土器、鉢形土器、蓋形土器他をもち、甕形土器では多重の沈線文、刺突文、山形文、壺形土器では著しく長頸化し、内面に凸帯、外面に多重の沈線文と押圧の凸帯文をもつことが特徴としてあげられる。これ等の特徴は、愛媛県下では従来より『阿方・片山式』として前期後半に比定されているものであり、よって、本資料は包含層出土資料ではあるが、この時期の良好な資料と認めてよいだろう。また、本資料は梅木が行ってきた、松山平野の弥生時代前期土器の検討のなかで考えるならば、前期後半の新しい様相を持つ一群の資料として位置づけされるものである。

甕形土器は施文における山形文の採用、壺形土器では著しい長頸化と中・小型品における内面凸帯の採用が新しい土器様相を示したものとしてあげられる。そして施文においては、甕・壺形土器の口縁端面に少数ではあるが、ヨコ沈線文と刻目を組み合わせて施すものや、指頭押圧後に押圧内に刺突文を加える施文が存在することは、平野内の時間差や瀬戸内地方の地域色を考える上では注目されるものであるといえる。さらに、施文工具として2条1組の工具が少数の土器に使用されていることは、前期後半の古い様相のものにはなく、次様式(中期)に継続し、さらに発達する要素であり、櫛描き技法の出現や展開を考える上では、注目される事象である。

一方、本資料には、搬入品ないし外来系色の強い土器が出土しており、周辺地域との関係 を示すものとして注目される。

搬入品としては、壺形土器98であり、当資料は山口県綾羅木遺跡の分析によれば綾羅木Ⅲ A式に比定されるものである。さらに、壺形土器96・97も胴部小片ではあるが綾羅木遺跡出 土資料に近いものである。今後、平野内での同資料の出土事例が増加すれば、周防灘沿岸と の時間的併行関係は充分に整理がつくものと思われる。

また、地域間交流についても分析は可能となるであろう。外来系要素の強いものとして壺 形土器52があげられる。貼り付け凸帯と棒状浮文が組み合う施文法はこの時期の当平野には なく、外からの影響下にあるものと考える。ただし、胎土・色調については、伴出する資料 とは著しく異なるものではなく、搬入品とはいいがたいものである。

この他、壺形土器62の頸部にある耳状の浮文や、貝殻腹縁による施文が多くみられるこれ 等は瀬戸内地方中~西部に散見されるものであり、同地域との交流や交易を考える一つの資料になるものといえるだろう。

以上、来住廃寺14次調査地出土資料の資料紹介と整理・分析を行った。来住台地には、同時期の資料が来住 V 遺跡や来住廃寺遺跡15次調査地で数多く出土している。今後は、これ等の資料との比較分析を行い、台地上の集落構造を解明しなければならないと考えている。一方、今回の資料中には、西部瀬戸内地方との交流や交易での産物であるものが少なからずあり、西部瀬戸内地方の社会構造を分析するための資料を得たといえる。搬入資料による時間的併行関係、施文技法による地域圏の設定等、西部瀬戸内社会の分析資料と方向性を示した資料として評価されるものである。

本稿執筆に際しては、資料の検討と御教示を多くの方々から賜った。末筆ながら記して謝 意を表すものである。

愛媛大学下條信行・田崎博之、福岡大学小田富士雄・武末純一、下関市教育委員会水島稔 夫。

なお、遺物観察表の作成については水口あをい氏の協力を得た。

遺物観察表―凡例―(梅木謙一・水口あをい)

- (1) 以下の表は、来住廃寺14次調査地出土の遺物観察一覧である。
- (2) 各記載について。

法量欄 ( ):復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) □→□縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部~底部。

**胎土・焼成欄** 胎土欄では混和剤を略記した。

- 例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( ) 中の数値は混 和剤粒子の大きさを示す。
- 例) 石・長 (1~4) 多→「1~4 mm大の石英・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

#### 表33 包含層出土遺物観察表 土製品

(外面) 雷 胎 整 土 番号 器種 法量(cm) 色調 図版 形態・施文 備老 外 内 面 (内面) 焼 成 石•長(1~4• 口縁端に刻日。 口径(12.8) (口) ヨコナデ 灰黄褐色 甕 マメツ 残高 7.1 厠 ナデ 黄褐色 ര 無文。 (口) ヨコナデ 口径(19.2) 灰褐色 石•長(1~4) 2 甕 マメツ 残高 8.1 厠)マメツ 淡黄色 ര ヘラ沈線文11条。口縁端に刻 口径(17.3) (ロ) ヨコナデ 灰黄茶色 石•長(1~4) 3 壅 マメツ 残高 6.1 (胴) マメツ 苗褐色 ര ヘラ沈線文4条以上。 口径(17.6) 基褐色 石•長(1~3) 口縁端に刻目。 マメツ 壅 ハケ→施文 残高 3.7 到莆色  $\circ$ ヘラ沈線文5条+刺突文+ (口) ナデ ① ナデ 口径(20.2) 灰褐色 石•長(1~3) 5 獲 沈線文4条以上。 煤付耄 (胴) ミガキ(ヨコ・マメ 残高 8.8 (胴) ミガキ→施文 黄褐色 0 9) ヘラ沖線マ7条. 口径(24.2) 暗褐色 石・長(1~5) 口縁端に刻目。 ハケ→施文 マメツ 残高 5.9 黄白色 ヘラ沈線文11条+刺突文+ ① ミガキか? 口径(28.9) (口) ヨコナデ 淡灰黄色 石•長(1~3) 7 甕 沈線文1条+刺突文+沈線 (胴) ミガキか?(マメ 残高 7.5 厠) 不明 淡灰黄色 **▽5冬+削空▽** ツ) 沈線文10条(2条1組か)+ 口径(20.0) 淡黄褐色 石•長(1~3) 8 壅 刺突文+沈線文つづく(マメ 不明 マメツ 残高 4.6 淡黄褐色 0 沈線文18条(2本1組) ① ヨコナデ 口径(19.6) (口) ヨコナデ 暗茶褐色 石•長(1~5) 9 蘌 +刺突文。 抵黒 42 残高17.2 (胴) ミガキ(ナナメ) (胴) マメツ 暗茶褐色 0 口縁端面にヘラ沈線文+刻 口径(18.0) (口) ヨコナデ 里褐色 石・長 (1~2) 10 壅 42 目。 ミガキ(ヨコ) 残高 6.4 | m ハケ(11本/cm) 黒褐色 ര 無文。 石•長(1~2) 口径(16.8) ① 1部ハケ(タテ) 灰黄褐色 11 マメツ 黒斑 壅 金 残高 5.9 (胴) マメツ 赤褐色 内面に稜をもつ。無文。 口径(21.0) 暗灰黄色 石・長(1~4) 12 甕 マメツ マメツ 残高 5.6 灰黄色 ヘラ沈線文3条以上。 口径(28.0) 乳黄色 石•長(1~4) 13 器壁厚い。 マメツ マメツ 残高 2.5 乳黄色 ヘラ沈線文4条以上。 ① ナデ 口径(21.6) ① ヨコナデ 黒褐色 石・長(1~3) 14 甕 口縁端に刻目。 黒斑 残高 3.5 厠 不明 厠 マメツ 黒褐色 0 口縁端に刻目。無文 口径(22.6) 黒色 石•長(1~4) 15 豲 ハケ(タテ・マメツ) ミガキ 黒斑 残高 4.8 淡灰黄色 🔘 ヘラ沈線文5条。口縁端に刻 口径(16.1) 赤褐色 石•長(1~3) 16 マメツ マメツ 42 36 目。 残高 5.0 赤褐色 0 ヘラ沈線文8条以上。 (ロ) ヨコナデ 口径(21 2) 灰黄褐色 石・長(1~4) 17 マメツ 迹 残高 7.2 厠 マメツ 乳黄色 0

— 168 —

**(1)** 

## 包含層出土遺物観察表 土製品

(2)

		1/B H — ~	t物観察表 土製品	1					(2
番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調	<u>整</u>	│ (外面) 一色調	胎土	備考	図版
				外 面	内 面	(内面)	焼 成		
18	甕	残高 7.7	ヘラ沈線文12条。	マメツ	マメツ	淡灰黄色 淡黄色	石・長(1~3)		
19	甕	口径(22.8) 残高 5.6	ヘラ沈線文6条。	不明	ミガキ(ヨコ)	灰黄色 明茶褐色	石·長(1~3)		
20	甕	口径(25.3) 残高 6.4	ヘラ沈線文5条+刺突文+ 沈線文3条+刺突文2列+ 沈線文3条。	不明	<ul><li>口 ナデ</li><li>胴 ミガキ(ヨコ)</li></ul>	黒色 黒色	石·長(1~3) ◎		
21	甕	口径(17.5) 残高 1.4	指頭押圧+刺突文2段	ヨコナデ	マメツ	乳灰黄色 乳灰黄色	石·長(1~3)		42
22	甕	口径(28.6) 残高 3.3	ヘラ沈線文6条。	不明	ナデ	暗·黄灰色 黄灰色	石・長(1~4)	黒斑	
23	甕	口径(25.2) 残高 12.2	断面三角形の凸帯。	<ul><li>□ ヨコナデ</li><li>厠 ハケ→ミガキ</li></ul>	<ul><li>ロ ヨコナデ</li><li>胴 ナデ</li></ul>	黒色 黄茶色	石(1~2) 角閃石 ◎		42
24	甕	残高 4.0	刻目凸带文。	マメツ	ナデ	乳黄色	石•長(1~5) ◎		
25	甕	残高 2.6	刻目凸帯文。口縁端に刻目。 ヘラ沈線文2条+タテ沈線 3条か。	マメツ	ヨコナデ	淡黄褐色	石•長(1~3) ◎		42
26	甕	口径(25.6) 残高 5.9	器壁が厚い。無文。	<ul><li>回 ヨコナデ</li><li>順 ミガキ(ヨコ)</li></ul>	<ul><li>① ナデ</li><li>胴 ミガキ(ヨコ)</li></ul>	黄褐色 灰褐色	石·長(1~4) ◎		
27	甕	口径(27.8) 残高 13.3	器壁が厚い。無文。	マメツ(1部ハケ有)	マメツ	暗灰褐色 暗灰褐色	石(1~4) 〇		
28	甕	口径(34.4) 残高 6.0	器壁が厚い。無文。 断面方形。	マメツ	ミガキ(ヨコ)	乳黄色 乳黄色	石·長(1~4) ◎		
29	甕	口径(31.0) 残高 3.6	器壁が厚い。無文。	ハケ→ナデ	マメツ	乳黄茶色 乳黄茶色	石·長(1~2) 金 ◎		
30	甕	残高 5.5	ヘラ沈線文2条。	ミガキ(ヨコ)	ミガキ(ヨコ)	乳黄色 黒色	石·長(1~2) 金 ◎		
31	甕	残高 6.0	ヘラ沈線文8条+山形文+ 沈線文1条以上。	不明	ミガキ(ナナメ)	茶褐色 茶褐色	石•長(2~4)		
32	甕	残高 6.1	ヘラ沈線文4条+山形文(2 条1組)+沈線文5条。	<ul><li>♪ ハケ→施文</li><li>下 ミガキ(ナナメ)</li></ul>	ミガキ(ヨコ)	黒色 灰黄色	石·長(1~3) ◎		42
33	甕	残高 6.7	ヘラ沈線文5条以上+竹管 文+沈線文6条。	ハケ→施文	マメツ	黄·灰茶色 黄茶色	石·長(1~2) ◎		42
34	甕	残高 4.8	ヘラ沈線文11条+多条タテ 沈線文。	不明	ナデ	灰茶褐色 黄茶色	石•長(1~4)		42

#### 包含層出土遺物観察表 土製品

調 整 (外面) 胎 十 番号 器種 法量(cm) 色調 形態・施文 備老 図版 面 外 面 内 (内面) 焼 成 ヘラ沈線文2条以上+竹管 黄茶色 石•長(1~3) 35 文+沈線文3条以上+タテ 壅 残高 2.5 不明 マメツ 苗苓色 0 多条沈線文。 口縁端沈線文2条+刻目か 口径(35.2) 黄白色 石•長(1~7) 36 内面凸帯文。頸部沈線文 4 条。 マメツ マメツ 杏 残高 5.6 黄白色 0 口縁端沈線文2条+刻目。 口径(35.2) 乳苗色 石•長(1~3) 37 内面凸带文。頸部沈線文4条 壺 ミガキ(ヨコ・マメツ) 残高 4.8 乳黄色 DI F 口縁端沈線文 1 条。内面凸带 口径(30.0) 灰黄褐色 石·長(1~5) 38 文。頸部沈線文4条。 マメツ マメツ 残高 8.6 灰黄褐色 頸部にヘラ沈線文5条。 (口) ヨコナデ 口径(14.5) (口) ヨコナデ 白灰色 石・長(1~4) 39 壺 ハケ(ヨコ) 残高 9.2 厠) ハケ(タテ) 白灰色 0 (胴) ミガキ(ヨコ) 頸部にヘラ沈線文4条。 石•長(1~2) 口径(15.6) ハケ(タテ) 乳白色 411 壶 ハケ(5本/cm) 金 無斑 残高 6.5 1部ミガキ有 乳黄色  $\cap$ 口縁端部に丸みをもつ。 「口頸」ハケ→施文 口径(14.6) 黄褐色 石•長(1~5) 41 頸部にヘラ沈線文2条. ハケ(マメツ) 盡 残高 7.2 (胴) ハケ→ミガキ 苗褐色 0 口縁端部に丸みをもつ。 口径(14.0) 黄白色 石•長(1~4) 42 頸部にヘラ沈線文3条。 マメツ マメツ 壶 残高 8.2 黄白色  $\cap$ 口縁端部に丸みをもつ。 口径(12.8) 乳黄色 石・長 (1~2) マメツ 43 赤 無文。 マメツ 残高 7.5 乳黄色 口縁端部に丸みをもつ。 口径(9.1) (ロ) ナデ (印) ヨコナデ 乳黄色 石・長(1~2) 44 壺 無文。 残高 6.8 厠 ミガキ(ナナメ) (胴) ナデ 乳黄色 0 頸部にヘラ沈線文3条以上。 口径(16.2) 茶褐色 石•長(1~3) 45 ナデ ミガキ(ヨコ) 残高 3.3 茶褐色 0 頸部にヘラ沈線文4条以上。 (口) ナデ 口径(16.7) 乳黄色 密 46 壺 ミガキ(ヨコ) 残高 4.2 (頸) ミガキか(マメツ) 茶褐色 0 頸部にヘラ沈線文5条以上。 口径(14.8) 黄白色 石•長(1~3) 47 壺 マメツ ミガキ(ヨコ) 残高 5.7 黄白色 ര 頸部にヘラ沈線文1条以上。 口径(13.2) 灰黄褐色 石・長(2~4) 48 唜 ハケ ハケ 残高 4.8 灰褐色 口縁端にヘラ沈線文+刻目。 口径(17.7) 黄白色 石•長(1~2) 49 マメツ 杏 ミガキ(ヨコ) 残高 3.2 黄白色 0 口縁上・下端部に刻目。 口径(14.0) 苗茶色 石·長(1~3) 50 ヨコナデ マメツ 杏 残高 2.2 黄茶色 0 頸部に刺突文。 口径(16.2) (ロ) ナデ 黄茶褐色 石•長(1~2) 51 ナデ 残高 4.4 (頸) ミガキ(ヨコ) 黄茶褐色

(3)

(4)

			■初観祭衣 工製品 					(4	
番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調	整	│ (外面) │ 色調	胎土	備考	図版
	HH 135	(0111)	/// /// // // // // // // // // // // /	外 面	内 面	(内面)	焼 成	畑で	IN IN
52	壺	残高 5.0	肩部に刻目凸帯文。刻目の棒 状浮文。	マメツ	ナデ(指頭痕顕著)	茶褐色 茶褐色	石·長(1~4)	黒斑	43
53	壺	残高 10.4	頸部にヘラ沈線文4本。	マメツ	マメツ ナデ(指頭痕顕著)		石·長(1~5)		
54	壺	残高 4.8	頸部にヘラ沈線文2条+刺 突文。	マメツ	マメツ	灰黄色淡灰色	石・長 (1~3)		
55	壺	残高 10.0	刷毛目工具木口による段が ある。	ハケ(マメツ)	ナデ(指頭痕顕著)	乳黄橙色 乳黄橙色	石·長(1~3) 金 ⊚		
56	壺	残高 7.1	頸部に弱い稜をもつ。	ミガキ(マメツ)	マメツ	乳灰黄色 乳灰黄色	石·長(1~3)		
57	壺	残高 11.2	頸部にヘラ沈線文1条以上。	ミガキ(マメツ)	頸 ミガキ(ヨコ) 胴 ナデ	乳黄茶色 黄灰色	石•長(1~3)		
58	壺	口径(12.6) 残高 3.1	口縁内面に凸帯。頸部にヘラ 沈線文 4 条以上。	<ul><li>① ナデ</li><li>頸 ハケ→施文</li></ul>	ナデ	黄灰色	石·長(1~2) 金 ◎		
59	壺	口径(15.0) 残高 5.4	口縁内面に凸帯。頸部にヘラ 沈線文4条以上+刻目凸帯 (押圧+刻目)	ナデ	マメツ	黄褐色 黄白色	石·長(1~3) 金 ◎		
60	壺	口径(14.5) 残高 6.0	頸部にヘラ沈線文6条。	<ul><li>回 ヨコナデ</li><li>頭 不明</li></ul>	マメツ	黄白色 黄白色	石·長(1~2) ◎		
61	壺	口径 14.0 残高 8.5	口縁内面に凸帯。頸部に刻目 (押圧+刺突)凸帯 2 本。	<ul><li>口頸 ヨコナデ</li><li>胴 ハケ→ミガキ</li></ul>	<ul><li>回 ヨコナデ</li><li>願 ミガキ(ヨコ)</li><li>胴 ナデ</li></ul>	淡黄褐色淡黄褐色	石•長(1~4)		
62	壺	口径(21.6) 残高 16.9	口縁内面に凸帯。頸部に刻目 凸帯 + へラ沈線文 4 条。 耳状の浮文。	ハケ→ミガキ(マメツ)	マメツ	黑·乳灰色 黑·乳灰色	石•長(1~4)	黒斑	
63	壺	口径(20.1) 残高 5.1	口縁内面に刻目凸帯。頸部に ヘラ沈線文 2 条以上。	ヨコナデ	マメツ	乳黄色 黄茶色	石•長(1~3) ◎		
64	壺	口径(20.0) 残高 7.4	口縁内面に刻目凸帯 2 本。	<ul><li>ロ マメツ</li><li>頭 ハケ(タテ・7本/cm)</li></ul>	マメツ	黄灰色 黄灰色	石·長(1~3) 金 ⊚		
65	壺	口径(20.8) 残高 1.8	口縁内面に刻目凸帯。 口縁端にヘラ沈線文+刻目。	ナデ	ミガキ(ヨコ)	茶褐色	石·長(1~3) 金 ⊚		
66	壺	口径(26.9) 残高 6.2	口縁端面にヘラ沈線文+刻 目。	ハケ→ミガキか(マメツ)	ミガキ(マメツ)	赤褐色赤褐色	石・長(1~2)		
67	壺	口径(18.7) 残高 14.5	頸部にヘラ沈線文3条+刺 突文+ヘラ沈線文4条。	マメツ	マメツ		石•長(1~3)		
68	壺	口径(21.0) 残高 3.3	口縁内面に凸帯	マメツ	マメツ	1 1	石·長(1~5) ◎		

**(5)** 

			[物觀祭表 工製品	調	整	(外面)	胎土		
番号	器種	法量(cm)	形態・施文	外 面	内		焼 成	備考	図版
69	壺	残高 8.3	口縁内面に刻目凸帯。 頸部にヘラ沈線文9条以上。	ハケ→施文	マメツ	赤茶色	石•長(1~3)		
70	壺	残高 6.1	口縁内面に凸帯。凸帯上面に 竹管文(3列)。頸部に刻目凸 帯。	マメツ゜	マメツ	淡茶褐色			43
71	壺	残高 6.6	口縁内面に凸帯。頸部にヘラ 沈線文6条以上。	マメツ	マメツ	黄白色 黄白色	石·長(1~3)		
72	壺	残高 5.3	頸部に刻目(押圧+刺突文2 列) 凸帯2本、ヘラ沈線文2 条以上。	マメツ	マメツ	黄褐色黄褐色	石·長(1~4) ◎		-
73	壺	残高 5.2	頸部に刻目(押圧+刺突文2 列)凸帯+ヘラ沈線文2条以 上。	不明	マメツ	灰黄色 灰黄褐色	石・長(1~3)		
74	壺	残高 16.5	頸部と胴部に刻目(押圧+刺 突文)凸帯。	ハケ(8~10本/cm)→施 文	ハケ→ナデ	黄褐色 白黄色	石·長(1~3) 金 ◎		
75	壺	残高 5.8	頸部に刻目(押圧+刺突文2 列)凸帯+ヘラ沈線文8条以 上。	不明	マメツ	乳黄色 乳黄色	石•長(1~2)		
76	壺	残高 8.5	頸部にヘラ沈線文10条+刻 目凸帯。	ハケ(タテ)→施文	マメツ	黄白色 黄白色	石·長(1~4)		
11	壺	残高 5.4	肩部にヘラ沈線文4条。	ミガキ→施文	マメツ	乳黄色灰色	石·長(1~2) 安山岩 ◎		
78	壺	残高 3.0	肩部に断面三角形の凸帯 2 本。1 部に刻目あり。	不明	ナデ	乳黄褐色 乳黄褐色	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		
79	壺	残高 5.0	貝殼腹緣文+刻目(押圧+刺 突文2列)凸帯+貝殼腹緣文 5条。	マメツ	マメツ	暗灰茶色 乳白黄色			
80	壺	残高 3.7	肩部に断面三角形の凸帯。	ナデ	マメツ	橙褐色 乳黄色	石・長(1~2)		
81	壺	残高 3.2	胴部に凸帯。	ミガキ(ヨコ・マメツ	) ナデ	黄褐色黄褐色	石·長(1~3) 金 ◎		
82	壺	残高 4.4	胴部にヘラ沈線文3条+刻 目凸帯+沈線文3条。	1部ハケ有り	マメツ	黒灰色 乳黄灰色	石・長(1~2)		
83	壺	残高 4.8	胴部にヘラ沈線文4条+刻 目(押圧+刺突文2列)凸+ 沈線文3条以上。	不明	ナデ	暗褐色 暗褐色	石・長 (1~2)		
84	壺	残高 7.5	ヘラ沈線文9条+刻目(押目+ 刺突文)凸帯。	マメツ	マメツ	乳黄灰色			
85	壺	残高 5.4	ヘラ沈線文3条以上+刻目 (押圧+刺突文)+沈線文2 条以上。	マメツ	マメツ	淡黄褐色 乳黄灰色	1		

(6)

			且物旣祭衣 工製品 	調整				(h) ==)	(N=) n/, 1		
番号	器種	法量(cm)	形態・施文			整		──(外面) ──色調		備考	図版
			ヘラ沈線文1条+貝殻腹縁	外	面	内	面	(内面)			
86	壺	残高 8.0	5条1組の山形文+沈線文 5条+貝殻腹縁。	マメツ		マメツ		黒灰色 黄灰色	石・長(1~3)		43
87	壺	残高 8.8	貝殼腹緣 4 条 + 同 7 条 + 刻 目凸带 + 貝殼腹緣 6 条以上。	マメツ		マメツ		黄灰色	石·長(1~7) 金 〇		43
88	壺	残高 6.3	ヘラ沈線文1条+刻目凸帯+ 沈線文4条以上。	マメツ		マメツ		乳黄·黑色 乳黄·黑色	石•長(1~5)		43
89	壺	残高 5.4	へラ沈線文3条+斜格子目 文。	不明		マメツ		黒色 乳黄色	石•長(1~4)	黒斑	
90	壺	残高 5.9	ヘラ沈線文斜格子目文+沈 線文5条+刻目凸帯+沈線 文3条。	不明		マメツ		黄褐色 黄褐色	石•長(1~4)	黒斑	
91	栅	残高 3.4	ヘラ描弧文4条。	ナデ		マメツ		乳黄色淡灰色	石·長(1~2)		
92	壺	残高 3.5	へラ沈線文1条以上+貝殻 腹縁による弧文2条。	マメツ		マメツ		茶褐色褐色	石·長(1~2) ◎		
93	壺	残高 4.7	幅広凸帯。凸帯上に格子目文。	マメツ		マメツ		乳白色乳白色	石·長(1~4) ◎		
94	壺	残高 5.3	乳頭状の小浮文。	ミガキ		ナデ		乳黄色	密 ◎		43
95	壺	残高 5.2	ヘラ沈線文4条+2条か	ハケ→ナデ		ナデ(マメツ)		黄茶・黒 色 灰黄色	石•長(1~3)		43
96	壺	残高 4.9	ヘラ沈線文3条+2条。	ミガキ(マメツ)		ナデ(マメツ)		茶黄色 乳茶色	石·長(1~3) 金 〇		43
97	壺	残高 6.1	ヘラ沈線文4条+2条以上。	マメツ		ナデ(マメツ)		淡茶色 灰茶色	石•長(1~3)		43
98	壺	残高 16.5	搬入品。	マメツ			3 2)	橙褐色 橙褐色	石·長(1~5) ◎		44
99	鉢	口径(29.2) 残高 7.5	無文。	ハケ		マメツ		乳黄色 乳黄色	石•長(1~3)		
100	鉢	口径(28.0) 残高 6.2	器壁がやや厚い。無文。	ハケ(1部ナデ)		マメツ		乳黄色 乳黄色	石•長(1~3)		
101	鉢	口径(21.8) 残高 3.3	直口口縁。外端部は、わずかに突出する。	<ul><li>① ナデ</li><li>胴 ハケ(タテ)</li></ul>		ナデ		1	石•長(1~2)		
102	鉢	口径(16.7) 器高 15.0 底径 5.3	わずかに凹む平底。貼り付け 口縁。	マメツ		胴上 マメ		1 1	石•長(1~3)		

**(7**)

			170 就宗父 工表的						(1)
	00.00		TIANG MATERIAL	調	整	(外面) 色調	胎土	備考	図版
番号	器種	法量(cm)	形態・施文	外 面	i 内面	(内面)	焼 成	WH175	
103	鉢	口径(12.6) 残高 4.0	焼成前の小円孔。	マメツ	マメツ	橙茶色 橙茶色	石•長(1~2) ◎		
104	鉢	口径(15.1) 残高 5.6	直口口縁。口縁外端がわずか に突出する。	マメツ	マメツ	黄白色	石·長(1) ◎		
105	鉢	口径(15.6) 残高 4.2	直口口縁。端面は、面をもつ。	<ul><li>□ ヨコナデ</li><li>胴 ハケ→ミガジ</li></ul>	<ul><li>① ヨコナデ</li><li>網 マメツ</li></ul>	黒褐色 黒褐色	石·長(1~2) ◎		
106	鉢	口径(17.5) 残高 3.2	直口口縁。端面は、面をもつ。	<ul><li>回 ヨコナデ</li><li>胴 ハケ(タテ)</li></ul>	マメツ	黄茶色 黄褐色	石·長(1~2) 金 ◎		
107	鉢	口径(14.8) 残高 4.2	直口口縁。端部に丸みをもつ。	<ul><li>取 まがキ(ヨコ 順) まがキ(タテ</li></ul>	1 ミガチ(ヨコ)	黒灰色 黒灰色	密		
108	甑	底径 7.2 残高 5.5	壺の転用品。焼成後穿孔。	マメツ	マメツ	黒褐色	石·長(1~2) ◎		
109	飯	底径(9.0) 残高 6.1	甕の転用品。焼成後穿孔。	マメツ	マメツ	茶褐色茶褐色	石·長(1~2) ◎		
110	蓋	口径(16.8) 残高 2.5	外反する裾部。やや厚い器壁。	ミガキ	ナデ	黒·黄茶色 乳黄色	石·長(1~2) 金 ⊚		
111	ミニチュア	底径 4.0 残高 2.1	大きい平底。くびれをもつ。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石·長(1~2) ◎		
112	鉢	口径(26.5) 残高 4.3	直口口縁。縄文時代の晩期。	ナデ	ナデ	暗茶褐色 暗茶褐色	石·長(1~2) ◎		
113	浅鉢	口径(24.0) 残高 3.8	焼成前の小円孔1ヶ。 縄文時代晩期。	ナデ	不明	灰黄色 暗灰黄色	石·長(1~2) 金 ⊚		

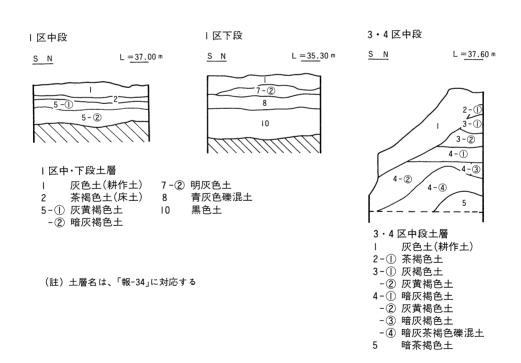
# (付論 2) 来住廃寺遺跡15次調査地出土の中近世土器 岡根なおみ

## 1. はじめに

来住廃寺遺跡15次調査地は、1991(平成3)年に行われた調査であり、1993(平成5)年3月31日に『来住廃寺遺跡-15次調査-』(以下、報-34とする。)として既に報告がなされている。本稿では、未掲載となった中近世遺物について、来住台地の中近世資料充実のため報告するものである。

# 2. 調查概要

調査地は、来住廃寺(白鳳時代寺院跡)塔址の南西100mに位置している。調査では、6世紀後半から18世紀に至る遺構が検出されている。本稿で取り上げる遺物は1区中段、下段、3・4区中段より出土したものである。なお、調査区の西側と東側では土層の堆積状況が多少異なるため、1区と、3・4区の層序名称は同一のものではないことを注意していただきたい。さらに、層序については第93図を参照していただきたい。



第93図 I区中·下段、3·4区中段土層図 (S=1:50)

# 3. 遺構外出土資料

1) 1区中段第5一①層出土遺物(第94図1、図版45)

1は土師質の茶釜で鍔部の復元径で26cmを測る。口縁部外面は刷毛目調整痕を残す。鍔部を境に下半は炭化物が付着しているが多くの指頭圧痕が見られる。器壁は4mmを測り、比較的薄いつくりである。

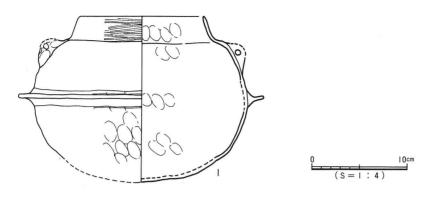
- 2) 1区下段第8層出土遺物 (第95図2~14、図版45・46)
- 2・3 は唐津焼きの皿で 2 は見込みに砂目積み痕が見られる。 釉調は淡緑灰色を呈し、施釉は内面から外面口縁部に至る。高台部は無釉である。 3 の見込みは蛇ノ目状に釉を剝いでいる。 釉調は赤味を帯びた灰褐色を呈す。 4 は小碗。 釉調は淡黄色を呈する。 5・6 は丸味を帯びた腰部から口縁にかけまっすぐに伸びる碗で、 釉調は淡黄褐色を呈する。 唐津焼に比べると軽量で胎土は淡黄色を呈している。高台外面底にも釉を施す。 11 は刷毛目文を施した鉢と考えている。 7 は天目釉が施される。 8 は割高台で器形はよくわからない。 9 は染付け碗。 10 は磁器碗で釉調はオリーブ灰色を呈する。 12 は壺のようなものを考えている。 外面体部は鉄釉を施す。 13 は炻器に似た質感で内面に格子叩きが残り無釉である。 14 は口縁部が「T」字状を呈し口縁直下には段がつく。 鉄釉が施される。
  - 3) 3・4 区中段第4層出土遺物 (第96~98図15~48、図版45・46)

16~22は土師質の釜で口縁部は内傾し、端部外面に貼り付けた凸帯は強いヨコナデにより断面三角形に近くやや下垂ぎみになる。20の内面には刷毛目調整痕がみられる。図化していないがこれらの脚と思われるものが出土している。それらは底部から約4cm程上の位置に貼り付けられている。23は瓦質の鍋と考えている。15~18は備前焼Ⅳ期の擂鉢で口縁部外面には2本の沈線が巡っている。25~27・29は備前焼きの甕で25・26はⅣ期のものである。28は体部の立ち上がりから壺の底部と考えている。24は瓦質の擂鉢で口縁部内面に粘土帯を張り付け、片口である。30は土師器の皿で底部の調整は摩滅してわからない。31は底部回転糸切り離し調整によるもので内面には多段の撫でがみられる。32は底部回転へラ切りの皿で口縁は大きく開き端部はヨコナデにより外反する。33は回転糸切り底で、口縁部は内湾ぎみに開く。

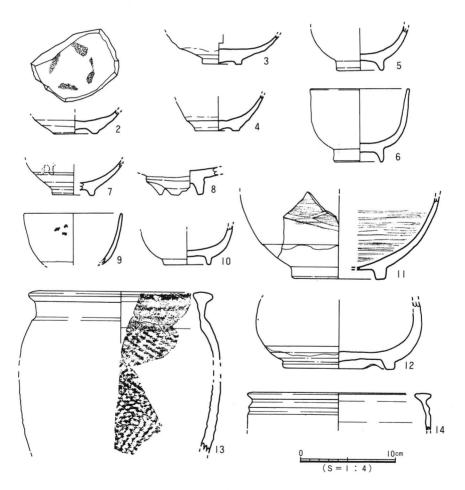
34~36は龍泉系青磁碗。34・35は見込みに花文を施している。36は口縁片で端部は外反する。37~39は唐津焼の皿。38は溝縁の皿で見込みに砂目痕が残る。釉調は灰オリーブ色を呈する。40は第95図の5・6に似る。41~46は染付け碗である。41は胎土が赤味を帯びた灰褐色を呈し他の磁器と異なる。42は広東碗の様な形を呈する。43の口縁は輪花状になっており見込みには焼成時の目痕が残る。高台外底面は蛇ノ目状に釉を剝ぐ。44は見込みを蛇ノ目状に釉を剝いでいる。46は型紙摺りの碗で出土土器の中では時期が新しいものである。47・48は貝殻を模した紅皿で型押し成形である。釉調は白色を呈する。

4) 3・4区中段5層出土遺物 (第99図49~52、図版45・46)

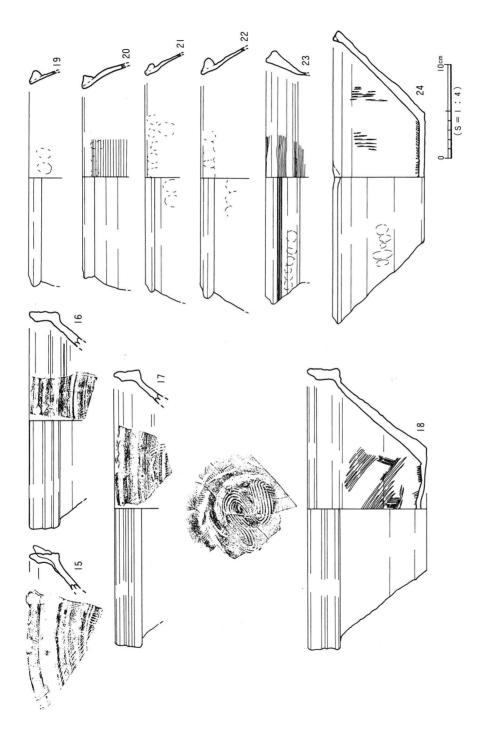
49は土師質の鍋で口縁部は内湾ぎみに開く。内外面には刷毛目調整を施す。50は備前焼の



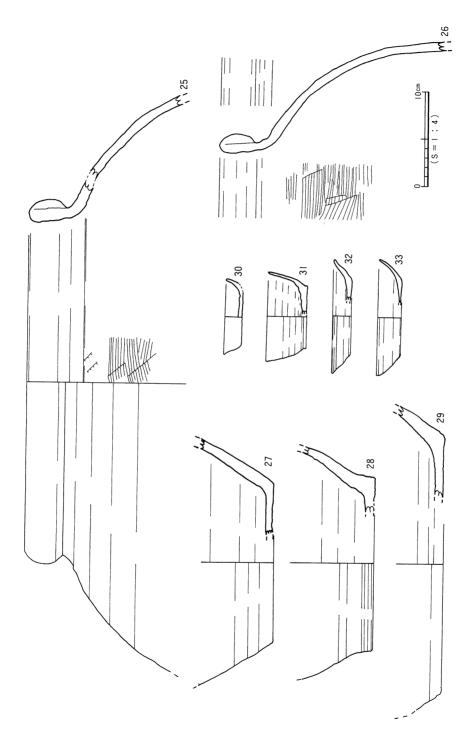
第94図 | 区中段 第5-①層出土遺物実測図



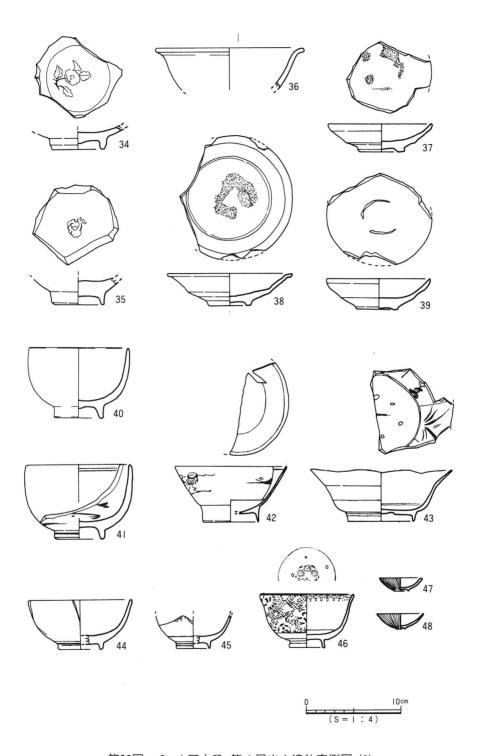
第95図 | 区下段 第8層出土遺物実測図



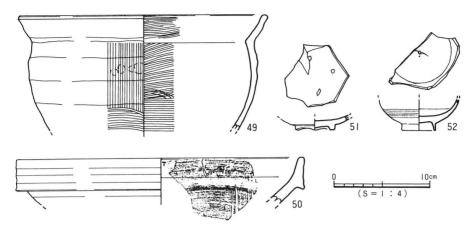
第96図 3・4区中段 第4層出土遺物実測図(1)



第97図 3・4 区中段 第4層出土遺物実測図(2)



第98図 3・4 区中段 第4層出土遺物実測図(3)



第99回 3・4区中段 第5層出土遺物実測図

擂鉢でⅣ期のものである。51は生産地不明、内面にはハマ溶着痕がみられる。高台外底面には「三」と墨書が見られる。52は肥前系の染付け碗。見込みには鷺の文様が施される。

# 4. まとめ

各遺物包含層は、土地の造成を行った際に押し流された土砂が堆積を重ねたもので資料の時期幅は広く一括性は欠しい。が、来住台地上の遺跡からまとまった量の中近世土器が出土する例は少ない為、ここであえて資料を呈示した後、主に中世加えて近世集落の様相についても触れてみたい。

まず中世の資料では11世紀後半にみられる土師質鍋(49)を除くと、15~16世紀代の土器が主になる。龍泉系青磁碗は上田秀夫氏の分類(註1)によると(35)が14世紀半ば、(36・37)は15世紀の年代が与えられている。備前焼Ⅳ、V期の擂鉢、壺、甕に土師質釜、土師器皿、杯の出土は古照遺跡(註2)や樽味遺跡(註3)などでも報告されている。防長型の特徴をもつ擂鉢(24)は岩山仁志氏の編年(註4)によればⅢ期にあたり16世紀前半代にみられるものである。(23)の瓦質鍋は大日裏V遺跡(註5)より出土した土師質の鍋に類似するが、今のところ生産地などは不明である。土師質茶釜(1)はその形態が湯築城より出土した瓦質茶釜に類似している(註6)為16世紀後半の時期を考えている。近世の資料では17世紀前半にみられる唐津焼の皿がある。これらは墓の副葬品としても多く出土した。肥前系と思われる染付碗については18世紀以降のものである。

次に現段階までに報告された遺構・遺物をあげることにする。来住廃寺21次調査(註7)では大形建物(最大のもので6間×4間)が数棟と性格不明の溝7条が検出されている。掘立柱建物からは瓦質茶釜片と思われるものが1点出土したのみで、溝(SD-7)からは土師皿2点と瓦片1点が出土している。22次調査(註8)では土師質釜が出土した土壙(SK-5)

溝 (SD-3) が検出されている。15次調査地では遺構は確認できなかったが包含層からは、11~12世紀にかけての土師器椀の形態を知る上で良好な資料が出土している。近世の遺構としては15次調査地で大・小の掘立柱建物2棟と溝、柵列、墓壙19基が検出されている。

以上、遺構遺物を列挙することに終始し集落の様相を述べるに至らなかった。今後中近世の資料を注意深く観察していくことを重ね、調査を発展させて考える必要がある。

本稿をまとめるにあたり、多くの方々に御指導御助言をいただきました。末筆ながら感謝 申し上げます。

#### (註)

(1)ト田秀夫:「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会、1982

(2)栗田正芳: 『古照遺跡―第6次調査―』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター、1993

(3)田崎博之:『樽味遺跡 II - 樽味遺跡 2 次調査報告-』愛媛大学埋蔵文化財調査室、1993

(4)岩崎仁志:「防長型擂鉢について」『山口考古第19号』山口考古学会、1990

(5)多田 仁:「大日裏 V 遺跡」『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 W』(財) 愛媛県埋蔵文化財センター、1994

(6)中野良一、柴田圭子両氏よりご教示頂いた。

(7)西尾幸則他:「来住廃寺21次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報 V』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯 学習振興財団埋蔵文化財センター、1993

#### 遺物一覧―凡例― (岡根なおみ)

- (1) 以下の表は、本調査出土の遺物観察一覧である。
- (2) 遺物観察表の各記載について。

**種類** 例)弥生→弥生土器、黒色 A →黒色土器(内黒)、須恵→須恵器、土師→土 師器。

法量 単位; cm、( ): 復元推定值

**手法** 例) □→□縁部、底→底部、高→高台、胴→胴部、体→体部、他→特記した部位以外の部分、等。

色調 例) 釉→釉調、外→外面、内→内面

**胎土** 例)細砂粒 $\rightarrow 1 \sim 2 \text{ mn}$ 大の主に石英・長石などを示す。砂粒 $\rightarrow 2 \sim 3 \text{ nm}$ と 細砂粒より粒度が大きいもの。

**焼成** 例)  $\bigcirc$ →良好、 $\bigcirc$ →良、 $\triangle$ →やや甘い、 $\times$ →不良。

表34 1区中段第5一①層出土遺物観察表 土製品

番号	種類	器種	器部	法量(cm)	形	態	外	手面	法内	面	色調胎 土焼 成	出土拠点	図版
1	土師	茶釜	1/4 欠		口縁部やや内体部扁平な球形		口 ハケ体 炭化	ケ 化物付茗	ナデ	Ĭ	外 無褐 内 灰褐 細砂粒含 〇	T-44	45

# 表35 1区下段第8層出土遺物観察表 土製品

表35		- 1 122	13 0 7 7	出土遺物	観祭表 工製品		<b></b>	 法	色 調	Τ	T
番号	種類	器種	器部	法量(cm)	形 態	外	面	内 面	色調胎土焼成	出土 拠点	図版
2	陶器	Ш	底部	高径 5.5	高台は底部中央を凹状に削る、見込に円凹の削り込み 唐津焼き	高台	削り出し	施釉見込砂目積	<b>が 成</b> (内) 淡緑灰 (外) にぶい黄橙 精良 (〇)	W X 47·48	
3	陶器	Ш	底部	高径 4.2	高台は小さめで輪状に削り 出す 見込は蛇目状に釉を剝ぐ	高台	削り出し	施釉 見込蛇目釉剝	灰褐 精良 〇	W X 46•47	
4	陶器	碗?	底部	高径 3.5	高台は底部中央を凹状に削 る	高台	削り出し	施釉	淡黄 0.1~0.2mm 砂粒含 ○	W X 48•49	
5	陶器	碗?	底部	高径 4.9	丸味をもった腰部から口縁 まっすぐに伸びる。	高台	施釉	施釉	淡黄褐 精良 〇	トレンチ内	
6	陶器	碗?	底部 (口縁	口径(10.4) 器高 7.7 高径 5.3	丸味をもった腰部から口縁 まっすぐに伸びる。	高台	施釉	施釉	淡黄褐 精良 〇	W X 44•45	
7	陶器	碗?	底部	高径 4.2	断面「コ」字の高台より体部 は外方に伸びる。	高台	削り出し	施釉	暗茶褐 精良	トレンチ内	46
8	陶器	鉢?	底部	高径 6.2	割り高台	高台	削り出し		にぶい赤褐 細砂粒含 〇		
9	磁器	सिर्व	口縁	口径(10.4)	染付	施釉		施釉	青灰 精良 〇		
10	磁器	碗	底部	高径(5)	断面「コ」字の輪高台	高台	施釉	施釉	オリーブ灰 精良 〇	トレンチ内	
11	陶器	片口?	底部	高径(9.6)	内面は刷毛目文様 外面下半は鉄釉上半は刷毛 目文様 唐津焼き	高台	削り出し	施釉	オリーブ灰 →赤褐 精良 〇	UV 46・47 トレンチ内	46
12	陶器	壺?	底部	高径(11.6)	体部外面に鉄釉を施す。 高台に半円形のきざみを入 れる。	高台	削り出し	無釉	赤褐 精良		
13	炻器 ?	煮	口縁	口径(19.5)	口縁は「T」字形を呈す。 無釉	デ	ヨコナ	口 ヨコナデ 体 格子タタキ	内 明褐 外 紫灰 精良 〇	W X U V 46•47	45
14	陶器	甕	口縁	口径(19.4)	口縁は「T」字形を呈す。 口縁直下に段がつく	施釉		施釉	赤褐精良	W X 48•49	46

(1)

表36 3 • 4 区中段第 4 層出土遺物観察表 土製品

色胎焼焼 手 法 番号 種類 器種 器部 法量(cm) 形 態 図版 外 面 内 備前V期 赤裾 口縁 15 陶器 すり鉢 残高(4.8) 口縁外面 2 条の沈線 施釉 施釉 精良 A 36 1/6 6 本単位の御目  $\circ$ 暗赤褐 備前V期 16 炻器 すり鉢 細片 口径(22.8) ヨコナデ ヨコナデ 精良 口縁外面2条の沈線 28 • 29  $\circ$ (口) 青灰 口縁 備前V期 (体) 赤褐 すり鉢 17 炻器 口径(28.6) ヨコナデ ヨコナデ 1/10 口縁外面 2 条の沈線 精良 32.33 口径(29.4) 備前 ٧期 1/2 18 すり鉢 炻器 **哭意(12 4)** 8 本単位の御日 ヨコナデ ヨコナデ 砂粒多含 45 欠損 32.33 底径 13.0 内面使用により摩滅する。 0 にぶい橙 口縁 19 炻器 すり鉢 口径(20.5) 凸径やや下垂(20.5) ヲコナデ ヨコナデ 1~3mm砂粉多含 V361/6 0 にぶい橙 口縁 D 20 炻器 すり鉢 口径(21.6) 凸带上面水平 ヨコナデ ハケ目 細石粒含 45 1/8 28.29 0 档据 口縁 21 炻器 すり鉢 口径(22.6) 凸帯下垂 ヨコナデ ナデ 細砂粒多含 W37 1/10 0 にぶい格 口縁 WΧ すり鉢 22 炻器 口径(22.2) 凸带下垂、炭化物付着 ヨコナデ ナデ 砂粒多含 45 1/8 36+37 0 Die. 口縁 口縁は外方に開く端部は肥 ヨコナデ 23 万唇 4品? 口径(26.8) ハケ 細砂粒含 45 厚しヨコナデにより凹む。 1/10 指頭圧痕 30.31 0 口径(31.0) 口縁内面凸帯貼り付 灰白 1/4 ΥA 24 万質 鍋? 器高 14.0 片口 指頭圧痕 摩減 砂粒多含 45 片 36 底径 13.8 御目は摩滅する。 0 口 ヨコナデ 口縁 にぶい赤 ΥA 口 ヨコナデ 25 炻器 200 口径(40.0) 備前Ⅳ期 体 工具による 砂粒含 34.35 体 ハケ 肩部 ナデ トレンチ 0 赤褐 口縁 口 ヨコナデ 口 ヨコナデ 外 暗赤褐 26 炻器 甕 口径 不明 備前Ⅳ期 体 工具による 34~36 体 ハケ 砂粒多含 肩部 ナデ X 34 · 35  $\bigcirc$ 赤褐 底部 ΥA 27 炻器 底径(17.0) 平底 ナデ ナデ 細砂粒多含 1/4 0 青灰 底部 底部より直っすぐ立ち上がっ 28 炻器 甕 底径(18.2) ナデ ナデ 精良 Y 36 1/2たのち内湾気味に開く 0 暗赤 底部 29 炻器 甕 底径(27.2) 平底 ナデ ナデ 石粒含 1/6 0 口縁 口径(8.0) 浅带橙 30 土師 Ш 1/3 器高 1.5 口縁短く、外方に立ち上がる。マメツ ナデ 細砂粒含 Y 36 欠損 底径 5.6 0 口径(9.4) にぶい赤橙 口縁 底部よりまっすぐに立ち上 底 回転糸切 31 土師 器高 4.2 マメツ 杯 細砂粒含 1/2がる内面多段 他 マメツ 28.29 底径 6.6 0

— 184 —

#### 3 • 4 区中段第 4 層出土遺物観察表 土製品

法 色調 出土 図版 番号 種類 器種 器部 法量(cm) 胎土 拠点 外 面 内 面 焼成 口径(12.0) 底 ヘラ切り? にぶい橙 口縁部強いヨコナデにより D ナデ 細砂粒含 32 土師 Ш 1/4 器高 4.0 →ナデ 外反する。 28 • 29 他 ナデ 0 底径(7.2) 外 浅黄橙 口径(12.2) 底部より内湾ぎみに立ち上 底 回転糸切 (内) 楷 マメツ W37 33 土師 Ш 1/4 器高 2.4 他 マメツ 細砂粒含 底径 7.6  $\circ$ 灰オリーブ 高台外面中位に稜をもつ。 Y 36 46 青磁 施釉 施釉 精良 34 库部 高径 5.5 協市 見込み沈線と花文  $\circ$ オリーブ 高台細く削り出す 施釉 施釉 精良 D 35 46 高径 5.5 青磁 底部 35 1661i 見込み花文  $\circ$ オリーブ 口縁 36 青磁 碗 口径(15.2) 口縁端が外反する。 施釉 施釉 精良 46 32.33 1/4  $\circ$ (釉) 灰色 口径(11.8) 口縁部 肥厚させる。 高 削り出し 施釉 口縁 37 陶器 器高 3.0 細砂粒含 V 36 見込砂目積み 高台は輪状に削り出す。 口 施釉 欠損 喜径 48  $\circ$ 口径 13.2 (釉) 灰オリーブ 口縁 高 削り出し 施釉 見込に円凹の削り込み Y 30 38 陶器 Ш 器高 3.3 精良 口 施釉 見込砂目積み 1/3欠 高径 4.3 高台は輪状に削り出す。  $\circ$ (釉) 灰白 口径 10.8 高 削り出し 口縁 口縁部肥厚させる。 旃釉 D35 39 陶器 m 器高 3.3 細砂粒含 口 施釉 見込砂目積み 高台は中央を凹状に削る。 1/3 欠 高径 4.4 Δ (釉) 淡黄褐 口径(10.4) ΥA 口縁 丸味をもった脚部から 器高 7.3 高 施釉 施釉 細砂粒含 40 陶器 碗 3/4 欠 口縁まっすぐに伸びる。 36 高径 5.0 0 口径(10.9) (釉) 灰オリーブ WΧ 口線 磁器 46 器高 7.9 高 施釉 施釉 41 杨亩 染付 精良 36 3/4 欠 高径 5.0 0 釉 青白 口径(11.8) ΥA 口縁 高 施釉 施釉 46 42 磁器 器高 5.9 染付 精良 碗 1/2 欠 36 高径(6.0) 0 (釉) 青白 口径(15.0) 口縁 V 37 43 磁器 鉢 器高 5.5 染付(草花文) 高 蛇目釉剝ぎ 精良 46 見込み針支え? 3/4 欠 高径 7.0  $\circ$ (釉) 青白 口径(10.8) 施釉 Y A 44 磁器 碗 1/4 器高 5.2 染付 高 施釉 精良 見込蛇ノ目釉剝 30 高径 4.8 0 (釉) 青白 底部 V 37 46 45 磁器 碗 高径(3.6) 染付 高 施釉 施釉 精良 1/2 $\circ$ 口径(10.0) 釉 青白 施釉 V 37 46 型紙摺り 高 施釉 46 磁器 रिका 1/2器高 5.6 精良 見込ハマ痕 高径 3.8 0 口径(4.6) 釉白 型押 V 36 46 哭高 1.4 目殻を模す 47 紅皿 1/2 精良 磁器 高径 1.4 0 釉白 口径(5.0) 紅皿 器高 1.6 貝殻を模す。 型押 W37 46 48 磁器 1/2 糖良 高径 1.3 0

(2)

表37 3 • 4 区中段第 5 層出土遺物観察表 土製品

番号	種類	器種	器部	法量(cm)	形 態		手	法	色 調	出土拠点	図版
田力	1至大尺	拉的工工	네마데	万里(CIII)	717 RER	外	面	内 面	焼成	拠点	IZI/IX
49	土師	釜	口縁	口径(26.0) 残高 17.1	口縁内湾ぎみに開く 体部短く丸味を帯びる。	ハケ		ハケ	にぶい黄橙 細砂粒多含 〇	D 30•31	45
50	炊器	すり鉢	口縁 1/8	口径(30.6)	備前Ⅳ期	ヨコナ	デ	ヨコナデ	口 橙褐 他 橙 細砂粒含	C 32·33	
51	磁器	Ш	底部	高径 4.7	高台中央に「三」墨書	高台	削り出し	見込ハマ痕	<ul><li>釉 白</li><li>精良</li><li>×</li></ul>	C 32·33	
52	磁器	碗	底部 1/2	高径(3.8)	染付 見込に鷺文	施釉		施釉	<ul><li>種 白</li><li>精良</li><li>△</li></ul>	V 36	

# 写真図版

# 写真図版例言

1. 遺構の撮影は、各調査担当者が行った。

## 使用機材:

カ メ ラ ニコンニューFM2 他 レ ン ズ ズームニッコール28~85mm フイルム ネオンパンSS・カラーネガ

2. 遺物の撮影は、大西が行った。

## 使用機材:

カ メ ラ トヨ/ビュー45G レ ン ズ ジンマーS240mmF5.6 他 ストロボ コメット/CA-322灯・CB24002灯 (バンク使用) スタンド他 トヨ/無影撮影台・ウエイトスタンド101 フイルフ 白黒 プラス X パン 4 × 5 カラー EPP 4 × 5 一部赤外線写真 (ハイスピードインフラレッドフイルム) 使用

3. 遺構写真の焼き付け及び遺物写真のフイルム現像・焼き付けは、大西が行った。 (白黒に限る。)

### 使用機材:

引 伸 機 ラッキー450M D ラッキー90M S レ ン ズ エル・ニッコール135mm F 5.6 A エル・ニッコール50mm F 2.8 N 印 画 紙 イルフオードマルチグレード III R C

4. 製版 150 線

印刷 オフセット印刷 用紙 マットカラー110kg

【参考】『埋文写真研究』 V O1. 1~4

(大西 朋子)



1 調査地全景〔調査前〕(西より)



2 完掘状況 (南東より)



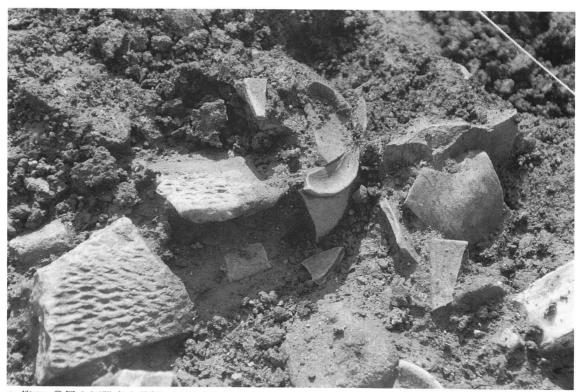
1 木杭検出状況〔1区〕(南より)



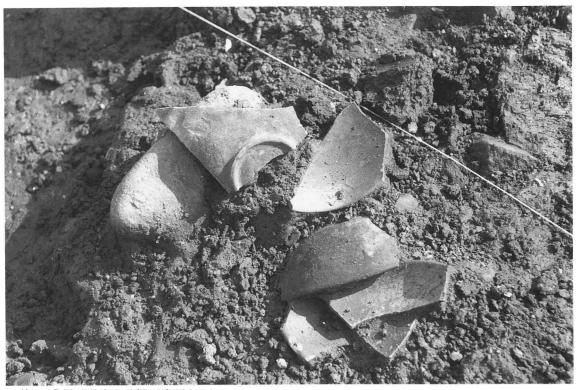
2 木杭検出状況〔2区〕(南より)



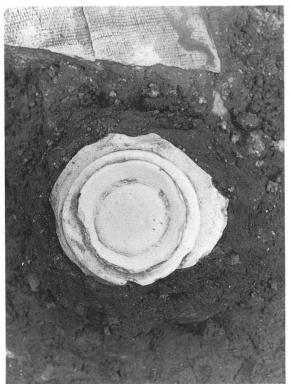
1 第Ⅲ-③層遺物出土状況(南より)



2 第Ⅲ-③層土師器出土状況 (南西より)



1 第Ⅲ-③層瓦器出土状況(南西より)



2 第Ⅲ-③層土師器[托状碗]出土状況 (南より)



3 第Ⅲ-③層羽口片出土状況(南より)



1 第Ⅲ-③層軒丸瓦出土状況(南より)



2 第Ⅲ-③層軒丸瓦出土状況 (東より)



3 第Ⅲ-③層平瓦出土状況(南より)



4 第Ⅲ-③層獣骨〔歯〕出土状況(南より)



1 第Ⅳ層木製品出土状況① (南東より)



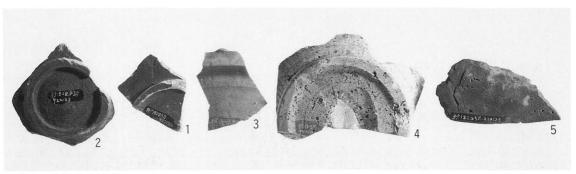
2 第Ⅳ層木製品出土状況② (南より)



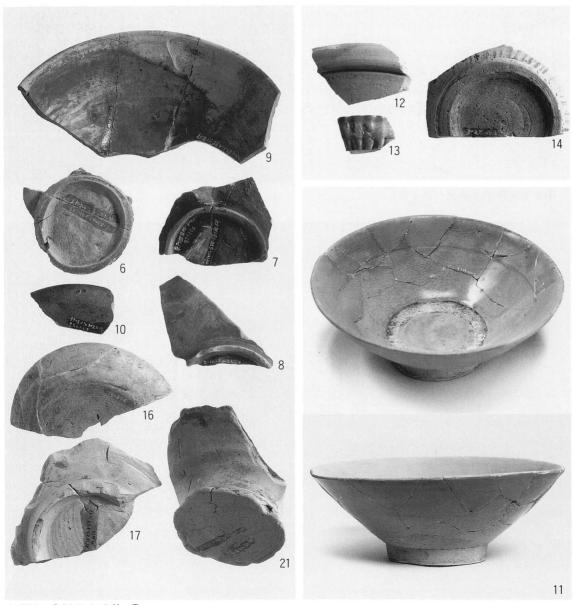
1 第Ⅵ層遺物出土状況(南より)



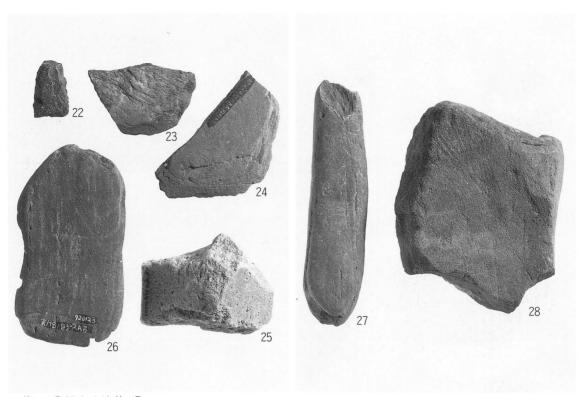
2 第Ⅵ層弥生土器出土状況(南東より)



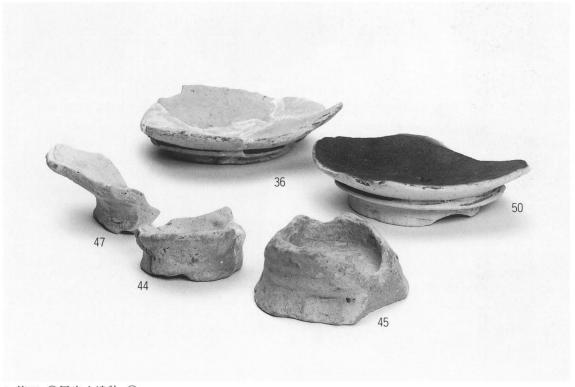
1 第Ⅲ-①層出土遺物



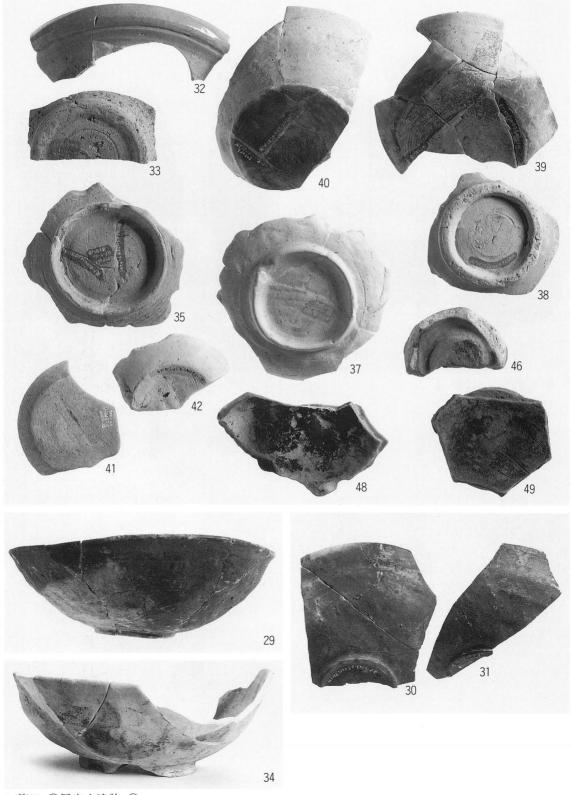
2 第Ⅲ-②層出土遺物 ①



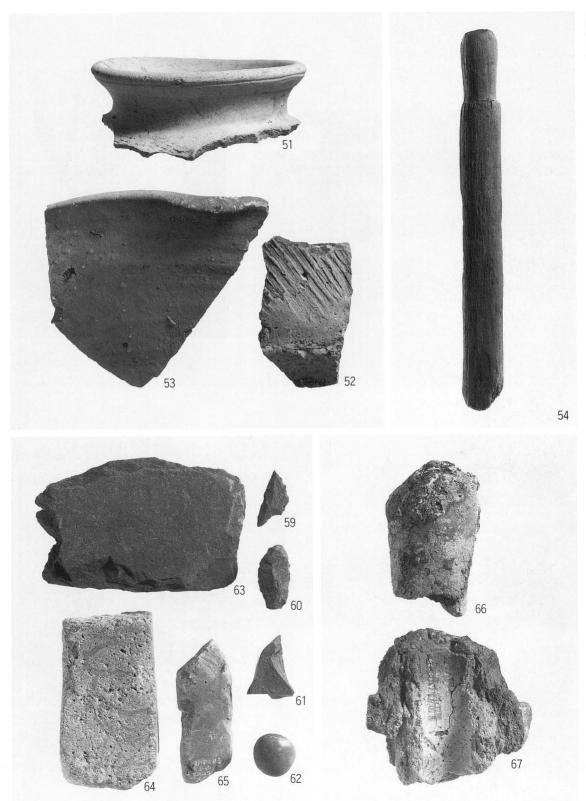
1 第Ⅲ-②層出土遺物 ②



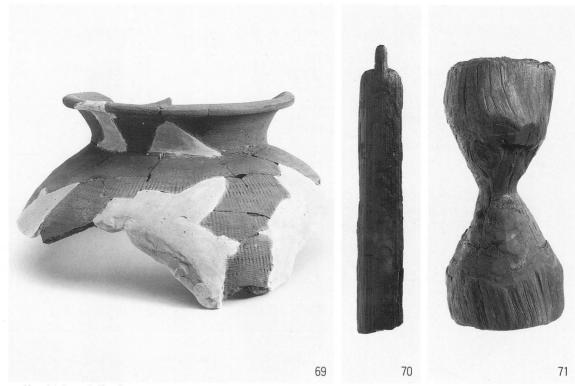
2 第Ⅲ-③層出土遺物 ①



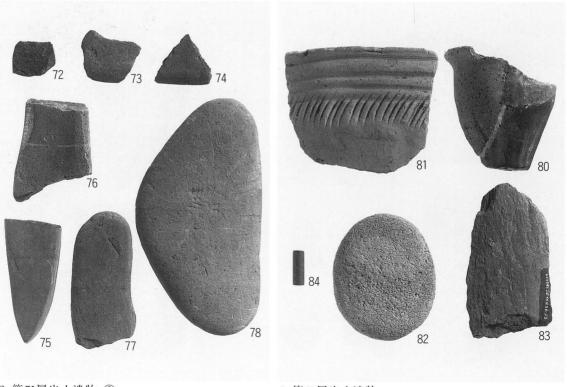
1 第Ⅲ-③層出土遺物 ②



1 第Ⅲ-③層出土遺物 ③

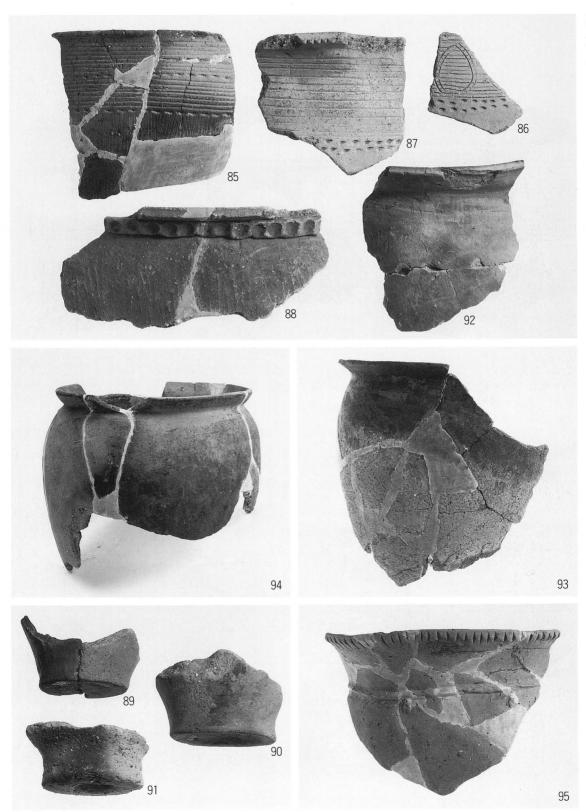


1 第Ⅳ層出土遺物 ①

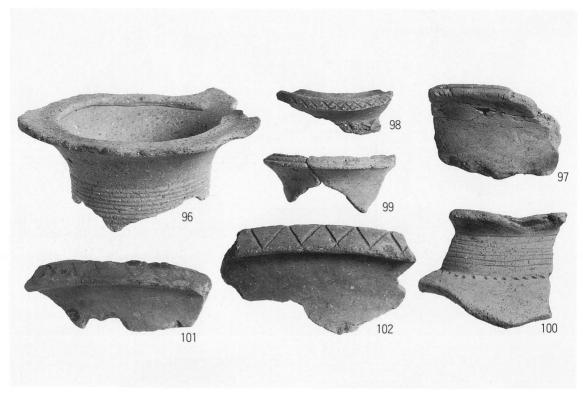


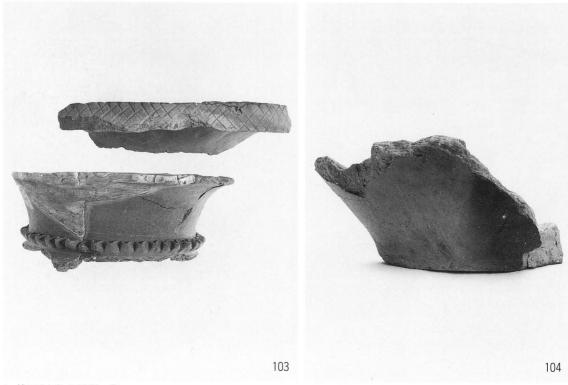
2 第Ⅳ層出土遺物 ②

3 第 Ⅴ 層出土遺物

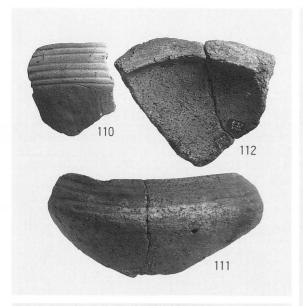


1 第Ⅵ層出土遺物 ①





1 第Ⅵ層出土遺物 ②

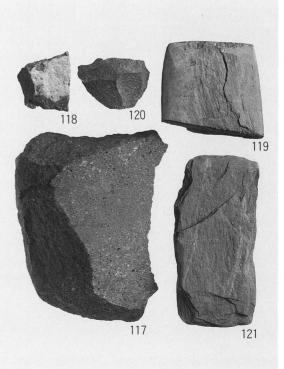






1 第Ⅵ層出土遺物 ③ (109~119)

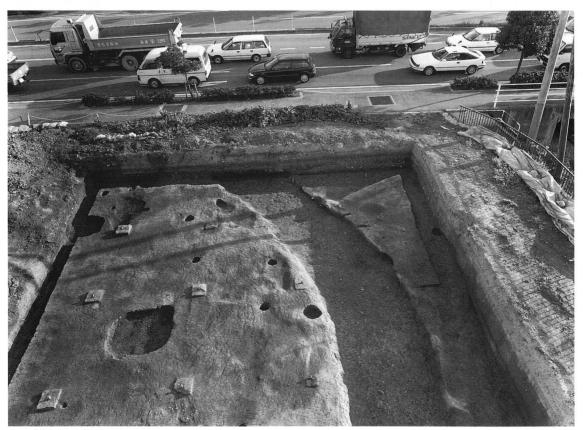




西側トレンチ出土遺物 (120・121)



1調査前全景(南より)



2 完掘状況 (北より)



1 SD 1 完掘状況 (北より)



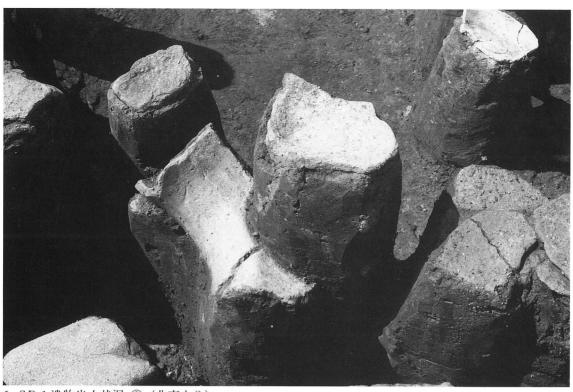
2 西壁土層 (東より)



1 SD 1 遺物出土状況 ① (東より)



2 SD1遺物出土状況 ② (北より)



1 SD 1 遺物出土状況 ③ (北東より)



2 SD1遺物出土状況 ④ (北より)